星新一

ご依頼の件

新潮文庫

星新一
Hoshi Shinichi
(1926—1997)

東京生れ。東京大学農学部卒。1957(昭和32)年、日本最初のＳＦ同人誌「宇宙塵」の創刊に参画し、ショートショートという分野を開拓した。1001編を超す作品を生み出したＳＦ作家の第一人者。ＳＦ以外にも父・星一や祖父・小金井良精とその時代を描いた伝記文学などを執筆している。著書に『ボッコちゃん』『悪魔のいる天国』『マイ国家』『ノックの音が』など多数。

カバー　和田誠

星新一

ご依頼の件

新潮文庫

ご依頼の件

星新一

ほ 4 40

新潮文庫

670

1920193006704

ISBN978-4-10-109840-1
C0193 ¥670E
定価：本体670円（税別）

わたくしは、殺しが専門。必ずやりとげ、そのあとは決してご迷惑をおかけいたしません——。若いころの傷害事件をたねにゆすられ、金をせびられ続けていた男は、殺し屋に頼んで脅迫者を亡き者にした。だが、ひとつだけ気になることが……。ありふれた世界に安住している人々の意識に独創的な方法で働きかけ、人間の心の奥にひそむ願望をユーモアと諷刺で描き出した傑作ショートショート40編。

新潮文庫

星新一の本

ボッコちゃん
ようこそ地球さん
気まぐれ指数
ほら男爵現代の冒険
ボンボンと悪夢
悪魔のいる天国
おのぞみの結末
マイ国家
妖精配給会社
宇宙のあいさつ
午後の恐竜
白い服の男
夢魔の標的
妄想銀行
ブランコのむこうで
人民は弱し官吏は強し
明治・父・アメリカ
おせっかいな神々
にぎやかな部屋
ひとにぎりの未来
だれかさんの悪夢
未来いそっぷ
さまざまな迷路
かぼちゃの馬車
できそこない博物館
エヌ氏の遊園地
盗賊会社
ノックの音が
夜のかくれんぼ
おみそれ社会
たくさんのタブー
なりそこない王子
どこかの事件
安全のカード
ご依頼の件
ありふれた手法
凶夢など30
どんぐり民話館
これからの出来事
つねならぬ話
明治の人物誌
天国からの道
ふしぎな夢
つぎはぎプラネット
進化した猿たち The Best

星新一編訳

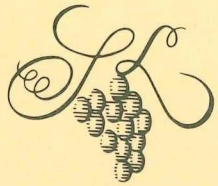
アシモフの雑学コレクション

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

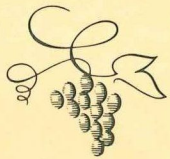
ご依頼の件

星　新一著



新潮社

ご依頼の件　星新一著　新潮文庫



新潮文庫

ご依頼の件

星　新一著

新潮社版

4237

目　次

タブー……九
ご依頼の件……一三
れいの女……一七
夜の会話……二八
真相……四六
初夏のある日……五一
防止対策……六〇
くしゃみ……六四
アリバイ……七七
外郭団体……八四
出現したやつ……九七
ある休日の午後……一〇三
待遇……一一八
たのみごと……一二八
気の迷い……一三三
静かな生活……一三七
才能……一五二
話し声……一六四
あるシステム……一六八
新しい車……一七六
こころよい相手……一八二
むこうの世界……一九五
運……二〇九
組み合せ……二一四
都市化現象……二三六
金銭と悩み……二三四
出張……二三九
退院……二五五
マドラー……二六四
バーであった男……二七四
ひと仕事……二八四
文字が……二九二
おととい……二九八
もらった薬……三〇五
西風……三一三
輝く星……三三一
やつらのボス……三三九
依頼はOK……三四六
結晶……三五八
窓の奥……三六四
あとがき……三七二

挿絵　和田誠

ご依頼の件

タブー

夜もおそい時刻。しかし、このあたりは盛り場のため、まだ、にぎわいが残っている。

ひとりの若い女が、道ばたで手をあげた。空車のタクシーがとまる。ドアが開き、女はなかのシートにかけ、行先を告げる。それを聞き、運転手は顔をしかめた。

「気が進みませんなあ」

「なんてこと言うのよ。あたしに、なにか気に入らない点でもあって……」

女は、腹立たしげな声で言う。

「そうじゃ、ないんです。その方角が、なんですよ。しかも、こんな時間……」

「わけがわからないわ。とにかく、あなた、これが仕事でしょ。お客を乗せ、たのまれた場所まで運び、代金をもらう。タクシーとは、そういうものなんでしょ」

「まあ、おっしゃる通りですけど」

「どうしてもいやというのなら、おりてあげてもいいわ。ほかにも車が走っているん

だし。だけど、ナンバーをひかえておいて、あなたの会社に電話で文句を言うかもしれないわよ」

「わかりました。行きますよ」

車は走り出す。しばらくして、女が聞く。

「まだ怒ってるの……」

「そんなこと、ありませんよ。気が進まないと口にしただけで、怒ってたわけじゃありません。しかし、考えてみると、結果的にお客さんにいやな思いをさせたわけで、おわびします」

「なにか、わけがありそうね」

「そうなんです」

「聞かせてよ」

「でも、あまり楽しいことじゃ、ありませんのでね」

「いいわよ。あたし、変った話を聞くのが好きなの。いまの世の中、だれだって、そうじゃないかしら」

女にうながされ、運転手は言った。

「よくあることなんでしょうけどね、このあいだ、女の人を乗せたんです。それで、

この先に墓地があるでしょう」

「そのへんでふりむいたら、席から消えていたとでもいうの……」

「そうなんです」

「やっぱりあるのね、そういうことって」

「まだ、そのさきがあるんですよ。一回だけだったら、やがては忘れるでしょう。しかし、そのあと、また同じことがあったんです。若い女の客、その墓地。ね、おわかりでしょう。わたしがこの方角をいやがるのが」

「そうとは知らなかったわ。あなたにとっては、むりもないわね」

「いやな話でしょう。いかがです、ほかの車にお乗りかえになったら」

「めんどくさいじゃないの。それに、そんなタブーを作り上げちゃうと、あなたのためにもならないと思うわ」

「どうでしょうね。ほら、墓地が近づいてきましたよ」

車はスピードを落さなかった。

女は席で驚きの声をあげた。

「あら、どうしたの。あたしの足、見えないわ。手でさわっても、感じない。なくなっちゃったのよ。消えちゃったのよ。あ、もう腰もない。おなかまで消えてきたわ。

なぜなのよ、どうして、こんなことが。胸もよ。だめだわ。いやよ、いや。助けて。どうかして。あたし、消えたくない。お願い、助けて……」

悲鳴だけが残り、まもなく、それさえも消えた。運転手は、ふりむいてつぶやく。

「まただ。いったい、どうなっているんだ。さっぱりわからん。けっきょく、代金はもらいそこねだ。だから、こっちの方角へ女を乗せるのは、いやなんだが……」

ご依頼の件

「どうです。ご満足いただけましたでしょうか」

やってきたやつに言われ、その男は大きくうなずいた。

「ああ、やつが死んでくれて、ほっとしたよ。なにしろ、わたしの若いころの傷害事件をたねに、社会的な地位を失わせてやると、ここ何年にもわたって金をせびられつづけだったんだからな」

「これからは、そのご心配はなくなります。ゆすりを引きつごうなんて、けちなことはいたしません。わたくしは、殺しが専門。かなりの費用はいただきますが、ご依頼の件は必ずやりとげ、そのあとは決してご迷惑をおかけいたしません。あなたさまが警察に呼び出され、なにか聞かれるということなども……」

「そりゃあ、そうだろうな。なにしろ、やつは飛行機の事故によって死んだのだから」

「でしょう。これだったら、アリバイがどうの、凶器がどうの、そんなやっかいな問

題は、一切ないわけでございます」

殺し屋は、いささかとくいげだった。しかし、男は顔をくもらせている。

「そりゃあ、結果としては、みごとなものだよ。しかし、気になるのは、手段についてだ。わたしは、きみがなにか巧妙な方法を使って、やつを殺すものとばかり思っていた」

「もちろん、そういうやり方もございます。しかし、それだと、あなたさまにも、いちおう疑いがかけられることになります。ご依頼いただいたからには、少しでもそんなことがないようにというのがモットーでして……」

「しかし、そのために、なにもほかの多くの人を巻きぞえにしなくても……」

「そんなことは、どうでもよろしいではございませんか。遺族たちには、まとまった賠償金が渡るのです。あなたさまのご指名になった、あの人の遺族にもです。そう気の毒がることはないと思いますね」

「それにしても、ほかに方法がなかったものかな。あまりに、ひどすぎる。安心して眠るどころか、悪夢にうなされることになる」

男は身ぶるいした。相手を見る目つきも普通ではなくなっている。

「弱りましたな。そうなっては、アフターサービスが万全といえなくなってしまいます。仕方ありません。わたくしへの尊敬の念が落ちるのを覚悟で、事情をお話しいたしましょう。じつは、同業組合といったものができておりまして、たえず連絡をとりあっているのでございます。依頼された人の数がある程度にまとまりますと、言葉たくみに持ちかけ、ひとまとめにしてしまうのです」

「なんだと。すると、あの乗客の全員が、殺されるようにたのまれた連中だったというわけか」

「さようでございます」

「しかし、機長やスチュワーデスは……」

「機長はある女から、スチュワーデスはある男性から、殺してもあきたらないほどうらまれていたわけでして」

「しかし、あの航空会社の社長、事故の責任をとって辞任したぜ」

「社内のある派閥をきらい、それに属する人たちを徹底的に冷遇していて……」

「そうだったのか。だんだん、わかってきた。だったら、わたしひとり深刻に悩むこともないな。しかし、それにしても、すごい組織だなあ」

「では、これで……」

殺し屋は帰っていった。

その件について忘れかけたころ。男は友人に、こう話しかけられた。

「豪華な大型ヨットで、船旅を楽しむ会ができたんだ。前からあこがれていたので申し込んだんだが、急な仕事がわりこんできた。いまいましいことにね。券のキャンセルは、できないんだ。捨ててしまうのも、もったいない。きみに進呈するから、かわりに楽しんでこないか」

れいの女

ここは、あるデパートのなかの一室。デパートというと、はなやかさを連想する人も多いだろうが、この部屋に限って、そんな感じはまるでない。つねに、緊張がみなぎっている。つまり、警備関係の部門なのだ。

各階の要所の天井に、目立たぬようにテレビカメラがとりつけられており、ゆっくりと回転している。そこからの映像によって、あたりのようすを知ることができる。リモコンで、カメラのむきは自由に変えることも可能なのだ。

部屋の壁に、いくつもの映像がうつっているのは、ちょっとした壮観だった。

「きょうは、ずいぶんとお客さんが多いようですね」

新しく入社した部員が言い、部長はうなずく。

「ああ、月末だし、天気もいいしね」

お客の安全についての注意も、ここの仕事。

ブザーが三回つづけて鳴った。ランプの点滅により、一階の案内受付係からのとわ

かる。大きな鞄を持った客が入ったとの合図。

そこの部分の画面を見ると、鞄を持った青年がうつった。ビデオのボタンを押し、録画開始。部長はまた、一階をパトロールしている私服の警備員にトランシーバーで呼びかける。

「鞄を持った青年に注意」

目立たぬイヤホーンにより、それが伝えられる。ハンケチのなかにしくまれた送信器からの返事が、かえってくる。第三者には、汗をふいているとしか見えないだろう。

「了解」

時限爆弾か、可燃性のものが入っていたら、一大事になりかねない。万一、火災発生にでもなったら、その場所により、どの方向にお客を誘導し、どの順でシャッターをおろすか、コンピューターから指示が出てくる。各階のスピーカーからの呼びかけも、あらかじめ録音して準備してある。

被害は最少にくいとめられることになっているが、なにも起らないのに越したことはない。一階から報告が入る。

「アフターシェイビング・ローションを買い、出て行きました」

「ごくろう。パトロールを、つづけてくれ」

部長はほっとする。ただの買い物客だったのだ。トイレに入ったりしなくてよかった。そうなると、もうひとりの警備員をその場所へ急行させ、そこへなにか置いていったかどうか、調べさせなくてはならない。尾行もまた、つづけなくてはならない。安全とは、手間のかかることなのだ。

部長ともなると、長い経験で、ここの仕事のこつを身につけている。多くの画面に目をやりながら、挙動不審の人物を見つけ出す。

「特売品売場の警備員、連絡して下さい。電話でかまいません」

その指示を受け、店員服の女性警備員は、館内電話で応答した。

「はい、なんでしょう」

「茶色のスカートの、二十歳ぐらいの、髪の長いお客がいますね」

「はい。あたしも気になっていました。スリのようですね」

「たぶん、そうでしょう。いちおう、人相はビデオに収録しました。犯行をやらせてつかまえるのは、きょうのように人が多いと、さわぎになります。警戒されていると感づかせ、なにもしないで帰るようにしむけて下さい。男性のパトロールも、そちらに行かせます」

モニター画面で見ていると、スリらしい女は二カ所からの視線に気づき、その場を

はなれた。かなりの腕前なのだろう。そういうのに限って敏感なのだ。追跡がなされ、出ていったのが確認された。

ブザーが鳴って、三階のパトロール員からの連絡が入った。

「高校生らしき少年が、文房具売場で、新型のホッチキスを万引。どうしましょう」

「いつもの場所まで連行し、品物を回収して下さい」

そこは階段の踊り場の片すみで、あまり人目につかないところ。しかし、テレビカメラと、かくしマイクがしかけられている。警備員の話し声が伝わってくる。

「いくら欲しくても、ああいうことをしてはいけませんよ」

「なんのことです」

と少年の声。

「わたしは、このデパートの警備員です。興味半分でなさったのでしょうが、よくない行為です。右のポケットの品物のことですよ。それをおかえしいただけますか、それとも代金をお払い下さいますか……」

部長からの指示が、警備員の耳にとどく。

「顔は、ビデオにおさめた。コンピューター照合によると、常習者ではない。おだやかに解決してやれ」

少年は、ポケットの品を出して言った。

「かえします。もう二度としませんから、許して下さい」

「悪かったと気がつけば、いいのです。将来、立派な社会人になって下さい。くだらないことで道をあやまっては、いけません。お友だちがこのようなことをしようとしたら、注意してやめさせて下さい」

「はい」

「じゃあ、お帰りになってかまいません」

なんとか片づいた。一日に何回か、こういうことが起る。部長は、その警備員と特売品売場の階のと、受け持ちを交代させた。警備員がどの人かを知る、作戦のひとつということだってありうるからだ。

一階の案内受付係から、ブザーにつづけて、電話での報告が入った。

「あの、れいの女が、いま、なかに入りました。渡されてあった写真とくらべて、まちがいありません。地味なデザインですが、上品なグレーの服です。革製の大きなバッグを持っています」

せきこんだ口調だった。部屋の空気が張りつめたものとなる。部長はテレビカメラの方向を変え、そこの画面をのぞきこむ。引出しから出した写真にも目をやる。

「たしかだ。きょうくるとはな。すべて、うまくやりとげなくてはならない……」

店内放送で、かねて用意のテープの声が流される。まず、一階にむけて。

「ペット売場でお買い物をなさったお客さま。お忘れ物をなさっておりますから、お戻り下さるようお願いします」

これは暗号なのだ。各売場の主任にだけ通じる。なんということのない文句だが、声がほかの場合とちがう。一種の警戒態勢。警備員の指示に注意するようにとの、指令だ。

部長は画面から画面へと、その女の姿を追う。五十歳ぐらいの、いい家庭の夫人といった外見。若い部下が聞いた。

「なんで、大さわぎするのです、あの女に……」

「まだ、話してなかったかな。あとで教える。なにはさておき、見失わないようにしなければ……」

「焦点がさだまらないというか、なにかにとりつかれたような目つきですね」

部長は、二階のパトロールに連絡した。

「グリーン・ダイヤモンド。中央エスカレーターで、二階へむかう」

それが、れいの女の略称なのだ。

「了解。目標をキャッチ」

二階の警備員が応答。館内アナウンスの声が、その階に流れる。

「ペット売場でお買い物をなさったお客さま。お忘れ物を……」

画面を見つめながら、部長が言った。

「この件について事情を知っている者、応援に行ってくれ。平穏のうちに、ことを進行させなくてはならないのだ」

部屋のなかから三人が出ていった。要領を知らない若い部員だけ残して。

報告が、つぎつぎに入る。

「グリーン・ダイヤモンド、三階へ上りました。婦人服売場を、西へと歩いております。ワンピース売場、ツーピース売場、セーター売場……」

部長の目は、その画面にくぎづけ。どこかでスリが仕事をしようが、食堂で火事が起ろうが、こんなぐあいでは気づきそうにない。若い部員は、そのほうが心配になっていた。

「三階の目標前方の警備員、売場の主任に、それとなく合図をして歩け……」

さらに報告がとどく。

「目標のグリーン・ダイヤモンド。スカーフ売場の前で止りました。あれこれ、いじ

っております」
「よく注意しろ。なんとかビデオにとれそうだ」
売場の主任が、そこの店員に声をかける。その一瞬のあいだに、女の手がすばやく動いた。一枚のスカーフが、買い物袋のなかに移された。あざやかなもので、あらかじめ注目していなかったら、ベテランの警備員の目をもごまかせただろう。報告が入る。
「グリーン・ダイヤモンド。エスカレーターで四階へ上りました。まだ、なにか行動するように思われます」
「よく見張れ。それから、スカーフ売場、いまの品の確認を急げ」
部長の目は輝いていた。また報告。
「目標。食器売場へ向いつつあります。調理器具売場、ナイフやフォークの売場、あ、ガラス食器売場で足をとめました……」
女は、水飲み用のグラスをひとつ、さっと袋へ入れた。店員のひとりが気づいたが、警備員が押しとどめた。
「グリーン・ダイヤモンド、グラスを入手。エレベーター乗場へと歩いております。どうやら、乗りそうです。下へのを待っています。怪しまれるといけませんので、わたしは同乗しません。他の者たちに連絡して下さい」
部長は、各階の部下に指令。
「目標のグリーン・ダイヤモンド。これより、南のエレベーターに乗る。注意せよ。地下まで行く可能性もある」
まもなく、報告。
「こちら一階。グリーン・ダイヤモンド、ただいまエレベーターから出てきました。出口へとむかっております。いま、当店から外へ出ました」
「よし。全員、ごくろうだった」
部長はほっと息をついて、ひえたお茶を飲んだ。
やがて、売場から万引されたのと同じ品がとどけられた。スカーフとグラスだ。
「六角形のグラスだな。それと、スカーフか。この模様のに、まちがいないだろうな。ビデオのと見くらべてみよう……」
それが、たしかめられた。
「……さっそく、店長へ報告してこよう。結果を待ちかねているはずだ」
そして戻ってきた部長に、若い部員が質問した。
「いったい、なんであまで大さわぎしたのです。けちな万引なのに。それに、つか

まえもしないで逃がしてしまう」

「これには、わけがある」

「大株主の奥さんかなにかですか」

「そんなたぐいじゃ、ないよ。毎年、いまごろ、やってくるのだ。そして、なにかを万引してゆく。ことしは、まずスカーフ。あの色彩と模様だ。それをもとにした、服とか水着とかクッション。それらを大量に作るよう、注文しておく。ほとんど売れてしまう。また、六角形のグラス。その品物はもちろん、六角形の家具とか、花びんとか、それらも多くの人に好まれる。つまり、そういうわけなのだ」

「はじめて知りました。となると、たしかに見のがせないことですね。あの女の人、どこに住んでいるんでしょう。あとをつけさせたことは、ないんですか」

「ないね。よけいなことをして、これだけのことを、ふいにしたくないからね。店のためにもならない」

「いつごろからです」

「さあ、前任者からの引きつぎだから、よくは知らない。勘の鋭い人だった。普通の万引とは、まるでちがう。なにかあるのでは、と思ったのがもとだったとか」

「それにしても、なぜ……」

「いいか、われわれ商売をしている者にとっては、なによりも結果が大事なのだ。理屈どおりやってもうかったなんて、聞いたことがあるかい」

若い部員は、うなずく。

「そうですね。流行というものが、どうしてうまれてくるのかふしぎでしたが、その一端がわかったような気分です。少し利口になりました」

夜の会話

その男は夜のハイウエイを車で走っていた。都会からはなれた地点でもあり、おそい時刻ということもあり、すれちがう車はほとんどなく、前後を走るのはまったくなかった。変な物音がしはじめた。

「どうもエンジンの調子がおかしいな。こんなことは、はじめてだ。どうしたものだろうか」

男は首をかしげ、道のはじに車をとめ、そとへ出て、伸びと深呼吸をした。少し休ませればいいだろうといった程度の機械知識しか、持ちあわせていなかった。

空は晴れ、丸い月が照っていた。見あげていると、視界のなかに、なにか光ったものが入ってきた。航空機かと思ったが、ライトの点滅をやっていない。それは突然、直角にまがり、停止した。

「あれれ。航空機のたぐいだったら、あんなふうに動くわけがない。もしかすると……」

UFOという言葉が頭に浮かんだ。車の調子がおかしくなる。空の物体が直角にまがって停止する。男も、それぐらいの知識は持っていた。

べつに、UFOの信者というわけではなかった。存在については半信半疑。できるものなら、一回ぐらいは見たいものだ。そういった、平均的なタイプの人間だった。

空中で停止した光の点は、ふたたび動きはじめた。ゆらゆらと左右にゆれながら、高度を下げてくる。

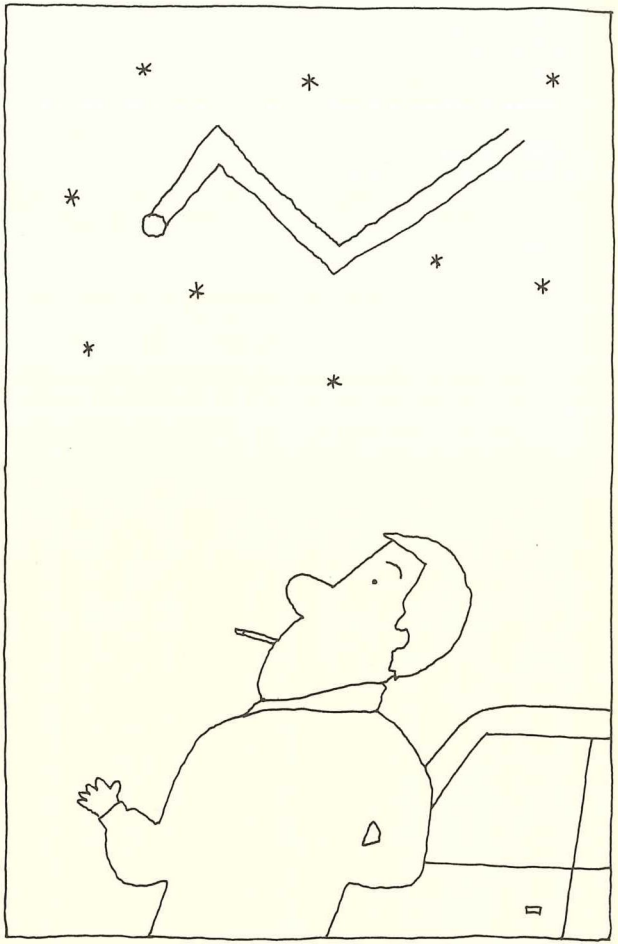
「これは、まちがいなしのUFOだ。ヘリコプターだって、あんな飛び方はしない。それに、なんの音もたてていない。それにしても、ここで見ることができるとはなあ」

近づくにつれ、円盤状の形がはっきりしてきた。周囲に窓のようなものがついていて、光の点が環状をなしている。男が目で追っていると、それは林のむこう側へおりた。物音はしなかったが、飛び立たないところから、たぶんそこにいるのだろう。

「このチャンスをのがしては。そばでよく見てやろう」

男は小形ライトを手に、林への道をたどった。月の光が明るい。ライトは、林の道で足もとを照らすのに必要だろう。

その時、林のなかから、ひとりの人物があらわれた。からだにぴったりの、銀色の



ユニフォームのようなものを着ている。顔の色の青みがかっているのは、月光のせいだけではないようだ。耳は大きく、少しとがっている。ヘルメット状のものをかぶっていて、髪の色はわからなかった。

男は会ったとたん、ぞくっとした。あれに乗ってきたやつのような気がしたのだ。とにかく異様だ。

とりあえず男は、林のむこうを指さし、つぎに相手を指さし、それから首をかしげてみせた。あれに乗ってきたのかと、質問したつもりだった。相手はうなずく。どうやら、UFOの乗員らしい。しかし、こんなことになるとは夢にも考えていなかったので、なにを話したものか見当もつかなかった。

「こんばんは」

男が言うと、相手も応じた。

「こんばんは」

「あいさつの言葉ぐらいは、知っているというわけか。しかし、意志の疎通となると、ひと苦労だろうな」

男がつぶやくと、相手は言った。

「ご心配なく。会話に関してなら、なんの問題もありません」

あまりのことに、男は目を丸くする。

「こりゃあ、驚いた。ぺらぺらじゃありませんか。こんなことって、あるんだろうか。もしかしたら、あなた、メーキャップでそんなふうに見せてるけど、じつは……」

「とんでもない。この皮膚の色は、洗ったっておちませんよ。とがった耳をひっぱってごらんになってもいい。これが特徴なんですよ」

「それにしては、言葉がうまい。うますぎる」

「そりゃあね。どうしようもなくへたなのよりは、いいでしょう」

「そうか。わかってきたぞ。知能程度が高いので、これぐらいの言葉は、あっというまにおぼえ、使いこなせる……」

「べつに、そういうわけでも、ないんですけどね」

「テレパシーではないでしょう。ちゃんと声になっていますものね。翻訳機を使っているとも思えない。機械の口調じゃ、ありませんものね」

「おっしゃる通りです」

「なんだか、夢を見ているような気分だ。ことが、うまく運びすぎている。これで、いいのだろうか。催眠術にかけられてるのかな」

男は自分に話しかけ、からだをつねってみた。痛かった。相手は少し笑って言った。

「なるほど。そう考えるのも、もっともですな。わたしがぎくしゃく動き、たどたどしく話したほうが、もっと真実性が出るんでしょうね。しかし、そうもいかなくてね」

「ひとつ、ここで事態の整理をさせてもらいますよ。あなたは円盤状の乗り物で空中を飛び、林のむこうにおりた。そして、歩いてきて、わたしに会った。そうなりますね」

「ええ」

「どうでしょう。あれを、くわしく見物させてくれませんか」

「それは困ります。着陸と同時に、照明はすべて消してしまいました。飛んでいる時は、いいんですよ。しかし、光をつけたまま地上にあると、なにしろ目立つんですな。さまにならないってとこですかね」

「そういうものかも、しれませんね。地面の上の無人の円盤の話など、聞いたことがない」

「でしょう」

「しかし、UFOが本当に実在し、あなたのような人が、それに乗っているとはねえ。なにかで読んだり、テレビで見たりして少しは知っていましたが、もうひとつ、はっ

きりしなかった。それが、こんなぐあいに体験できるとは。運がいいんでしょうね」
「さあ、どうでしょうかね。たまたま、あなたが順番のはじめのほうになったというだけのことなんですよ」
そう言う相手を、男はしげしげと眺めた。異様なムードは持っているが、どうしようもなくかけはなれたズレといったものは感じなかった。げんに会話をかわしているし、背の高さもそうちがわない。やがて、男は質問すべきことを思いついた。
「あなたは、宇宙人なんでしょう」
「そういうことに、なりますね」
「同じ太陽系といいたいとこですけど、火星や金星に生物はいない。木星や土星にあなたのような住人がいるとは思えない。となると、他の太陽系ということになる……」
「そうですね」
「星と星って、近いようだけど、相当な距離ですよね。よく、それを克服する方法を発見しましたね」
「まあ、そういったむずかしい議論は、やめておきましょうよ」
「説明しても、地球人には理解できないというわけですか」

「いえ、そうじゃないんですけど、どうでもいいじゃありませんか。わたしは、ここに来ているんだし」
こみいった理論を聞かされても、頭に入らなければ同じことだ。男は、つぎの質問を思いついた。
「どこの星から、おいでになったのです」
「どこでもいいじゃ、ありませんか。空には数え切れないほどの星がある。ほら、あそこのあれと指させば、あなたはいちおう満足するでしょうけど」
男は頭に手をやった。妙に筋が通っているのだ。それでいて、どこかひっかかる。
「あなたは、信用できるかたのように見えますねえ」
「そうでしょう。わたしは、そういう存在なのです」
しだいに、親しみのある表情になってきた。そのため、男も話を進めやすくなった。
「どの星かの質問はやめますよ。星座名が共通しているはずがない。場所なんか、どうでもいいことです。それより、どんな星なのか知りたい。いったい、そこはどんなふうなのです」
「これが、最も困る質問なのですよ。そりゃあ、でまかせをしゃべれないことはありません。しかし、うそをつくことは、わたしは好きでないのです。といって、くわし

く話すこともできないのです」
「地球よりはるかに文明が進んでいることは、たしかなんでしょう」
「それについてのお答えなら、イエスです。しかし、なにがどれだけ進んでいるのかとなると、話すわけにはいかないのです」
「簡単なことで、いいんですよ。どんなものを食べているとか、なにが楽しいとか、なにがいやだとか。そういう日常的なことでいいんですけど、だめですか」
それぐらいならと男は期待したが、相手は首を振った。
「ご希望にそえなくて、申しわけありません。そういうことについてのほうが、なお話しにくいのです。ヒントすらもらせない」
せっかく宇宙人と会えたというのに、これではどうしようもない。ひとに話したら、ばかにされる。しばらく考え、男は言った。
「こんなこと、言いたくないんですけど」
「どうぞ、ご遠慮なく。お答えできることと、できないことはありますが」
「最終目標は、この地球の侵略にあるんじゃないのですか。いまは偵察の段階。いろいろと調べてまわっている。しかし、自分たちのこととなると、弱点を知られるとぐあいが悪いので、話さない。ある種の病気にかかりやすいなど、秘密にしておかなければならない。だから、なにがいやだなどという生活に関する質問には答えない」
「ばかばかしい。わたしが、侵略の偵察員のたぐいに見えますか」
「見えませんね。だけど、高度の文明の持ち主なら、平和的によそおうことぐらい、簡単なんじゃありませんか」
「高度の文明の持ち主がその気になれば、そんな手間のかかることはしませんよ。占領なんか、あっというまでしょう」
そう言われ、男はうなずく。
「たしかですね。そこなんですよ、気になってならないのは。UFOを見た人は、たくさんいる。驚かされたとかいう人の話はよくありますが、多人数に対して攻撃がなされたという事件はないようです」
「でしょう。わたしたちは、平和的なのです」
「平和的というより、攻撃的な性格を生れつき持ちあわせていないといった感じですね。となると、なんのために地球の空でうろちょろしているのかですよ。お願いですよ。それぐらい教えてくれても、いいでしょう」
せめて、その答えでも聞いておかなくては、会ったかいがない。飛行方法も、どの星かも、どんな生活かも、聞くのはやめたのだ。

「お話ししてもいいんですけど、理解してもらえるかどうか」
「なんとか理解するよう、努力しますよ。こんなチャンスは、めったにないのですから」
「どこから話したものですかな。あなたは、神の存在を信じますか」
やっと相手がその気になったらしいと思ったら、変なことを持ち出してきた。男はとまどう。
「ううん。やさしいようで、むずかしい問題ですね。まあ、信じている人にとっては、存在しているんでしょうね」
「信仰によって病気がなおったり、生活がよくなった人がある。そこに関連があると、みとめますか」
「そうなりますね。信仰という原因が、好ましい結果をもたらした。ですから、その人にとっては、神は存在しているといえましょうね」
「あなたご自身は、どう思っています」
答えなければ、先へ進めないのだろう。
「難問ですなあ。考えてみると、人類は長い歴史のなかで宗教というものを作り、持ちつづけてきた。宗教に関係した建物や団体も多い。現実に信じている人は多いのです。ないとは断言できません。なにか、あるんでしょうね。消極的な支持といったところですかな」

「それなのに、なぜ神がその姿を示さないのですかね。ふしぎに思いませんか」
「そういえば、そうですね。ありがたみがなくなるせいかな。その必要がないせいかな。それでも、神のお告げを聞いたとか、夢うつつで会ったとかいう人はいるようですよ」
「しかし、数は少ない。なぜ神があらわれないのか、その原因はこうです。宗教の種類が多すぎるのです。それぞれが、独自のイメージを持っている。これこそ典型的な神というものが、ないのです。統一すればいいんでしょうが、それをやろうとしたら白熱の議論となり、えらいさわぎになります」
「かもしれませんね。そこへゆくと、幽霊のほうが、まだ問題点が少ない」
思いついたように男が言うと、相手はうなずいた。
「そうそう、そうなんですよ。心霊現象というのがある。これも似てますね。見たという話があり、ありうることだと思う人がふえ、見た人の話の共通点がふえ、しだいに形づくられ、出現しやすくなる。出現に対する抵抗というものが、なくなる……」
相手は、しばらくだまった。男は首をかしげ、考え、やがて、立ったまま腰のあた

りをたたいた。

「そうか、あなたの言いたいことが、いくらかわかってきたぞ。そこへ話を持ってきたかったのか。UFOも、そのたぐいなんですか。ううん、そういうものとは、考えたこともなかった」

「しかし、そうなのです」

「すると、あの円盤状の乗り物も、あなたも、人類の想像の作り出した産物……」

男は、あらためて相手を見なおす。

「思念と呼んだほうが適当でしょうね。かなりの人類の人が、存在を信じている。見た人もあり、見たと思いこむ人もある。そして、その共通点がふえてゆく。まるでちがった形を考え、こうでなければならないといった議論の対立はない。信じない人はあるけど、積極的な否定論の人は少ない。こうなると、出現せざるをえないのです。強力な需要があれば、やがてそれはみたされる。これが人類の持つ習性なのです。能力と呼んでもいいかもしれない」

「そんな前例は、あるんですか」

「記録に残る歴史のなかとなるとね、幽霊とか、心霊現象とか、奇跡とか、たくさんはありませんね。多くの人たちの思念が、そろわないとならないのです」

「あなたが、大衆の思念の産物とはねえ。さわっても、かまいませんか」

「ええ、握手でもしますか」

相手がさし出した手を、男はにぎる。

「ちゃんと感じましたよ」

「あなたが感じたと感じたのです。五感で感じれば、存在することになってしまうのです。たとえ、思念の産物にすぎなくてもね。つきつめると、存在とはなにかの大問題になってしまいますがね」

「あの円盤状の乗り物も、さわれるわけですね」

「ええ。しかし、内部に入られては困るのです。推進機関が、いいかげんですから。UFOの外見についての思念はほぼ共通しているんですが、推進機関となると、だれも考えない。なんとなく、それらしくなっているだけです」

「いったい、あなたは宇宙人なのですか」

「地球人の思念の生み出した宇宙人、といったところでしょうね。ですから、わたしは自分のことを宇宙人と思っていますよ。外見も、それらしい。洋服を着たトカゲじゃ、ぐあいが悪いのです。宇宙人じゃなくなっちゃいますものね。しかし、どこの星と聞かれても、答えようがない。また、その星での生活を聞かれても、説明のしよう

がない。人びとの思念は、そこまで及んでないからです」
「あなたのようなのは、ほかにもいるんですか」
「需要に応じてですよ。見たという人がふえ、見たいという人がふえる。各所に出現しなければなりません。神は、見えないからいいですよ。唯一でありながら、同時に多数の人とかかわりあっている」
「思念の産物とはねえ、UFOが……」
男はまたも、ため息をつく。
「そうふしぎがることは、ないでしょう。世の中のものは、みな人間の思念の産物ですよ。ただ形となるまでの経過に、差があるだけ。飛びたいと思わなかったら、飛行機なんか出現しなかった。ピラミッドからテレビまで。電波なんか、感知できないのにねえ。いい例がある。シャーロック・ホームズって人はどうです。存在していますよね。いないなんて主張する人は、いますか」
「それにしても、なんでUFOなんてことになったんでしょうね」
「原因は、いろいろあるでしょうね。あまりに長いあいだ、戦争をやりすぎたのも、そのひとつでしょう。地球のせまさ、宇宙の広さを実感しはじめたのも一因でしょう。思念の対象が、徐々にそんなところにむけられたのです」

「ありうることですな。そんな気になってきた。あなたは、人類の思念の産物。しかし、ただ存在してればいいってものじゃありませんよね。思念のなかには、期待もこめられているわけでしょう」
「そうなんです。そこなんですよ、わたしとして、いちばん困っているのは。人間は欲求によってロボットを作り、コンピューターを作り、ジェット機を作り、さまざまなものを作った。それぞれに、ちゃんと役目を持たせている。しかし、わたしはちがう。こんなぐあいに宇宙人を作っておきながら、その役目となると、ぼやけたまま」
「そんなことは、ありませんよ。核戦争を防いでもらいたいとか、世の中をよくしてもらいたいとか……」
「その程度なんですよ。それ以上の、くわしい形の思念じゃない。わたしは、救世主あつかいなんだ。それで、どういう形で、どういう社会にとなると、おまかせしますなんだね。なにをやればいいかだ」
「人類は、救世主を待望していましたからね」
「そうなんだな。いい対象をみつけたとばかり、その思念は強くなる一方。わたしとしても、そのために、なにかをしなければならなくなってきた」

「そうですか。その気におなりですか」
「ああ。しかし、なにをやったものか、きめかねたね。そのあげく、最も常識的な結論になった。未来における問題点のひとつは、人口爆発の抑制ではなかろうか。それと、道徳的レベルの向上じゃないかな。この二つが実現すれば、戦争をはじめ悪事のたぐいは、大はばにへる」
「すばらしい計画じゃありませんか」
「そこで、とりかかりはじめたのだ。わたしがやりたくって、やるのじゃない。人類の思念が、そうさせるのだよ。いいかね」
「いいことなら、やるべきじゃありませんか。で、どんなふうにしてです」
「人類を、二つに分けるのだ。道徳的な平均点というものがある。それを境に、上と下に分かれる。その下の半分をしまつしたら、社会はかなりよくなるのじゃないかな。人口問題の解決にもなるし。ノアの箱船、最後の審判。考え方としては、とくに新しいとはいえないかもしれないがね」
「現実には、どんな方法でですか」
男が聞くと、相手は腰にさげていたものを手にして言った。
「光線銃だよ。これをむけて引金をひく。命中すると、平均点以下の人は、あとかたもなく消滅する。そうでなければ、さっきからのわたしとの会話をすっかり忘れ、ぶじに戻れる。簡単なことさ」

真相

「事件に関連している点は、みとめますね」
取調室のなかで、刑事が言った。室内にいるのは、もうひとり。机をあいだに椅子にかけている、三十五歳ぐらいの男。
「もちろん、みとめます」
「あなたの話すところによると、夜ふけの道を歩いていた時、若者に襲われた」
「そうです。そいつは少し酔っていたようですが、確実にかと聞かれると迷います。なにしろ、不意にナイフを振りかざして、むかってきたのですからね」
「どういうつもり、だったのだろう。金ほしさか、精神的な発作によるものか、あるいはあなたをうらんだあげくか。なにか心当りは、ありませんか」
刑事に質問され、男は首を振った。
「ぜんぜん。わたしの服装を、ごらんなさい。金持ちに見えますか。また、集金の仕事をやっているようにも、見えないでしょう」

「それは、そうだ」
「また、うらまれるなんて、考えられませんよ。お調べになったんでしょう。わたしは小さな博物館づとめ。ねたまれたりする、わけがない。それに、独身で、女性関係もちゃんとしています。だれかの恋人を奪ったなんて言われる、おぼえはない。それに、借金もしなければ、ひとに金を貸してもいない」
「とにかく、そいつはナイフを手に襲ってきた。そこで、あなたは身をかわし、ナイフを奪いとった。そして、もみあっているうちに、相手を刺してしまった」
「そういうことです。べつに刺し殺すつもりは、ありませんでした。しかし、おとなしくしていたら、こっちがやられるところでしたからね。もう、夢中でしたよ」
「だから、正当防衛というわけだな」
刑事が言い、男はうなずいた。
「そういうことに、なるんでしょうね」
「目撃者がいると、処理の手続きも簡単にすむのだがなあ」
「でしょうね。そばに、だれかがいてくれたら、よかったと思いますよ。事件は起らなかったかもしれないし、起っても応援にかけつけてくれたかもしれない。取り押さえて、どういうつもりだったのかも聞き出せたでしょう。しかし、ものごと、なにも

かも、つごうよくいくとは限らないものですからねえ」

男がしゃべるのを聞き、刑事は書類をめくりながら、腕ぐみをし、首をかしげた。

「まあ、あなたの言う通りなんでしょう。しかし、ねえ。どうにも扱いに困るんですよ。なにしろ、あなたは、以前にも同じような目に会っている。一年ほど前ですな。人通りのないところで襲われ、凶器を奪って相手を殺してしまった」

「殺したなんて。身を守るためにやむをえず行動したら、その結果、そいつが死んでしまったのですよ」

「だろうな。しかし、どうして、こう似たようなことがつづくのだろう」

「知りませんよ。わたしが悪いのじゃない。襲ってきたほうが、いけないのです」

「そりゃあ、そうだが……」

刑事は考え込む。こいつ、他人にひどい言葉をあびせて挑発し、むかってきたのをいいことに殺してしまう。それを楽しみにする、異常者なのではないだろうか。しかし、そう立証できるものはなにもなく、問いつめれば男の感情を害するだけのことだろう。刑事は、ため息をついて言った。

「……そこなんだな、やっかいなのは」

「わたしの身にも、なって下さいよ。わけもわからず、襲いかかられたんですよ。しかも、二回も。警察のかたが、裏になにかとお考えになるのも、もっともです。疑うのが、お仕事なんですから、当然のことです。しかし、わたしとしては、ありのままを話すだけです。どう思われようともですよ。なにがなにやら、さっぱりわからないままなんです。犯罪組織の一員で、わたしにそっくりなんて人でも、いるんでしょうか」

「いないね。考えられる可能性については、すべて調べてみた。ひたすら調べるのも、警察の仕事なんだ。しかし、なにも出てこない。凶器についても調べた。あなたでなく、襲ったやつらの買ったものであることも判明した」

「それでも、すっきりしない、ご気分でしょうね」

「ああ……」

刑事はつぶやいた。これ以上、もはやどうしようもないのだ。さんざん考え抜いたが、なんの答えも得られない。いったい、どうすればいいのか。

窓のそとを眺める。空白のような精神状態で、男に目を戻す。にくにくしい印象を受けた。不愉快きわまる。こんなやつらがいるから、世の中がよくならないのだ。おれの人生がうまくいかないのも、こいつのせいだ。その感情は殺意に高まり、手はいつのまにか拳銃(けんじゅう)へ……。

しかし、ここは取調室。拳銃は、持ってきていなかった。

刑事は、われにかえる。そういうことだったのか。社会には、数え切れぬほどの人がいるのだ。なかには、こういうたぐいの、説明のつけようのない変なやつも、いるというわけだろう。

「お疑いなんでしょうね」

と言う男に、刑事は答えた。

「そんなことはない。あなたの話は、すべて信じるよ。少なくとも、わたしはね……」

しかし、上の連中が、どう思うかだ。この男のために力説すればするほど、おれの立場はおかしなものになってゆくのだろう。

初夏のある日

その青年の住んでいるマンションの近くに、ちょっとしたバーがあった。簡単な食事も作ってくれる。だから、彼はよくそこを利用する。

会社では営業の仕事が、青年の担当だった。その日、なにかと手ちがいが起り、沈んだ気分でそのバーに寄った。まだ独身だし、ひとり部屋に帰っても、いいことはなにもない。軽く飲んで行こう。

「やあ、どうかしましたか。元気をお出しなさいよ」

声をかけてきた男とは、時たまここで会い、あいさつをかわす程度の仲だった。四十歳ぐらいで、経営コンサルタントをやっているとかいう。今夜はいやに親しげで、陽気だった。

「いい、ごきげんですね」

青年が言うと、男はうなずいた。

「そうさ、きょうはカラスの月の三日、輝きの日なんだ。景気よく飲まなくちゃあね。

つきあって下さい。支払いのことは、ご心配なく」
「はあ、ありがとうございます」
なんのことやらわからないが、にぎやかに時をすごすのは悪くない。男は、いやに楽しそうだった。青年はかなり酔い、やがて自宅へと引きあげた。
それから何日かし、青年がまたバーへ寄ると、しばらくして男が入ってきた。
「先日は、ごちそうさまでした」
いちおう、お礼を言う。
「愉快でしたね。で、ぶじに帰れましたか」
「はあ。ところで、どうも気になってるんですけど、あの時、カラスの月の三日とか、おっしゃってましたね。なんのことですか」
「そんなこと、言いましたかな」
「忘れませんよ。妙な文句ですから」
「たいしたことじゃ、ないんです」
「それなら、教えて下さいよ。思い出すたびに、考え込んでしまいます」
青年にせがまれ、男は言った。
「弱りましたな、そうまで言われると。それに、きょうは、ことわれない日なんだ。

まあ、趣味というか、楽しみというか、そのたぐいですよ」
「いったい、どんな……」
「一種の暦です。旧暦とか、イスラム暦とかいうようなものです」
「面白そうですね」
「好き好きでしょうな。普通のもののほかに、それをも使う。よけいな手間ともいえる。もっとも、趣味とはそういうものなんだと思いますがね」
「一年は一年なんでしょう」
「四百二十五日が一年。としをとるのが、それだけゆっくり。若さが、たもてることになります」
「精神衛生にも、よさそうですね。それが、十二の月に分かれているんですか」
「アヒルの月、チューリップの月など、二十の月に分かれている。四十日の月もあるし、五日で終る月もある。それに、さまざまの祝祭日みたいな日があるのです」
「そんなになっているとは。なんだか、やっかいな気も……」
青年は酒を味わいながら言う。男は二、三回うなずいた。
「そこが趣味ですよ。普通のカレンダーだけでも、生活に支障はない。だがね、それに支配され、ほかの人たちと足なみをそろえて日をすごしているのかと思うと、いや

な気になりましてね。そんな時、たまたまさそわれて、この暦も使うようになりました。毎日毎日が新鮮です。合理的とか、便利とか、規格とか、そういうのとはべつな観点で、一日を見るのですから」

満足そうな表情だった。そんなものかも、しれない。青年は、三分間ほど考えてから言った。

「うらやましくなりました。そのカレンダーを手に入れるには、どうしたらいいんですか」

男は手帳の一枚を切り離し、なにかを書いて渡してくれた。見ると、ある郵便局の私書箱の番号。

「いまの社会をどうお思いか、感想文を書いて送ってごらんなさい。合格の通知が来たら、そこに書かれている料金を送る。一週間で手にできますよ。あなたなら、たいてい大丈夫。そう思ったからこそ、事情をお話ししたわけですよ」

毎日が平凡で持てあましている、とでも書けばいいのだろう。青年はためしてみた。そして、それがとどけられた。

手帳のような外見だった。一カ月の日数がばらばらだから、一目でわかるようにはなっていない。一ページに四日ずつのっている。普通のカレンダーの日付が、それぞれ小さく並記してある。それがなかったら、どうしようもない感じだ。

なにもかも不統一なのだ。そもそも、週に当るものがない。そのかわり、青の日、赤の日、まだらの日、茶色の日、黒の日などと、順序不同で書き込まれている。また、三重丸、二重丸、星印、三角形、魚の形などがつけられている日もある。きまっている点といえば、一年間の日数だけのようだ。

あとのほうのページに、さまざまな説明がついていた。どういう日には、どうすごすといいかなど。たぶん、これでその日がどんな日かを調べるのが、人によって楽しみとなるわけなのだろう。

ことしは第三十二年とわかった。この数字が三桁になることはなく、第九十九年のつぎは、第一年になるのだ。だから、これがいつから使われているのかは、知りようがない。

とにかく、奇妙なしろものだった。しかし、金を払って手に入れただけのこともあった。珍しいものを持っている、他人とはちがうのだとの優越感は味わえた。

出勤した青年は、上役に申し出た。

「新しい得意先を、開拓したいと思います。やってみて、よろしいでしょうか」

茶色の日がつづいて、三日目だ。東の方が、吉なのだそうだ。こころみる価値はあ

る。

「うん。その意気ごみは、うれしい。がんばってくれ」

許可が出て、青年は外出した。そして、取引きしてもいいという店を、二つほど作った。戻って報告すると、ほめられた。なるほど、こういうこともあるのか。暗示による自信のせいかもしれないが、とにかくうまくいったのだ。

やがて、黒の日にはさまれた青の日で、二重丸の日でもある日となった。朝おきて「ロロレンロ」と三回となえると、異性の友を得られるらしい。やってみたくもなる。出勤の途中、会社のそばの道で、封筒を拾った。社名が印刷されていたので、ついでにと、そこへとどけた。

青ざめていた女性は、それを見て喜びで飛びあがった。その落し主で、なかみは、よほど重要なものだったらしい。それをきっかけに、時どき会うようになった。いちおう美人で、はきはきしている。

何回目かに、青年が言った。

「三日後、お昼ごろに、ぼくの会社のそばの喫茶店で会いましょう」

それをやると、一段と親しくなれるのだ。しかし、彼女は言った。

「日曜じゃないの」

「そうなりますね」

「なんで、そんな日に。あたし、時間をかけて通勤しているのよ。べつの日にしてよ。日曜ぐらい、休みたいわ」

「そこをなんとか」

と青年がたのんだが、女は言った。

「あなたって、いい人だけど、どこかずれてるのね。うまく言えないけど……」

好ましい進展には、ならなかった。まあ、いいさ。いずれ、べつな女性と知りあえる日もあるのだから。

そのうち、いつかはと予想していた事態が起った。上役に言われたのだ。

「地方へ出張してくれないか。ごたごたの調整を、しなくてはならないのだ」

「すぐですか……」

あしたはリンゴの月の第一日目で、黒い日で、三重丸。なるべく、自宅で動かないでいるべきなのだ。しかし、伯父が重態という口実は、以前に使ってしまった。べつな理由も思い浮かばない。上役はうなずく。

「そうだ。三日ほど。たのむよ」

「はい、やりましょう」

こんな時には、自由業だったらなあと、つくづく思う。しかし、絶体絶命というわけではない。カレンダー手帳で調べ、長い呪文をくりかえしとなえる。そういうぐあいに便法のあるところが、いい点なのだ。暦が至上命令のようなものだったら、仕事との板ばさみになり、どうしようもない。

青年は時には暦を優先させ、時には便法を使って会社の仕事をやり、なんとか両立させるこつを身につけていった。

いつものバーで、あの男と顔をあわせることもある。

「ごぶさたしました。やっとなれてきました。おかげさまで、楽しんでいます」

青年が言うと、男は笑った。

「そのようだな。見ればわかるよ。束縛されないというのがどうなのか、身をもって知ったといったとこかな」

「そうですよ。一日一日が、充実したものになりました」

「だろうな」

きょうは、新しい年の第一日目。黄色の日で、星印の日でもある。こう重なるのも、めったにないことらしいのだ。そとは、初夏の晴れた空。

自宅でくつろぎ、静かに酒を飲み、祝わなければならない。これからの四百二十五日の幸運を、祈らなければならない。

昼ごろ、電話がかかってきた。

「ちゃんと、やっているか」

と言われ、青年は答える。

「ああ」

「すまないな」

「それは、こっちの言うことさ。会社づとめという立場もあるしね」

「儀式のことが、気になってね。やってくれると知って、安心した」

電話のむこうの声は、いうまでもなく彼自身のもの。

防止対策

高原地帯の、すばらしいホテル。なかで最も豪華な一室に、その男はしばらく前から滞在している。なにもかも、無料なのだ。

彼の担当である青年が、やってきて言った。

「いかがでございます。食事、酒、女性サービス。ご満足いただけておりましょうか」

「まあね」

「お読みになりたい本、ごらんになりたい映画。なんでも、ご用意いたしますが」

「ヨガの本でも読むかな。あまり役には立たないと思うが。それにしても、こうまでする必要があるのかなあ」

顔をしかめる男に、青年は言う。

「巨鳥モア、そのほか、多くの種類の鳥が絶滅いたしました。生き残っていたところで、人類にとって、とくにどうってこともない。動物のなかには、人間を襲うのもいる。しかし、絶滅ということは、理屈なしにさびしいものですよ。だから、その防止の方針がたてられ、予算もたっぷりとってあるのです」

「そのへんは、わたしにもわかるがね」

「ここは静かすぎるのかも、しれません。都会へ、お戻りになりますか」

「そうも思ってみることがあるよ」

「たぶん、気をまぎらすことが必要なのでしょう。スポーツをなさるといいんですけどね。野球、ラグビー、テニス。いかがです、適当なグループを、おさがししますが」

青年はあれこれしゃべるが、どこか事務的な口調。男は、そこが気にくわない。

「わたしのスポーツぎらいを、知っているくせに」

「では、勝負事はいかがでしょう。われを忘れて、熱中できるかもしれません」

「普通ならね。しかし、どうせわたしは特別あつかいなんだ。ほどほどに勝つよう、おぜん立てというしかけだろう。どうだ」

「そのへんは、お察し下さいよ。かっとなって、前後のみさかいなく、あなたに妙な自殺をされたりしたら、ことですからね。契約の期間中は、あなたさまの身に危険の及ぶことはないのです。その点は、ご安心を」

「すぐにでも解約したい気分だぜ」
「それは、ご自由です。わたしとしては、つぎのかたに、その役を受けついでもらえばいいのですから。しかし、ご希望により、おなりになったのですよ。解約なされば、あくせく働く生活へ逆もどりです。もっと、がんばられたらいかがでしょう。いま交代されると、つぎの人の性格をのみこむまで、わたしもひと苦労なんです。ね、できるだけのことはいたしますから」
「そうまで言われるとな……」
男は、ふと思いついて言った。
「……麻酔薬を使わせてくれるか」
「一週間のうち、六時間。それ以上は、許されておりません。大切なおからだの神経に変調をきたしては、困るのです」
「禁止じゃないのか。さっそく、それをたのむ。なぜ、早く教えてくれなかった」
「できれば、使わないに越したことはありませんのでね」
「それにしても、こんなやり方のほかに、方法はないのだろうか。科学が進んだのだ。なにかあるはずだ」
「はい。しかし、それでやりますと、いつ変異を起すかわからないのです。方針としては、人体に対し、最も強力な活性を持ったのが大事なのです。おわかりでしょう」

「わかってるよ。とりあえず、早いとこ麻酔薬をたのむ。たとえ六時間でもいい」
「では、少しお待ちを……」
青年が部屋を出ていったあと、その男はつぶやく。
「科学のおかげで、一掃できるようになったのに、やはり絶滅は防がないといかんのかな。もう少し、がんばってみるか。しかし、大金をかけ、生きた人体を培養器としてまで、保存する必要があるのだろうか。この、いまいましい水虫という菌を……」

くしゃみ

その男は、安アパートの一室のなかで、あぐらをかいて、ぼんやりとしていた。なんにも、することがなかったのだ。失業中。テレビをつけてもいいのだが、ろくな番組がない。また、働きもせずに昼間からテレビというのには、やましさを感じる。

しばらく前までは、中規模の商事会社につとめていた。しかし、なんとはなしに各所に借金ができ、その返済を迫られ、退職金という制度を利用してしまったのだ。彼は特殊な才能があるわけでなく、世の中は不況。つとめ先がないまま、こうしている。妻子がないという点で、のんきだった。男やもめ。あたりは乱雑だったが、本人は気にしていない。訪れてくる人もいない。

「ああ、ああ……」

そのあくびには、なにをしたらいいのかわからぬ困惑と、退屈さの感情がこもっていた。

やがて、男はくしゃみをした。そして、思わず声をあげた。

「や」

くしゃみと同時に、左右の鼻の穴から、それぞれハチが飛び出した。あるいは一種の錯覚で、そう見えただけのことだろうか。そんなのが入ってきたら、大さわぎをしていたはずだ。

鼻の奥がむずむずし、つづけて、また二回くしゃみを。そのたびにハチが飛び出し、さっきのと合計して六匹。男のまわりを飛びまわっている。

「やはり、鼻から出てきたのだ。こんな話、聞いたことがない。それが、自分の身に起るとはなあ」

医者へ行こうかとも考えたが、たぶん、まともに扱ってはくれないだろう。からかいに来たのかと、怒られるかもしれない。

男は、原因の追究を打ち切った。とにかく、現実にそうなったのだ。みとめざるをえない。他人に話すのは、連日のように出てくるようになってからでいい。しかし、そうはならないだろう。

刺されるのではとの、恐怖はなかった。自分の内部から出てきたやつらだ。害を及ぼしたりは、しないだろう。

ハチたちは飛べることがわかったといった感じで、羽を休め、男の肩にとまったり、

シャツの上をはいまわったりした。しげしげと眺める。都会生活が長いので、まったく久しぶりのことだった。昆虫についての知識はないが、ハチの一種であることにまちがいない。

親しみといった印象を受ける。当り前だろう。おれのハチなのだ。

そのうち、下着のなかにもぐりこむやつもあった。いくらかくすぐったかったが、がまんできないほどではない。そもそも、自分の一部のようなものではないか。

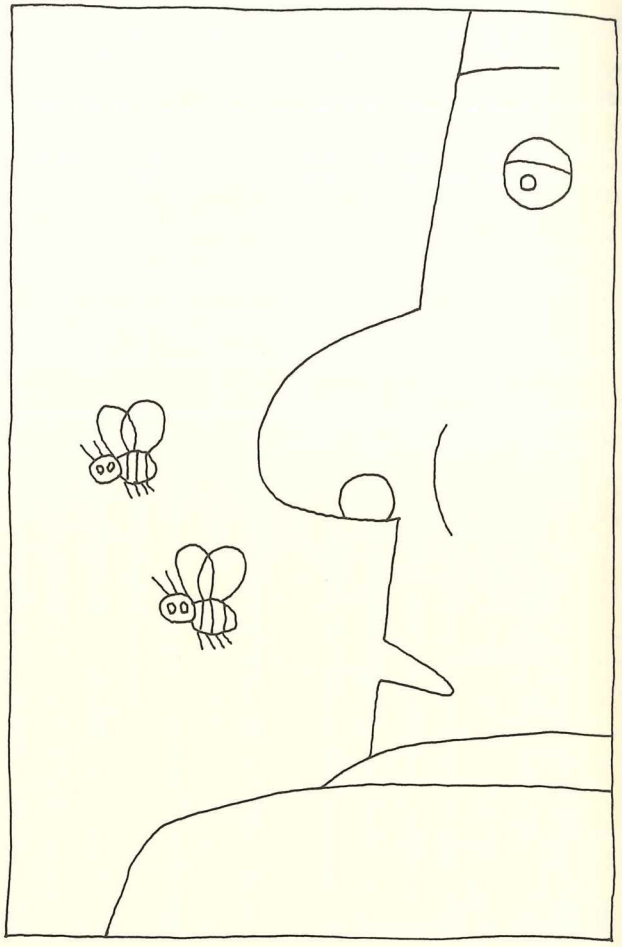
上から強く押さえたら、つぶして殺すことができるだろう。しかし、そんなことをする気には、まったくならない。

そのうち、ハチたちは背中の四カ所、あとの二匹は首すじの左右、そこで動きをとめ、いっせいに刺した。

「わ」

男は、叫び声をあげた。不意を突かれた、驚きのためだ。予期しなかったこと。しかし、さほどの痛みはなかった。しいて形容すれば、軽い感電といったところか。ハチたちは下着から出てきて、また飛びまわりはじめた。それにしても、なぜ刺したのだろう。いじめたわけでもないのに。

ふしぎがることで、しばらくの時間がつぶれた。そのうち、男は変化を感じた。す



っきりした気分になり、力がみなぎりはじめたようなのだ。

「これは、いったい……」

あれこれ考え、こんな結論を得た。刺されたところが、ハリ治療でいうツボに当っていたのではなかろうか。それが、効果を発揮したといえそうだ。

とにかく、めざましい効果だった。いまのままでは、いかん。全力で、なにかをしなければ。つまり、やる気が出てきたのだ。

しかし、気がついてみると、夜になっていた。将来の計画は、明るい時間に考えたほうがいい。軽く食事をし、男は寝床に入った。

翌朝、めざめると、ハチたちはそのへんを飛びまわっていた。ガラスのすきまから戻ってきたのもある。運動がてらに、そのへんに行ってきたのだろう。

眠っているあいだ、ハチはどうしていたのだろう。鼻のなかに戻っていたのだろうか。その点になると、知りようがなかった。起きている時に、鼻に入ってくることはなさそうだった。まあ、気にしないことだ。

「ところで、なにをやるかだ」

自分に言いきかせる。それが、当面の課題なのだ。これまでの、だらしのない生活に、区切りをつけなくてはならない。気力の高まりは、つづいている。しかし、具体

的にどんなことを……。

なにか、あるはずだ。腕を組み、目をつぶる。ハチたちは首すじ、左右の耳、鼻の両側を、またもいっせいに刺した。二回目となると、驚きもたいしたことはない。

たぶん、その結果なのだろう。においに対する感覚が、鋭くなっている。新しい能力が、開発されたのだ。

「これまで、なんというにおいと同居していたのだ。われながら、あきれる」

男は首を振り、部屋の掃除をはじめ、そのことに熱中し、時のたつのを忘れた。何日かぶりに洗濯機も動かしたし、食器のたぐいも満足のゆくまできれいにした。

一段落すると、午後になっていた。

「腹がすいたなあ。あ、うん、そうか。そうだな。そういう方法もあるな……」

男の頭のなかで、食欲を高めるにおいについてのアイデアが浮かび、なにをどのようにまぜれば、それが作れるかの見当もついてきた。感受性が高まっていたし、空腹でもあった。それがインスピレーションとなって、結実したのだ。

「これだ、これだ。これを製造して売り出そう」

男は、計画書の作成にとりかかる。これといった才能はないが、非常識でも無知でもないのだ。いまや、人生の目標ができた。知識を総動員し、図書館へ出かけ、時に

は知人に知恵を借りに行ったりした。

早く仕上げようと、その仕事を進める。うつらうつらすると、ハチたちが刺してくれた。ねむけが消え、能率があがるのだった。ツボを知りつくしているのだろう。

何日かたって、計画書ができあがった。男はそれを持って銀行へ出かけ、支店長に面会して言った。

「新しい事業をはじめようと、思っています。資金の件で、お願いにうかがいました」

「どんなことです」

「説明を、お聞き下さい……」

男は話しはじめた。ハチたちは支店長の頭のうしろのほうを飛び、軽い羽音をたてている。それはこころよいひびきとなり、催眠作用のたぐいをもたらすらしく、好意的に受け取ってくれた。計画そのものも、いいかげんではないのだ。支店長は言った。

「有望なようですね。ご協力しましょう。しかし、融資ですから、どなたか保証人が必要です」

「それは、そうでしょう」

つぎに男は、このあいだまでつとめていた会社の社長を訪れ、計画書を見せて説明した。ここでも羽音のおかげで、社長は興味を示してくれた。

不始末をして、社をやめさせられたのではない。こういう計画があってかと、好ましい誤解をしてくれた。また、このような品が生産されれば、その販売をやることで、もうけられそうだとも思ってくれた。

保証人になってもらえ、銀行から金を借りることができ、小さな工場が作られ、なんとか生産が軌道に乗る。

そもそも、効果のある品なのだ。行きつけの近所の料理屋で、ためしてもらってもいる。レストランへの売り込みに回っているうち、聞き伝えてだろう、食品会社からの、大口の注文が来はじめた。

特許は申請してあるし、かんじんの調合率など微妙な点は内密にしてある。当分は、独占的な事業でいられるだろう。

そうなると、銀行は「いくらでもお使いになって下さい」といった調子で、資金を貸してくれる。工場は拡張につぐ拡張、製品も量産態勢に入る。

もう安アパート住まいでもあるまいと、男は高級マンションへ移る。ハチたちをねぎらってやらねばと、フラワー・ショップと契約し、室内はいつも鉢植えの花が絶えぬようにした。ハチたちは満足そう。

もし、このハチたちがいなくなったら。それを考えると、なんとなく不安だった。精神的なものではなく、こうはっきりした存在になってしまっていては、気にせざるをえない。無意識のうちに数をかぞえ、六匹いることを確認し、安心するのが習慣になった。

かつての同僚が、たずねてきた。

「どえらいことを、やってのけたな。うちの社長を保証人にして金を借り出し、大もうけとは。昔のきみとは、別人のようだ」

「そう見えるだろうな」

「なにか、あったのか」

「べつに……」

話したって信じてくれないだろうし、信じたら盗もうという気になるだろう。内密にしておいたほうが、いい。ハチたちは、花びらの内側にかくれていた。

男は、会社の事務室にも花を置くようにした。

仕事は順調だった。ある夜、昼間の疲れで熟睡していると、痛みを感じて飛び起きた。

「な、なんだ……」

一匹のハチに刺されたのだ。いままで、こんなことはなかったのに。これをきっかけに、反抗がはじまるのかな。今後、睡眠の中断がくりかえされると……。

いやな考えが頭をかすめた。水を一杯とキッチンへ起きると、かすかな音。ガスの火が、噴きこぼれたお湯によって消えていたのだ。このままだったら、ガスが部屋じゅうに満ちて、健康を害すか大爆発になっていただろう。

「あぶないところだった。ハチが起してくれなかったら……」

男は胸をなでおろす。もう、ハチには頭があがらなくなった。命の恩人なのだ。さっき少しの疑念を抱いたことを恥じた。

景気はいいし、取引先との交際もあり、男は高級バーへしばしば出かけるようになった。そんな時、ハチはズボンの内側やポケットのなかで、目につかぬようにしている。

美しい女性を何人も知った。たいてい、こう話しかけてくる。

「おひとりの生活なんですってね」

「ああ」

「なにかと不便でしょ。時どき、お手伝いに寄ってあげましょうか」

普通なら、大喜びするところ。彼にしても少し前までは、こんなことを言われるよ

うになるとは、夢にも考えなかったことだ。しかし、ことわる。

「まあ、なんとかなっているよ。定期的に掃除をやってくれる人はいるし、料理を作るのも、なれれば面白いものだよ」

女を連れ込んだら、ハチたちの気を悪くするのではと思ってだ。また、ハチと共生していることを知ったら、どの女も、内心いやな気分になるね。結婚でもしたら、女はハチを殺そうとするだろう。その前に、逆に殺されるかもしれないな。当分、独身でいることにしよう。

そとで飲みすぎ、朝おきて二日酔いに悩むこともある。しかし、ほんの少しの時間だけだ。ハチたちがそのツボを刺してくれ、気分はたちまちよくなる。

かぜをひいて高熱が出はじめた時も、なにを食べたせいか激しい下痢をした時も、ハチたちに刺されることで、すぐに快方にむかうのだった。

なにもかも順調のまま、一年がたった。ハチたちに変化はない。依然として、なにかと世話をやいてくれている。寿命は、どれくらいなのだろう。よそからやってきたハチが入れ替って、仕事を受けつぐということはないのかな。そのへんのくわしいことは、わからなかった。しかし、男はずっと同じハチたちと思っていたし、親しい存在であることはたしかだった。

ある夜、いい酔い心地でバーを出て、歩道橋を渡っている時のことだった。とつぜん、うしろから襲われた。金まわりがよさそうに思われたのだろう。手の鞄を奪われそうになった。金は入ってないが、重要な書類が入っている。

相手は、若者ひとり。大柄（おおがら）で、なかなか力がある。男は鞄を抱きしめ、はなさない。とっくみあいとなり、けとばされ、男は鞄をにぎったまま、階段をころげ落ち……。

そうなるはずなのに、ふわりと歩道の上におり立ち、けがひとつしない。

「あ、化け物……」

若者はそう叫び、悲鳴をあげながら反対の方角へ逃げていった。よほど異様な光景だったのだろう。

その言葉は、男にとっても衝撃的だった。あの高さからころげ落ちたのに、けがどころか、服のよごれもない。空気中での、ゆっくりした落下感があった。

「化け物か……」

男はつぶやく。ハチたちはツボを刺すばかりでなく、ロイヤルゼリーのような、未知の物質を注入しつづけていたようだ。それで体質が変ってきた。病気にならないだけでなく、このような場合にも無事なように。

事故にも暴力にも対処できる。そのほか、自分で気づいていない、すごい能力がそ

なわっているのかも。

いったい、なぜ、こうなったのだろう。その代償に、なにかをやらされるのか。それがどんなことで、いつからなのか、まるでわからない。知る手がかりさえない。あるいは、すでにはじまっているのかもしれないのだ。

普通の人間では、なくなっている。もう、平凡な生活に戻れそうにない。不安なしに笑える日は来るのだろうか。化け物でなくなることは……。

たしかめる方法は、ひとつある。ハチたちを殺してみることだ。逆に、やられるかな。それはたぶん、ありえない。女王バチを殺す部下は、いないのだ。その気になれば、ハチたちを殺すぐらいは簡単だ。しかし、それがどうしてもできない。

アリバイ

「さて、ところで、その問題の時間、夕方の六時から十時ごろまでというわけですが、あなたはどこでなにをしていましたか」

場所は警察。質問しているのは刑事。その青年は、参考人として呼び出された。

アパートのとなりの部屋の住人が、首をしめられて殺され、額は不明だが金を奪われるという事件が発生した。青年はその人と顔みしりであり、よく話しに出かけた。当然のことながら、部屋のなかには指紋が残っている。

つまり、容疑者にされたのだ。

「その時間、ぼくは……」

そこで青年は、言葉をつまらせた。刑事はうながす。

「だまっていると、きみの立場はますます悪くなる。話すことだな」

「外出していました」

「友人の家へでもかい」

「そうじゃないのです。ひとりでいても退屈なので、あてもなしに外出しました。盛り場へでも行こうと思いましてね。うちのそばの私鉄を利用して行きました。まず、喫茶店へ入りましたよ。広くて、けっこうこんでいました。コーヒーを一杯だけ飲んで、出ました。それから、道路を歩きましたよ。店のショーウインドウを、のぞきながらね。入った店もあったと思いますが、なにも買いませんでした」

「そんなことで、一時間ほどつぶしたことになるね」

「そうです。映画館が目に入りました。このところ評判の、外国映画をやっているじゃありませんか。それを見ました。ストーリーを、お話ししましょうか」

「その必要はないよ。日によってストーリーが変るわけじゃないからな。で、それからどうした」

「帰宅しました。どこかで食事をしようかとも考えたのですが、ちょうど大きなスーパーマーケットがあいてました。そこで調理ずみのものを、いくつか買って帰ったのです。温めれば、簡単に出来あがるやつをです」

「それが十一時というわけだな。わかった。そこでだ、その外出中、だれか知りあいに会いませんでしたか」

刑事に聞かれ、青年は表情を曇らせた。

「会いませんでした」

「だれにもかい」

「ぼくは、地方都市から働きに出てきたのです。だから、友人もあまりいない。それに、社交的な性質でもないのです。さっき、外出のことを話しかけてやめたのも、そのためです。だれとも会話をかわさなかった。作り話だろうと言われたら、それまでですからね。一日前の行動と思われても、仕方ない」

「そうひがむことはないよ。警察は、善良な市民の味方なのだ。その外出中にだが、きみは他人の目にとまるようなことを、なにかしなかったかね。よく思い出してくれないか」

「そんなふうに言われると、もう、どうしようもありません。ぼくを、ごらんになって下さい。どことといって、特徴がないでしょう。中肉中背、美男子でもなければ、ぶおとこでもない。目つきでも悪ければいいんでしょうが、そんなこともない。身体の健全が唯一のとりえと思っていたが、こうなると、そうも言えなくなってきた。どこかに欠陥でもあったら、そういえばあんなお客がと、だれかが証言してくれたかもしれない……」

「まあまあ」

「それに、ぼくは性格的におとなしいのです。乱暴な動作、だらしないかっこう、そういうことができない。大都会で平穏に生きてゆくのには、そのほうがいいと思ったからです。しかし、まちがいだった。こんなことに巻き込まれると知っていたら、他人が顔をしかめるようなことを、つとめてやるようにしていればよかった」

青年の口調には、絶望的な感情がこもっていた。刑事は言った。

「気の毒だ。同情するよ。われわれも、できるだけのことはやる。きみの写真を持って、聞きこみに回らせる。やるべきことは、きちんとね。その結果がはっきりするまで、ここにとまってもらうことになるが」

「つまり、だめってことですね。いい報告の、もたらされるわけがない。ぼくへの疑いは、晴れっこない。救われる道はないんだ」

「しかし、万一ということもあるよ」

「万にひとつじゃありませんか」

青年は、悲しみにうちひしがれていた。

つぎの日、刑事は青年に言った。

「おめでとう。疑いは晴れた。帰っていいよ。すまなかった。しかし、これも職務でね。悪く思わないでくれ」

「つまり、ぼくの外出が、立証できたというわけですね」

「そうだよ。証言してくれる人がいた」

「それは、だれです。教えてくれませんか。お礼のあいさつぐらいしておきたい気分です」

「秘密にしておくことでもない。教えてあげよう。まず、私鉄の駅員。キオスクの店員。喫茶店のウエイトレス。商店の人たち……」

「なんでまた、そんなに」

「そこまで、警察はタッチしないよ。問題の時間に、きみをみかけた人がいる。しかも、ひとりだけじゃない。それで充分なのだ」

「信じられないけど、うそではないようですね。じゃあ、ぼくが、じかに聞いてみることにしますよ」

警察を出た青年は、刑事から聞いておいた名前をたよりに、たずねて回った。

どの人からも、予期しなかった答えがかえってきた。

「あなたのような青年は、珍しい。なんにも特徴がないんですからね。ある時代には、多かったのですかな。物たりないような、ほっとさせるような、いらいらさせるような。いやでも目につきますよ」

とか、

「見たら、忘れられない顔ですね。だから、じろじろ見なおすこともない。どこがどうって、うまく説明できませんな。人間の顔って、微妙なものですからね」

とか、

「つまりね、あなたって、普通の男と、どこかちがうのよ。なにかを鼻にかけてるってとこがないでしょ。べつに魅力的ってわけじゃないけど、そこが印象に残るのね」

聞いてまわり、帰宅した青年は、鏡をのぞきこむ。ぼくは、そんな人間だったのか。ぜんぜん知らなかった。この顔がねえ。そんなに人びとの注目をあびるものとはねえ。普通の人なみの、個性がほどほどの表情など、どうやれば身につけられるのか。

いつか、貨幣を一枚ひろって、ポケットに入れてしまったことがあった。飲みすぎて、物かげで吐いたこともあった。それらも、みなだれかに見られ、顔をおぼえられているのだろうか。ひや汗が出てきた。

こうとわかっても、どうしようもない。不正乗車なんか、できたものじゃないし、どさくさまぎれにかっぱらいをやったら、ぼくひとりだけ、とっつかまるにちがいない。レストランの前で入ろうかどうしようか迷ったりも、紙くずの投げ捨ても、なにもかも注意しなければならないのだ。

今後いつまで、正常な神経のまま生きていけるだろう。あるいは、アリバイのないまま、刑務所へ入れられてたほうが気が楽だったのでは……。

外郭団体

「まったく、民衆というやつらは、あつかいにくい。われわれに対して、完全を要求している。それぞれ、自分のことを考えてみやがれっていうんだ。それほど、立派で完全か。文句は、それをふまえて言ってもらいたいものだね」

官庁間実務連絡会議の席で、ひとりが身につまされたような声でつぶやいた。各官庁の実権をにぎる高級官僚による、定期的な会合。非公式、つまり内密なもの。

それを耳にし、ほかの者がうなずいた。

「まったくだ。わたしの役所では、このあいだのバスの事故で損害補償の訴えを起され、困りきっている。谷へ転落し、三人が死に、十二人が負傷したのは事実なんだがね」

「原因は、なんなのだ」

「降りつづいた雨のため、山から石がころがり落ちた。これが当ったというのなら話はべつだが、その石は道路には出なかった。農家の豚小屋の戸にぶつかり、それをこわした。その結果、何頭かの豚が道路に飛び出した。あまりに突然だったので、運転手がハンドルを切りそこねたわけだ」

「不慮の災難だな」

「まさしく、そうなんだ。しかし、現実に被害者がいるんだ。金をもらうのが当然と思っている。バス会社は、利口だよ。利口になったというべきかな。なにはさておき、すかさず豚小屋の持ち主を訴えやがった。豚さえ出てこなければ、こんなことは起らなかった。わが社は、車体がこわれた上、運転手も死んだのだ。悪いのは、あっちだと」

「豚小屋の持ち主も、あわてたろうな」

「その通り。問題は、あの石だ。あの石への管理の悪かったのが、原因だ。そして、その石のあった場所というのが……」

「国有林か」

「そういうことに、されてしまったんだ。豚小屋の主は、わめいたね。こういうことのないようにと、われわれは税金をおさめているんだ。マスコミを前に、涙ながらに絶叫した。非をみとめたら、大金を払わねばならないからな。こういう場合のために、各人が生命保険に入っているんじゃないのかな。その上に、国家からも大金をだから

なあ」

この件をかかえこんでいる官庁に対して、だれも同情した。べつな人が言う。

「うちもやられているぜ。テレビを見すぎて、子供が非行化した。テレビ局へ文句を言いに行ったら、放送基準は守っている、責任はそれをきめた人にあるとか言ったらしい。そこでついに、ああいうテレビ局を認可した監督官庁の責任だと、裁判ざたにした」

「そういうやつに限って、視聴料を払ってないんだよね。教養番組ばかり見せておけばいいのに。そういうしつけは、家庭でやるべきものなんだ」

「テレビ番組、高級とはいえないが、小説ほどすごくはないと思うな。それなのに、そっちは、あまり問題にされない」

「活字なら、いいんだろうな。言論の自由という、神さまがついている。それに、雑誌の監督官庁がどこなのか、知らないせいもあると思うな。気づいたら、やりかねない。占いの記事ののってる週刊誌は多い。どこのも、ぜんぜん当らない。おかげで大損した……」

「訴える自由は、あるんですからね。占いといえば、うちの役所のことを考えて下さいよ。気象関係の部門を、かかえているんですからね」

「予報がはずれて、大損害だ。どうしてくれるというやつか」

「そうなんですよ。どういうつもりなんでしょうね。頭がおかしいのか……」

「案外まともなのかもしれませんよ。趣味かもしれない。これで勝ったら、新判例。マスコミで時の人になれる。あるいは、事情があってのことかもしれない。債権者への言いわけですよ。損害請求の訴えをしている。きっと勝ちます。なにしろ、相手は政府。払えないということはない。もう少しお待ちを……」

「やっかいな時代に、なったものですね。マスコミが、面白半分に書きたてるせいもある。お客さまは、いつも正しい。民衆の感情にさからうわけに、いきませんからな」

「そのたびに、もっともらしく大臣がぺこぺこする。大臣は、それでいいですよ。困るのは、われわれだ。それらしき弁解の原稿を作って、提出しなければならない」

「あれには参るなあ。おい、早く持ってこいだ。なんとか書きあげても、たいてい、けちをつけられる。もっと、うまい理屈はつけられないか。これだと、非をみとめる形になる。へたをしたら、大臣をやめねばならん。それは困るとくる」

「天災にあったのが、不運なんだ。あきらめるのが当然。そう大声でどなりたいが、それをやったら、えらいさわぎになるな」

「ああ」

だれも、うなずきあった。当面の重要な政策の進行の件は、議題としてあつかいやすいし、つぎつぎと片づいてゆく。そして、しだいに軽い事項へと移り、終りちかくには、いつも話題はこれになってしまうのだ。

頭脳優秀のエリート官僚たちも、これだけはどうにもならず、ため息ばかり。

その時、出席者のひとりが言った。

「いい案があります。わたしは、この会議に出るのは五回目。この悩みの処理法をあれこれ考え、解決策を思いつきました」

ある官庁の、若手官僚。みなの目が彼に集中し、冗談でないことを知り、発言をうながした。

「ぜひ、聞かせてくれ」

「お話しします。しかし、その前に念を押しておきます。この連絡会議そのものは、秘密ということになっていますが、なかば公然。仕事上の必要で打合せに集るのはやむをえないと、だれもが見すごしてくれている。これまで、とくに手落ちがなかったからでもあります。しかし、このわたしの提案は、絶対に秘密を守ってもらわなければならない。さっき、少し早目に来て、盗聴器のないのをたしかめたからこそ、こう言えるのです。それを誓っていただきたい」

「誓うよ。われわれの肩の荷が、軽くなるのだ。好ましくない結果を望む者は、いないよ。もし、外部にもらした者が出たら、ほかのみんなが許さない。官界から締め出されるばかりでなく、全官庁を敵とすることになる。それを考えたら、しゃべるやつはいないよ、このメンバーのなかには」

だれもがうなずき、同意した。

「わかりました。どうやら、大丈夫のようですね」

「名案なんだろうな」

「そう思いますよ。外郭団体を、ひとつ作るのです」

「それに、問題の処理をまかせようというのかい。行政改革への逆行だと、非難の声があがるばかりだろう」

「まあ、終りまで聞いて下さい。そういうたぐいのものとは、まったくちがうのです。予算もまったく不要、看板も出さない。われわれの頭のなかだけにある、幻の団体。ダーク・アスピリン・グループという名はどうでしょう。体制反対のためには手段を選ばない、過激的な秘密集団なのです」

「それだったら、赤い突撃隊とかいう名のほうが適当なんじゃないかな」

「思想的には、ぼやけたところを残しておいたほうがいいのです。よく、テレビの活劇番組に出てくるでしょう。世界征服をたくらむ、悪い集団が。受け入れられる余地はあるのです」

「お子さまむきだな」

「おとなだって、かつては子供だったのですよ。発生すれば、ありうることだなと思いはじめます」

「悪と反逆の組織、ダーク・アスピリン・グループ。その姿をあらわすというわけか」

「そう簡単にでは、ありません。最初はそれとなく……」

「なんで、こんな妙な話になったのだ」

だれかが言い、発案者の若手官僚は説明に移った。

「さっきの、豚小屋の事件。ダーク・アスピリン・グループの一員が、計画的に豚小屋めがけて石をころがしたとすればどうでしょう。裁判の結果、金は支払うことになるかもしれない。しかし、役所の手落ちという不名誉は、避けられるわけです」

「なるほど、そうか。うまいぞ。天候の予報のはずれたのを弁解する、いい口実になる。気象衛星にむけ、時たま、おかしな妨害電波が発信される。おそらく、ダーク・

アスピリン・グループのしわざ……」

「その調子です。おわかりいただけたようですね。しかし、あまり手軽に使っては、怪しまれるもとになりかねません。また、あきらかに官庁側に非のある場合には、使うべきではないのです。たしかに天災で、それなのにむりやり人災として官庁に責任を押しつけようとの動きが高まった時、はじめて出現するのです」

「正義の味方、悪の組織のダーク・アスピリン・グループというわけか」

「そうです。どんな時に出現させるかは、この会議できめましょう。緊急の場合には、わたしにお電話を下さい。発案者ですから、それぐらいの権限はまかせて下さい。慎重にあつかいますから」

「いいでしょう」

かくして、会議は終った。みなの顔には、ほっとしたような気分があらわれていた。

つぎの会議の時、ある官庁の者が発言した。

「あの件、ほら、一部の地方で変な害虫が発生し、被害が出ている。監督官庁の防疫態勢の不備の責任だと、訴えを起そうとの動きがある。機先を制して、あれを出現させたいのだが」

発案者の若手官僚が聞く。

「専門家はどういっている」

「あれは、熱帯に特有の害虫なのです。異常気象ということもあり、風で卵が飛んできて、ふえたらしい。まもなく、おさまるだろうとのことです」

「ひでりや豪雪で、政府にかみつくやつはいない。だが、それが害虫となると、さわぎたてる。風の責任まで押しつけられて、たまるか。仕方ない。ダーク・アスピリン・グループに出てもらうか」

「大臣が弁解用の原稿を、待っています」

「役所に電話があり、ダーク・アスピリン・グループの実力を見よと告げられた。まったく許しがたい行為だが、当局の努力で、やつらの意図はすぐに押さえられる。被害地区の人たちは、まことにお気の毒。補助金を支出するといったところで、いいんじゃないかな」

「うん。ぴしゃりだ。同じ払うのでも、補助金という形なら、威張って出せるし、ありがたがられる。役所の権威も、保てるというわけだ」

つぎの会議では、外交関係の官庁の者が言った。

「弱りましたよ。今回の亡命さわぎには。亡命は許さぬ。こっちへ引き渡せと、あの国が要求している。国交上、ごたつかせたくない時期なのです。しかし、一方、逃がしてやれとの世論も強くて……」

相談を持ちかけられ、発案者の若手官僚は言った。

「当人にはかわいそうだが、引き渡したらどうでしょう。国交をまずくするより、たかがひとりを見殺しにしたほうがいい。しかも、外国人だ。小の虫を殺して……」

「しかし、世論が……」

「ダーク・アスピリン・グループのせいにしましょう。わが国との対立をひき起そうと、やつらがたくらんだことだ。政府は、そのような手には乗らない。ぶじに解決。だれもなっとくし、そのうち忘れてしまいますよ」

そのつぎの会議でも、それは使われた。

「美術館から、名画が盗まれ、これには弱りました」

「新聞に、でかでかとのっているな。実情はどうなのだ」

「こんなこともあろうかと、本物は金庫のなかで、飾ってあったのは精巧な複製。しかし、それを言ったら、美術館は金を取って見物させ、大衆をだましていたのかとな

る。本物はぶじでしたでは、管理の責任を問われる。こう大さわぎになってはね」

「やむをえない。やつらのせいにしましょう」

まさに、それはつごうよく展開した。いや、展開させたのだ。大臣が発表する。

「ダーク・アスピリン・グループより、取引きの要求があった。最初は、大金をはじめ多くの条件をつけてきた。だめなら、絵は焼き捨てるという。しかし、役所の関係者は誠意をもって交渉し、美術品がいかに貴重か説得した。そして、外国のある都市で、回収することに成功した。そのかわり、自動車一台に相当する金額と、精巧な複製の絵を渡した。また、彼らのメッセージを公表すると約束した。残念だが、それを果たす……」

残念そうに、それを読みあげる。

「……われわれの実力は、おわかりと思う。われわれの敵は支配者であり、美を愛する点ではひけをとらない。だから、交渉に応じた。しかし、つぎは、そうはいかない。われわれはあせらぬし、あきらめないのだ」

かくして、本物の絵は美術館に飾られ、警備は一段と厳重になった。各美術館の盗難防止の予算が、みとめられた。そして、役人もなかなかやるじゃないかと、評判がよかった。

それにしても、ダーク・アスピリン・グループは、手ごわい存在だ。社会に一種の緊張感がひろまり、それは悪いことではなかった。

そのごもダーク・アスピリン・グループは、さまざまな悪事をつづけた。列車事故を起したし、国立の研究所の一部の爆破もやってのけた。どうやって忍び込んだのか、大臣の国会演説用の原稿の一部を、巧妙にすりかえるということさえやってのけた。どの役所も被害を最小限にとどめるのを目標としているが、ゼロということは不可能なのだ。

会議の席上、治安関係の官庁の者が言った。

「さっきとどいた報告だが、まことに困った事態となった。警官が挙動不審な男を連行し、調べたところ、ダーク・アスピリン・グループの一味だと自白した」

「まさか」

「下の者に、じつはと打ちあけられない。新聞記者もかぎつけた。仲間の名前も、そのうちしゃべるだろう。やつら、政府を相手にやりあった男として、歴史に名を残すつもりらしい。あれこれ、ずいぶん利用したからなあ」

「今後、どうする」
みなに迫られ、発案者だった若手官僚は言った。
「つぎは、ほかの人の考える番ですよ」
「いい知恵が出ないからこそ、たのむのだ。なんとかしないと、以前に逆もどりだ。たのむ」
「わたしの言う通りにしますか」
「する、する。必ず、そうする」
「じゃあ、言いましょう。残党に活動をつづけさせればいいのです。まず、裏切りの密告者を、巧妙に毒殺。フェニックス・レーザー・チームとか名づけてね。浜の真砂はつきるとも、ですよ……」
「うまく、いくかな」
「やる以外、ないでしょう。手はじめに、うんと強烈なことをやらせましょう。なれあいだなんてうわさを、ふっとばすようなことを。優秀な高級官僚をひとり、自殺としか思えないような形で殺すのです。なにごとも、官庁の威信のため。くじを作りましょう。もっとも、わたしは発案者ですから、引きませんけど」

出現したやつ

「やれやれ、ひと仕事かたづいた」
その男は、ホテルの一室でつぶやく。三十歳を越した会社員。正直というのが唯一のとりえで、取引先への書類をとどけるために、この地方都市へやってきた。それ以上のこみいった件はなにもなく、ぶじにすむ。
ホテルへ戻り、少しおそい夕食をすませ、部屋でしばらくテレビを見た。そして、眠る前に一杯と、ルームサービスでビールを取り寄せた。
「ひとりで飲むのは、あじけないな」
栓を抜いた時、柔かい雑音のようなものが耳に入り、換気孔から白っぽいものが流れたかと思うと、男のそばになにものかが出現した。
小柄な男性で、年齢不詳。五十歳前後といったところか。ちゃんと見えているし、たぶん手でさわれるのだろうが、どこか実在感が薄い。なにを考えているのか、表情からはわからない。とんがった形の帽子をかぶり、ピエロのようなだぶだぶの服を着

ていた。

「な、なんだ。ただものじゃないな」

男は声をあげる。ドアには鍵がしてあり、見まちがいでなければ、こいつは格子のはまった換気孔から出現したのだ。

「はい」

「幽霊といったとこかな。しかし、そんなのに、とりつかれるおぼえは……」

「鬼気せまるものが、ありますか」

「べつに。ほがらかな気分にもなれないが、ぞくぞくっともしないな。もっとも、突然あらわれたのには驚いたが」

ひと息ついた男はビールをコップにつぎ、半分ほど飲んだ。相手は言う。

「うらめしがったりは、しませんよ。おじゃまでしたら、すぐに消えます」

「まあ、待てよ。せっかく来たのだ。いったい、なんなのだろう、こいつは。幻覚でも見ているのだろうか」

「アル中とか、精神的な不安とか、なにか心当りはありますか」

「ないね。ビール一本が、いいとこだ。精神も、そんなにデリケートじゃない。幻覚でないとすると、だれかの霊魂かな。死にぎわに親しい人の前に姿を見せるとかいう話は、聞いたことがある」

「そんな感じが、しますか」

「考えてみたら、それほど親しい友人はいない。その顔に見おぼえはない。ピエロの服の好きなやつなど、知らないな」

男はビールを飲み、首をかしげた。

「でしょうね」

「妖精のようなものかな。わたしに幸運をもたらしてくれる……」

「そういうことができればと、内心つくづく思ってるんですけどね」

相手は、恐縮した口調になる。男は少し考えてから、ひざをたたいた。

「だんだん、わかってきたぞ。ずばり、悪魔だろう。巧妙な作戦だ。なんとなく気を持たせておいて、徐々に自分の術中におちいらせるのだろう。そうにきまっている」

「そんな、大それたものじゃ、ありませんよ。望みをかなえてあげるかわりに、魂を取るとかいうやつでしょう。ちがいますよ。魂なんか欲しくないし、望みをかなえてあげる力もありません。あるのなら、とっくに交渉に入っていますよ」

それを聞き、男は腕を組む。

「となるとだ、うん、重要なことを忘れていたぞ。宇宙人だろう。攻撃のため、地球

の偵察にやってきた……」

「偵察だったら、こんなところで、うろうろしていませんよ。でしょう」

「そうだな。すると、友好か。その服装は、その表現のつもりか」

「友好だったら、もっと実力者の前にあらわれ、なにか用件をのべていますよ」

「だろうな。わたしは、大物じゃない。やっぱり、どう見ても宇宙人らしくないな。ううん。祖先の霊がつかわした、なにかかな。わたしを助けてやろうとして……」

「さっきから言ってるでしょう。なんにもしてあげられない。そういう力は、なにもないんですよ」

「ヨーロッパの民話にあったみたいだな。眠っているあいだに、仕事を手伝っておいてくれるという、おとなしくて小さな人……」

「困りましたな。くどいようですけど、なんにもできないのですよ」

相手は首と手を振る。男は、さらに少し飲んで言った。

「なんにもできないし、やる気もない。それはたしかなようだな。考え方を、変えなければならない。とにかく、なにかがここにあらわれ、わたしはそれを見た。これは事実だ。問題は、そこだろう。これをきっかけに、わたしに運がむいてくる……」

「そううまくは、いきません」

「では、逆か。悪い前兆か。そのため不幸になる。病気になって、やがて死……」

青ざめる男に、相手は言う。

「そんなご心配も、なさらないで下さい」

「わからん。こんな体験を話しても、だれも身を乗り出してこないしな。小男のピエロがあらわれただけじゃあね」

「でしょうね。評判にならなくて、助かっています」

「いつも、この部屋に出るのかい」

「そうとは限りません。気がむいた時、気がむいた場所へです。それぐらいの自由はあるのです」

どうも要領をえない。男はビールの残りをつぎ、ぐっと飲んで言った。

「いったい、なにものなのだ」

「気にしないで下さい。まもなく消えます。忘れてしまって下さい」

「しかし、せっかく出てきて」

「世の中には、いろいろなものがあるのです。妖精もいるでしょう、幽霊もいるでしょう。しかし、毒にもならぬ、薬にもならぬ、無害無益のものもあるのです。つまり、わたしはそういうたぐいなんですよ」

「ばかげていると思わないか。となると、存在意義というものは……」
相手は薄れながら言った。
「意義があって存在しているものばかりとは、限りませんよ。石ころとか、道ばたの草とか、わたしとか、それに、あなたとか……」

ある休日の午後

その三十歳の男は、自宅のマンションで、窓ぎわのゆったりとした椅子にかけ、ぼんやりとそとを眺めていた。時間は、おだやかに流れている。
休日の午後。妻は三つになる息子を連れ、買い物に出かけている。ついでに妹のところへ寄ると言っていたから、帰るのは夕方ちかくになるだろう。
ここは十二階。遠くまで見渡せるが、もう新鮮なものではない。男はテレビやラジオをつける気にならなかった。ステレオを聞く気にも、本を読む気にもならなかった。静かさを楽しみ、からだと頭を休めている。
これといった悩みもない。もちろん欲をいえばきりがないが、不満のない生活がつづいているのだ。
「ああ、あ……」
男はあくびをする。だれに遠慮もいらない、思い切り大きなあくび。そのこころよさの絶頂で、ふと、なにかを感じた。そして、終ったあとも、頭の片すみにひっかか

っていた。

最初のうち、それがなんなのか、はっきりとはわからない。なんなのだろう。考えようとしたが、具体的なものにまとまらなかった。

なぜか、男は大学の入試の時のことを思い出していた。自分では全力を出したつもりの答案だったが、結果は補欠だった。だめだったかと、いったんはあきらめた。しかし、まもなく合格の通知が来た。ちょうど、疲れ切って列車へ乗った時、満員の席からひとりが立って、むこうの出口へと歩いてゆく人を見るような思いがした。

とにかく、その大学に入れたのだ。いまの会社へ入社できたのも、そこを卒業したおかげといえそうだ。

そういえば在学中、こんなこともあったなあ。小学校のころの先生の墓参に、少しはなれた町へ出かけた。私鉄で二時間、駅をおりてバスで三十分ほど。不便なところだが、そのお寺の近くは俗化していなくて、空気もよく、こころよかった。野原でねそべったりした。いつのまにか時がたち、帰ろうとした。

バス停まで来てポケットに手を入れ、札入れのなくなっているのに気づく。カードも入れてあった。どこで落したのだろう。お寺へ戻り、野原をまわり、ふたたびバス停へ引きかえした時には、もはや最終バスの出たあとだった。

あたりの地面を見まわし、にが笑いする。お金が落ちていたとしても、もうバスは来ないのだ。歩く以外にない。なんとか駅までたどりつくと、最終の電車はもうなかった。

始発まで待つか。またも苦笑。待ったところで、切符を買う金がないのだ。仕方なく、道を歩きはじめる。どれくらいの時間がかかるか、考えただけで、うんざりする。しかし、ほかに……。

そうだ、タクシーをつかまえよう。帰りつけば、その代金ぐらいは払えるのだ。しかし、利用者が少ないせいか、タクシーの走るのを見かけなかった。

とぼとぼと歩きつづけていると、そばに車が寄ってきた。運転席の中年の紳士が、声をかけてきた。

「なんでしたら、お乗りになりませんか。方向が同じなら……」

それへの返事をすると、相手は驚いた。

「そんなに遠くまで、歩いて帰るとは」

「じつは、お金を落してしまって」

「そうでしたか。わたしもその近くを通ります。ちょうどいい。お乗りなさい」

「ありがとうございます。助かりました」

あんなにほっとしたことは、なかったな。きのうのことのように思い出せる。ありがたかった。もっとお礼を言うべきだったのだろうが、どう感謝していいのかわからなかった。

また、卒業ちかいころには、こんなこともあった。

級友のひとりに、話しかけられたのだ。

「あしたハイキングをしようと、指定席の切符を買ったんだが、行けなくなってしまった。あげようか」

「払い戻しができるんだろう」

「めんどくさいし、駅まで行かなくちゃならないし」

「ひとりで行くつもりだったのかい」

「ああ。知っての通り、花の写真をとるのが趣味なんだ。いま季節がちょうどいいんだけど、伯父が事故にあって、見舞いに行かなければならなくなった」

「いいところのようだな。もらおうかな。お礼に、そのうち食事をおごるよ」

そんなわけで、つぎの日の朝、出かけた。そのハイキング・コースには、まだ行ったことがなかった。天気もいい。

列車の指定された席にすわると、となりに感じのいい女の子がいた。話しかけてみ

る。

「どちらまで」

行く先は、同じだった。もっとも、彼女のほうはその近くに親類が住んでいて、なにかを届ける用事のためとのことだった。

そのため少しの時間を待たされはしたが、ハイキング・コースをいっしょに歩いてくれた。申しぶんのない一日。

それをきっかけに、つきあいがはじまった。

いまの妻が、彼女なのだ。男はそのことに満足している。ということは、たまたま切符をもらったおかげでもある。

もしかしたら、おれは幸運の星のもとに生れているのかもしれない。最良とはいえないまでも、なにかというと、いいことに恵まれている。

そういえば、あれは会社へつとめてまもなくのことだったなあ。そう。営業部員として、はじめて地方に出張させられた時のことだ。新しく開発された、子供用のオモチャ。なんとしてでも、この販路を拡張してこいと命じられて。

どうしたらいいのか見当もつかないまま、ある地方都市へ着いた。紹介状ひとつあるわけじゃない。会社はこうやって、新入社員をきたえようとしているのだろう。駅

の改札を出たが、右も左もわからず、そこの待合室のベンチにかけて考え込んだ。

駅前の広場のむこうに、小さなデパートがある。あの仕入れ係にでも、会いに行くか。しかし、たぶん、うまくいかないだろうな。本店と連絡した上でといった答えが、かえってくるだけだろう。

その時、老人が話しかけてきた。

「なにか、お困りのことでも……」

「え、はあ。あることはあるんですが、道がわからないといったような、簡単なことじゃないのです」

「とにかく、お話しになってみませんか。ご相談にのれるかもしれません」

ひまを持てあましている人なのかなと思いながらも、だめでもともと。仕事のことを話すと、老人は言った。

「そうでしたか。それでしたら、やはり、あのデパートはむきません。なにか新しいことをはやらせる場合、町によって、それぞれ急所があるのです」

「急所が……」

「婦人用品ならどこから、紳士用品ならどこからと。そんな品物だと、もう少し先の神社の神主さん一家がいい。代々、ひとに好かれる性格なんです。格式の高い旧家じゃないから、親しまれている。あそこの子供に、ひとつプレゼントするといいと思います。そして、小学校のそばの、オモチャ屋に置かせてもらう」

「そういうしくみですか」

「あと、この近くに、雑貨の卸し問屋があります。そこへパンフレットと名刺を渡しておけば、いい結果になるでしょう」

「ていねいなご指示、ありがとうございます。はじめてお会いしたわたくしに、こうまで親切にして下さるとは」

老人はつぶやいた。

「喜んでもらえるのは、いい気分のものですからな。それに、わたしにも息子がいたのですが……」

あとは聞けなかった。何年か以前、その息子がこの駅からどこかへと出かけていった。そして、好ましからざる人生をたどり、会えないままになっている……。

そんなことなのだろうか。まあ、いまは、すなおに感謝だけをしておくのがいいのかもしれない。

ためしにとその通りにやってみると、やがてうまいぐあいに進展した。注文はふえていったし、仕事のこつのようなものを身につけた。あの老人に会わなかったら、な

おしばらく、まちがいを重ねたり、上役におこられたりのくりかえしを体験したことだろう。

おれは、ひとに好かれるたちなのかな。少なくとも、あの老人は好印象を抱いてくれたようだ。

うん、これも、いまだに忘れられない出来事だ。

一年ちょっと前のことだ。幼い息子が、夜中に大声で泣き出した。身ぶりから察するに、歯が痛いらしい。こまかくふるえてもいる。よくない症状のようだ。

いままで、こんなことはなかった。医者へと思ったが、土曜の夜。だめとは思いつつも、近所の病院をたずねて回ったが、どこもしまっている。友人に医者のいないことを、あらためて後悔した。

救急車を呼ぶか。しかし、まず「どうしました」と聞かれる。なんと答えたらいいのだ。まともに「子供が歯が痛いと泣いているので」と説明するか。

たぶん、断わられるにちがいない。かりに運ぼうにも、どの大病院も、歯科は昼間だけ。救急車も、子供の歯痛まで面倒はみきれない。とはいうものの、あの泣き声は、ただごとではない。月曜の朝まで、あのままで大丈夫なのか……。

道ばたにたたずんでいると、タクシーがとまった。ドアが開き、声をかけられた。

「お乗りですか」

「あ、そんなかっこうに見えましたか。乗りたいのだが、どこへ行ったものか見当がつかないでいるのです」

「どうなさったのです。事情がありそうですね。おっしゃって下さい。お手伝いしますよ。ひとまず、なかへ……」

男はシートにすわり、とまったままの車のなかで、わけを話した。聞き終って、運転手は言う。

「ご心配ですな。そうだ、あそこなら、やっているかもしれない」

「なにか心当りが、あるのですか」

「十五分ほどのところに、なんとか医院というのがある。盛り場のそばなのです。酔っぱらっての、けが人が多いのか、おそくまであかりがついている。しかし、もうおそすぎる時間かな」

「わらにもすがりたいよ。そこへ案内してくれないか」

入口のあかりは消えていたが、窓に人影がうつっている。ためしにとベルを押すと、年配の男が出てきて、あいそよく言った。酒を飲みかけたところのようだった。

「なにか、ご用ですか」

「とつぜんで申しわけありませんが、子供のようすが普通でないのです。みていただけるとありがたいのですが。先生に、とりついで下さい」
「医者はわたしです。早いほうがいい。ここへ連れていらっしゃい」
「あ、ありがとうございます」
男は自宅へ電話をかけ、妻に話す。タクシーはさっきの場所へ行って、妻子を乗せてきた。
診察をして、医者は言った。
「うちは外科が専門なので、くわしくはわかりません。のどなのか、歯なのかもわからない。ひとまず、抗生物質と痛みどめの注射をします。ほかに、薬をあげましょう。四時間おきに飲ませて下さい。これ以上の悪化はくいとめられます。月曜になったら、近所の専門医の診断を受けて下さい」
子供は泣きやみ、月曜までおとなしくしていて、治療によって、快方にむかった。あの医者がいなかったら、いや、あのタクシーとめぐりあわなかったら、どうなったことか。
悪化していたかは、なんともいえない。しかし、泣き声と不安におびえ、おののきながら、月曜の朝までをすごさなければならなかったのは、たしかだ。

おれは、運がいいようだ。
男は、そう思った。そのほか、いろいろなことを思い出した。どれも、困りきった時、うまいぐあいに打開できた。
世の中、幸運と不運とは、同じような割合で存在しているのではなかろうか。しかし、おれの場合、単独の不運というのにあったことがない。いつも幸運がセットとなっていて、なんとかなってきた。妻との出合いは、幸運そのものだ。
こういうものなのか。そういう人間だけが、生き残っているというのだろうか。
そうではあるまいと、男は思う。不運つづきに悩んでいる人だって、いるはずだ。せっぱつまっての犯罪もあるし、夜逃げも、心中も発生している。それなのに、おれはなぜか恵まれている……。
電話のベルが鳴っていた。
考えごとをしていたので、男がそれに気がつくのに少し時間がかかった。受話器をとる。
「はい」
と応答すると、相手は言う。

「とつぜん、お電話しますが……」
「どなたです」
「そんなことは、どうでもいいのです。あなたはですね、わたしの話を聞かなくてはならないのですよ……」
押しつけがましい内容だったが、その口調は、じつに親しげなものだった。営業用でなく、心に響いてくる。そのため、男は切るのをためらった。
「どんな、ご用でしょう」
「あなたはこれまで、いろいろと他人から親切な行為を受けてきた。でしょう……」
「ええ、そうみたいです。いまも、とりとめもなく回想していました。しかし、そのことがなにか……」
男が聞くと、相手は言った。
「ですから、時には他人のために役立つことをしてもらいたいわけで」
「ぼくに、できることなら……」
「簡単なことです。ある短い言葉を、この電話にむかって言って下さればいいのです」
「やりましょう。どんなことですか」

「では、いいですね。こうです。お兄さん、あのこと、よろしくたのみます。一生のお願いです」
しばらくの中断。男はふしぎがる。
「それだけですか」
「そうです」
「しかし、ぼくには兄も、義理の兄もいない。なぜ、そんなことを言わなくてはならないのです。悪用するのですか」
「あなたにお兄さんがいなければ、悪用の心配はないわけでしょう。会社の社長室に盗聴装置をおけとか、金庫の番号を教えろとか、どこのカギをはずしておけとかいうのとはちがうのです。ただ、あなたの声がいただきたいのです。ある役に立つのです」
「でも、気になるなあ」
「できれば、もっとすんなりした形のものを、おたのみしたかった。しかし、急を要するのでね。あなたは、いろいろと恵まれた体験をお持ちだ。そのことを考えたら、いやとは言えないと思いますがねえ」
親しさとともに、説得する力も含まれていた。もし断わったら、どうなるのだろう。

そう考えると……。

「わかりました。やりますよ」

そして「お兄さん、あのこと、よろしくたのみます。一生のお願いです」と言った。相手は「もっと真に迫って」と言い、三回目に合格となった。なんに、どう利用するのだろう。それは知り得ないことらしい。相手は言った。

「どうも、お手数をかけました」

「これだけで、いいのですか」

「そうです。あなたのこれまでの幸運の帳尻は、このことで片がついたとお思い下さい」

と言われ、男は少し考えてから聞いた。

「いままでの幸運と、関連のあることのようですね。どうなっているのです。なにか、組織のようなものなのですか」

「経過や結果から、そうお思いになるのも無理ありませんね」

「というと……」

「言い方を変えると、あなたの潜在意識の作用とも……」

「もう少し、わかりやすく説明してくれませんか」

「つまり、あなたのためになる、一連の動き。これは、あなたの守護霊の声と受け取られたらどうでしょう」

「ますます、わからなくなる。しかし、ぼくに理解できない、なにかのしくみが存在しているみたいですね。なんのために……」

「面白さですよ。そうなっていなかったら、あなたの過去は、平穏そのもの。そのかわり、追憶すべきものもない」

「そういうものとはね。あ、最後の質問。こういうの、だれでもなんですか。限られた人におけることですか」

「それは、知らないほうがいいでしょう。では、こちらからの最後の質問。大体のことは、おわかりでしょう。あなたは、差引きゼロになったのです。ここで中止なさってもいい。しかし、あらためておつづけになることもできる。どうなさいます……」

待遇

その青年は目をあけると、あたりを見まわした。

日光が窓からさしこんでいる。窓のそとは林。その林のむこうがどうなっているのかまでは、わからない。しかし、いい感じではなかった。窓には鉄の格子がはまっているのだ。体当りしても、びくともしないだろう。

反対側はドア。普通のドアではなく、同じように鉄の格子でできたドア。そとの廊下を見ることができる。

しかし、部屋のなかは、まあまあだった。ベッドがあり、机と椅子があり、床にはじゅうたんが敷きつめてある。ホテルにくらべ、そうひどく劣るものではない。一隅にドアがあるが、たぶんバスルームだろう。

「おい、だれかいないか」

青年が声をあげると、四十歳ぐらいの男が、鉄格子のドアのそとへ来て言った。

「ははあ、意識が戻りましたな」

「いったい、ここはどこだ。おれは、なんでここにいる」

「ここは刑務所で、わたしは看守。あなたは囚人です。政府の重要人物を狙撃した。うち殺したのですよ。おぼえておいででしょう」

「そうだ。たしかにやった。社会の現状に不満で、非常手段を実行に移した。命中した手ごたえは、いまでも思い出せる。しかし……」

「そういう、とんでもないことをしたのです。ただですむわけが、ない。当然のむくい。その結果として、ここへ入れられたのです」

「たしか仲間がいたはずだが、どんなやつだったか、ぜんぜん思い出せぬ。親しかった友人についても……」

首をかしげる青年に、看守の男は言った。

「家族についてもでしょう。そういった親しい人間関係についての記憶は、すべて消したのです。あなたのためですよ。心をわずらわさなくて、すみますからね。心配で眠れないなんてことも、ないわけです」

「妙な気分だぜ。妻子がいたのかどうかも、わからないんだから。裁判についても、なにも思い出せない。どんな判決だったのかも」

「信念にもとづいて、からだをはってしたのでしょう」

「ああ」
「じゃあ、極刑に処せられても、文句は言えないはず」
「どんな極刑だ」
「それは言えません。覚悟の上での実行でしょう。その場で射殺されたかも、しれないのですよ。じたばたなさっちゃ、見苦しい。すぐさま、どうこうなるわけじゃなし」
事態はのみこめた。一日三回、食事が運ばれてくる。あとは、ベッドの上にねそべっていればいい。そのことへの看守の注意は、なかった。
しかし、親しい人物への記憶がぜんぜんないというのは、どうもうまく時間をつぶせない。頭に浮かんでくるのは、乗り物で時おり顔をあわせた老人とか、片思いに終ってあきらめてしまった女性とか、たまに出かけた小料理屋のあまり美人でない女主人。感情がともなわないのだ。
「おい、看守」
「なんですか」
呼ぶと、すぐにやってくる。
「ぜいたくないいぐさかもしれないが、退屈でならない」

「でしょうな。読書でもしますか。どんな本でもとはいきませんが、たいていの本ならお持ちします……」
「読ませてもらえるのか。ありがたい。ユーモラスなものは、どうかな」
「二、三冊、持ってきましょう」
それは、かなえられた。しかし、どうもものたりない。看守を呼んで言う。
「本を読んでいるうちに思い出した。わたしはコーヒーを愛用してたようだ。もらえないかな。インスタントでいい」
「お持ちしましょう、高級なのを。お望みなら、サイフォンも。火事には、なりっこありません。室内の品の大部分は不燃性で、自動消火装置が天井についています」
申しぶんなかった。
心おきなく、読書にふけられた。下着、シーツは、いつでも洗濯してくれた。週に一回、掃除機を貸してくれる。
青年は、看守に言った。
「運動不足になるなあ。たまには、そとへ出してくれないかな」
「それはだめです。理由はいろいろありますが、まず逃亡防止のため。そのかわり、運動用の器具をお持ちしましょう。多目的用のが作られていますね」

「いったい、ここはどこで、ほかにも囚人はいるのか。鳥の声しか聞こえない」
「それについては、お教えできません。知る必要も、ないでしょう。まあまあの生活と、お思いになりませんか」
「しかし、これじゃ、池の魚だ。生存しているだけのこと。せめて、新聞を見ながら、酒を飲むぐらいは……」
「お酒がお好きとは。けっこうですな。お持ちしますよ。それから、新聞も。ただし、一紙に限り、また、一日おくれです。天気予報を必要とするわけでも、鉄道の不通、株の動き、一刻を争って早く知っても無意味。それでいいでしょう」
「いいとも、いいとも」
酒や新聞も許されるとは。高級ではないが、ウイスキーのびんが半ダース。残りが一本になると、補充される。
久しぶりの新聞は面白かったが、日がたつにつれ、いつ戻れるかわからない社会の出来事と思いはじめ、あまりくわしく読まなくなった。
青年は、申し出てみた。
「いくらなんでも、テレビはだめだろうな」
「ごらんになりたければ、お持ちしましょう。ただし、まじめな一局しか映りません

よ。脱走したくなるような番組は、好ましくないのです。それと、ニュースと天気予報の時は、テレビの電源を切ります。それでよろしければ」
「いいとも。ないのより、はるかにいい」
それもとりつけられた。テレビ、新聞、酒、コーヒー。食事はいうまでもない。予想もしなかった待遇だった。
ひとつ、言うだけ言ってみるか。
「看守さん。これはむりと思っていますが、言っていいかな。それを口にしたとたん、一瞬のうちに、ここがガス室になってということは……」
「断言はできませんが、あなたの考えてることの見当はつく。それなら大丈夫です」
うながされ、青年は小声で言った。
「女ですよ……」
「やはりね。お望みは、かなえましょう。もっとも、お好みの美女というわけにはいきませんし、月に三回を越えてはだめ」
「本当か。じゃあ、今夜にでも」
それも、かなえられた。しかし、鉄格子のドアから送りこまれた女は、なにを聞いても返事をしなかった。ある種の薬品を注射されているらしい。この刑務所、自分の

立場などについて少しは知ることができるかと期待していたが、そううまくはいかなかった。この女も囚人なのかも。

翌朝、女を連れに来た看守が言う。

「お気に召しましたか」

「まあね」

「ここも、悪くないでしょう」

「これで自由があれば、申しぶんないんだが」

「囚人であることを忘れては、困りますよ。あなたは有罪ときまり、ここへ送られてきた」

「そとを歩いたら、さぞ解放感が味わえるだろうな」

「そればかりは、です。しかし、解放感なら、味わわせてさしあげます。薬です。霧にして吸うか、酒にまぜるか」

「そんなものが、あるのか。ためさせてくれ」

「その女を戻してからです」

看守は、薬を持ってきた。びんのなかの一錠を酒にまぜて、飲む。ひろびろした場所を動きまわる気分に、させてくれる。まさに、これで文句があるかとの作用だった。

さまざまな希望が、かなえられた。しかし、極刑の判決を受けているのも、確実なのだ。この二つは、関連しているにちがいない。

殺人をしたのだから、どうされても仕方がない。しかし、いつ、どうなるのか、まるでわからない。その不安を消そうと、酒と薬を飲む。別世界への逃避はできるが、それは一時的なもの、さめればそれで終り。

新聞を熟読し、テレビも眺める。しかし、ヒントになるものは、なにも得られない。あるいは特別に作られた新聞、特別に作られた番組なのかもしれない。刑務所なら、ほかにも何人か収容されているはずだ。やれないことではない。しかし、そうなのかどうかも、たしかめようがない。

過去を忘れさせられ、今後どうなるかも知りようがない。わかっているのは、殺人をやって極刑の宣告を受け、ここに入れられているということだけ。どう考えても、いい進展は期待できない。

いずれ、なにかの、いけにえに使われるのだろうか。新聞もテレビも信用できないとなると、世の中に邪教がひろまっているのかもしれない。その神に供えられ……。

凶悪犯罪が横行していて、いつ「人質を出せ」と要求されるか、わからない。ここで、その出番を待たされているのかも……。

いや、臓器移植用のためか。おれは重要人物を殺したのだ。だから、外国からやってきた重要人物がやられた場合、決して死なせるわけにいかず、そのために……。

それとも、新薬の人体実験かな。それは、すでにはじまっているのかもしれない。食事、酒、すべて与えられたものだ。なにをまぜられても、調べようがない。いつ副作用があらわれ……。

宙に浮いているような気分。

女を呼んでもらい、それに、酒、薬。気分はまぎれるが、さめればもとの疑問の現実。覚悟をしようにも、どんな形でしたらが、まるでわからない。あれこれ想像したが、それ以外の、まさかということだってありうるのだ。

酒、コーヒー、薬、女……。

窓のそとの林。あれは、作りものの光景じゃないかと思えてきた。さわって、たしかめられないのだ。

それに、あの看守。精巧なロボットかもしれない。そっと服にさわった時、感電したような気分になった。また、あの女。注射で声が出ないみたいだが、じつはアンドロイドだからかも……。

とめどなく落ちてゆくような気持ち。

「わああ……」

青年は大声を出した。看守がやってきて、鍵をあけてなかに入り、目をのぞきこむ。それから、所長のところへいって報告。

「やっとです」

「四カ月かかったわけだな。気の毒だが、殺人をおかした危険人物。極刑は、いたしかたない。さあ、集団収容所へ移すか。あの方法だと、凶暴にならず、気の抜けたようになり、あつかいやすい。しかし、それにしても手間がかかるな。死刑廃止が実現してからは」

「そうですね。殺すかわりに、生けるしかばねに仕上げなくてはならないんですから」

たのみごと

男は、病院にかけつけた。妻が交通事故にあい、重態とのしらせを受けたのだ。つくやいなや、医師に言った。
「どうなんです。ぐあいは」
「まことにお気の毒ですが……」
「では、もう手おくれ」
「いま、意識を失っておいでです。しかし、車にひどくぶつけられた。内臓を、かなりやられています。もう、時間の問題です」
「なにはともあれ、会わせて下さい」
「どうぞ。こちらです」
案内されて、病室に入る。妻は目をとじて横たわっていた。かすかに息をしている。
男は医師に泣きついた。
「なんとか方法はないのですか。手術するとか」

「何種もの臓器を移植すれば、あるいはです。しかし、それは不可能ですしね」
「そうですか。しかし、このまま別れるなんて。せめて、少しでもいいから、話をしたい。それぐらいは、できるでしょう」
「やってみます」
カンフル剤やなにかが、注射された。妻はかすかに目を開いた。男は耳もとで言う。
「元気を出してくれ」
「あなた、きてくれたのね。あたし、もうだめみたいよ。自分でも、わかるの。きれいな野原で、天使が舞ってる夢を見たのよ。お別れね」
「きみには苦労をかけた。ぼくの働きが悪くて、ぜいたくもさせてやれなかった」
「いいのよ。それより、あたしに話させて。お願いがあるの」
「なんだい」
「あたしが死んだら、あなた、ひとりになるわね。いずれ、再婚を……」
「いま、そんなこと……」
「もう少しよ。あたしの友だちに、玲子さんて人がいるでしょ。むりにとは言わないけど、できたら、あの人と結婚して。悪い人じゃないし……」
「わかった。しかし、なぜ」

それに対し、妻はなにか言ったが、もはや聞きとれず、まもなく息を引きとった。

あれこれとあり、身辺が一段落。男は、妻の最期の言葉を思い出した。なぜ、あんなことを言ったのだろう。

つきあってみるか。顔みしりではあるのだ。そして、それは順調に進展した。性格もいいし、スタイルも悪くない。それに若々しかった。妻のすすめなのだ。本人も亡霊となって出現したりはしないだろう。

男はプロポーズし、玲子は承知し、結婚式があげられた。期待どおりというか、期待以上というか、楽しい日々がつづく。前の妻のことを思い出しはするが、それも、ごくたまにとなってゆく。つまり、玲子との生活が、それだけ充実したものだったのだ。

年月は、好ましく流れていった。

ものごと、永遠というわけにはいかない。そのうち、男は体調を崩し、診察を受け、入院することになった。しかし、なかなか回復しない。

ある日、男は見舞いに来た妻に言った。

「医者のやつ、気やすめばかり言っているが、どうやら、ぼくの命は、あとわずからしい。なんとなく、わかるのだ。もしかしたら、今夜で終りかもしれない。仕方のないことだ」

「しっかりなさってよ」

「ぼくが死ぬと、おまえはひとりになる。それが気がかりだ」

「なんてこと、おっしゃるのよ」

「思いついたので、話しておく。いちおう聞いておいてくれ。同僚に、原田というやつがいるだろう。ぼくより若く、いいやつなんだ。まだ、独身。きみの力に、なってくれると思うよ」

「いやよ、いま、そんなお話……」

「まあ、言わせてくれ。相談相手として、あいつは適任だ。それで、打ちとけ、仲がよくなったら、結婚にふみ切るといい。原田には、なにも言ってないがね」

「いやな冗談は、やめてよ。あしたになったら、取り消してね」

その夜、病院から電話があり、容態の急変を知らされた。玲子が行った時には、おだやかな死顔がそこにあった。

葬式だの、あいさつ状だの、玲子のとまどいに、原田はなにかと力を貸してくれた。たよりになりそうだとの印象を受け、困ったことが起るたびに相談を持ちかける。

気ごころが知れ、親しさがましてゆく。

やがて、二人は結婚した。心は通じ合い、トラブルは起らず、すばらしい毎日がつづく。

原田が言う。

「ぼくたちみたいにうまくいっている夫婦って、あまりないんじゃないかな」

「そうね、なにもかも、しあわせよ」

「うん。目に見えぬ、なにかで結ばれあってるって感じだな」

「そうね……」

首をかしげる玲子に、原田は聞いた。

「なにか、言うことがありそうだな」

「そんな気もするんだけど、よくわかんないの。不満めいたことじゃないのよ。でも、むりに考えることは、ないみたいだわ。たぶん、なにかきっかけがあると、ちゃんと頭に浮かんでくると思うの」

気の迷い

自宅へやってきた友人に、その男は催眠術をかけた。そして、こう話しかける。

「あなたは、わたしの言う通りになる」

「はい」

「あなたは、一カ月前にさかのぼります」

「はい」

「あなたは、道に落ちている財布をみつける。あたりにだれもいないので、これさいわいとばかりに拾い、なかの紙幣を自分のポケットに入れてしまう」

「はい」

「それから、バーに行き、その金をすっかり使ってしまう」

「はい。使ってしまいました」

「そうなのです。あなたは、そのことを忘れてはいけませんよ」

「はい。忘れません」

「よろしい。では、これから肩をたたきます。すると、ほかのことはいっさい忘れ、いい気分で目ざめます」

男は、肩をぽんとたたく。友人は目をぱちぱちさせていたが、やがて言った。

「なんの話をしていたんだっけ」

「べつに。ぼくとして、きみに話したものかどうか、迷ってるところなんだが……」

「なにか、奥歯にもののはさまったような言い方だな。言いたいことがあるのなら、ちゃんと話せよ」

「そうだな。なあ、きみ。あんなことして、だれにも知られずにすむと思うかい」

「いったい、なんのことだ」

「ほら、一カ月ほど前のことさ。発覚したら、罰せられるよ。道で財布を拾って、それから……」

「あ、どうしてそのことを……」

「自分でも、みとめてるじゃないか。まあ、おたがい親しい仲だし、ぼくだって話のわからん人間じゃない。きみの立場だってわかる。胸にしまったままにしておくよ」

「すまん。そのかわりと言っちゃあなんだけど、夕食をおごらせてもらうよ。バーにも寄ろう。さあ、出かけよう」

「ああ。あれは、たぶん気の迷いのせいだよ」

「自分でも、ふしぎだ。バーの支払い代ぐらいの金には、困っていないのに。なぜ、あんなことをしてしまったのだろう。やったことは、たしからしいんだが……」

その日、男は大いに食べ、飲み、いい気分になれた。

数日後、道を歩いていると、年配の見知らぬ人物に呼びとめられた。

「もしもし、ちょっと、お話が……」

「なにかご用ですか」

「あなた、あんなことなさって、いいとお考えなのですか」

「あなたになにか、ご迷惑でも……」

「わたしのことじゃ、ありません。何日か前、あなたのなさったことですよ。ありもしない記憶を他人にうえつけ、それをたねに、おどしたりして」

「い、いったい、どうしてそれを」

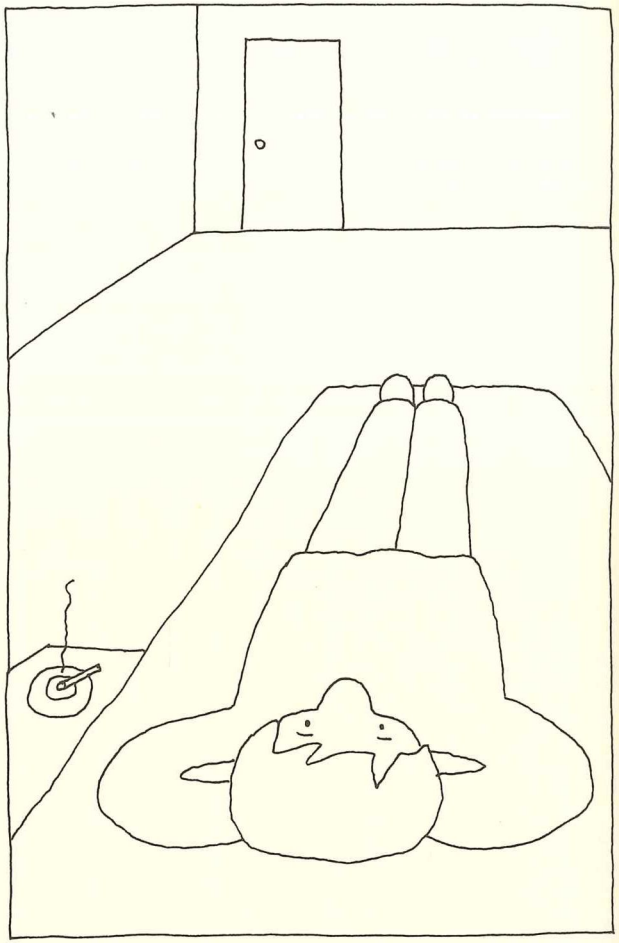
「悪事は、かくしとおせないものなのです。天知る地知る。だから、そんな声をお出しになるのです。ほかの人たちが知ったら、どう思うでしょう」

「お願いです。だまっていて下さい。二度といたしませんから。ただとは申しません。ね、この通りです」

男は持ちあわせていた金の全部をさし出し、何回も頭を下げた。相手は受け取る。
「反省に誠意をみとめます。ご安心なさい。口はかたいのです。あなたを不幸にしたって、楽しいことはありませんものね」
その人物は人ごみのなかに消えた。
そのあと、男はつぶやく。
「あいつ、なぜ知ったのだろう。気づかれるはずは、ないんだがなあ。記憶っていいかげんなものだというけど、たしかにやったような気が。いや、まてよ。おれは催眠術のかけ方なんか……」

静かな生活

朝の九時ごろ。休日でもないのに、その青年は安アパートの一室でねそべっていた。普通の人なら、なにかをやっているべき時間だ。この青年、病気でもなければ、学生でもなく自由業でもない。現在、仕事を持っていないのだ。
十五の時に母が交通事故で死に、二十の時に父が病死した。運もいいほうとは、いえないようだ。ひとりっ子であり、たよりになる伯父さんといったものもない。
それを機会に、大学へ行くのをやめてしまった。学問の好きな性格でなかった。いくつかの職業を転々とした。働くのはあまり好きでなく、遊ぶのが好きだった。
なんだかんだで借金がふえ、親ゆずりの家を手ばなして清算し、このアパートへと越した。いくらか残った金も、ぼやぼやしていたため、まもなくなくなろうとしていた。
「そろそろ、なにか働き口を、さがさなければならないなあ」
とつぶやく。さほど悲痛な感情はこもっていない。もともと楽天的だったのだ。遊



びに出かけたいが、いまやつけのきく店はなく、金を貸してくれる人もなかった。つまり、借金がないともいえた。

そんなわけで、ねそべっている。電気シェーバーでひげをそったが、そのあと、依然としてすることがない。

ドアにノックの音がし、声が聞こえた。

「ごめん下さい」

「どうぞ、お入り下さい」

青年は身を起した。四十歳ぐらいの男が入ってきた。名刺を出す。

「こういう者でございます」

ある地方都市の職員の肩書きがついている。青年は聞いた。

「どのへんにある市ですか」

「車で北のほうへ、八時間ほど。市とはいっても、人口はそれほど多くありません。これといった特色もなく……」

「で、なにかご用ですか」

「じつは、よろしかったら、いや、ぜひともです。わたくしどもの市に、おいでいただきたいのです。そのため、車も用意してきました」

窓から見ると、運転手つきの大型車がとまっている。
「ドライブとは、悪くありませんな」
「いかがでしょう、これからすぐにというのは」
「かまいませんよ」
「しばらく、ご滞在いただきたいのです。身の回り品をお鞄に……」
「ごらんの通り、なんにもない。そこの上着を着れば、すぐにも出かけられる」
「それは、けっこうです。さあ、どうぞ」
車は走り出した。いい乗り心地。青年はそばの男に言う。
「ところで、あまり金を持っていないんだけど、大丈夫ですか」
「ご心配なく」
「なにか、人ちがいしているのじゃないのですか」
「そんなことは、ありません。絶対にありません」
「いったい、なぜ、ぼくを……」
「それについては、着いてからくわしいご説明をいたします」
「よくわからんなあ……」
しかし、アパートでぼんやりしているのより、はるかにいい。青年は、遠慮なく楽

しませてもらうことにした。
暗くなったころ、やっとその地方都市に着く。料亭に案内される。豪華な席が用意されていた。三人ほどの人が待っていて、そのなかのひとりが、名刺を出して言った。五十歳ぐらいか。
「市長の秘書をやっております。この方面の担当でございまして……」
「なんの担当なのです」
「つまり、あなたさまの世話係と申しましょうか。当地は、なかなか静かなところでございます。人情もいい。しばらくお住みになって、いただけませんか。衣食住の一切の、お世話をいたします」
「うまい話だな。きのうまで、これからどうしようと思っていたところだ。そこへ、こんな話が持ち込まれるとは。しかし、待てよ。その代償を、たしかめておかないとね。なにか、とんでもないことをやらされるのか」
「なにもありません。ここに住んでいただければ、いいのです」
「住むのはいいが、ぼくにはなんの才能もない。職をさがしてもらっても、うまくやれるかどうかだ」
「失礼かもしれませんが、住んでいただければ、毎月のお小遣いはさしあげます。ご

結婚なさったら、増額いたします。お子さまが生れたら、さらに……」
「話がうますぎる。裏になにかありそうだ。それを聞くまでは、うんと言うわけにはいかないな」
首をかしげ腕を組む青年に、市長秘書はうなずく。
「それは、そうでしょう。お知りになれば、ごなっとくいただけましょう。どうぞ、お酒を飲みながら、お聞き下さい」
「うん」
ビールがつがれた。
「ここは、歴史の古いところでして」
「そういえば、石垣があったようだな」
「城あとでございます。戦国時代のことですが、殿さまがおり、うまくおさまっておりました。しかし、よその軍勢に攻められ、ついに降伏。殿さまは、妻子と一族をよろしくたのむと願い、相手は承知し、殿さまは自害してしまった」
「いさぎよい人だな」
青年は料理を口にし、ビールもおかわりをした。市長秘書はつづける。
「それが、ことの起りなのです。だれも忘れてしまっていたが、そのうち、新しい城

主に異変が相ついだ。夜な夜なうなされるし、奥方も妙な病気にかかり、家老の屋敷からは馬が逃げてしまう……」
「それはそれは」
「あれこれ調べ、前の城主の一族が、食えなくなったので他国へ越していったことが判明した。ためしに呼び帰してみると、すべてはもとへ戻った」
「なるほど」
「それ以来、一族のだれかに、ここに住んでいただいているのです」
「で、つまり、ぼくがその一族……」
「そういうことです。おわかりいただけましたね」
「まあね。しかし、文明開化以前ならいざしらず、いまどき、そんなことがと思うな。本気なのかい」
「お疑いになるのも、当然です。げんに、ばかばかしい、ほっとけという市長もあり、そうしてみたこともありました」
「どうなった」
青年は身を乗り出した。
「この一帯の農作物が、害虫の異常発生のために、大凶作。気候異変とか、そのほか

の理屈はつけられます。しかし、一族の人がよそへ移って、ひとりも残っていなかった時でもあったのです」

「偶然ということも、あるだろう」

「一回だけでしたらね。その次は、火事です。風のため大火になり、市街地の西半分が焼けてしまいました。その時も、一族の人がいなかった時です。たのんで、ここに住んでもらっている時は、なにも起らない。つまり、そんなわけで、この市におけるしきたりとなったのです。市長の責任となりますからね。防げば防げたのにと」

「いままでは、どんな人が……」

「三十歳の、女のかたです。それが、たまたまこの地方へやってきた画家と知りあい、恋愛に発展しました。住みついてくれればいいのに、このあたりの風景は描きつくしたということで、結婚してほかへ行くことになりました。むりにとめるわけにもいきません。そこで、一族を調べ、あなたさまがそれに当るとわかり、お迎えを出したわけです」

「そんな話、両親から聞いてなかった。たしかなんでしょうね」

青年の問いに、秘書は大きくうなずく。

「そうでなかったら、市が金を出すわけはありません。人ちがいをしてなにか起ったら、えらいことです」

「わかった。ここに住むよ。しかし、盛り場はないのかい。静かなのもいいが、時にはさわぎたくもなるよ」

「駅のそばに、何軒かバーがございます。少しはなれた大きな市には、たいていのものがございます。数日間なら、ご旅行なさってもかまいません。つまり、ここが実質的な住所であればいいのです。ここのとなりが、旅館になっております。きょうは、そこにおとまり下さい。あしたは、住宅などをご案内いたします」

「こんなことになるとはなあ」

翌日、市長秘書がやってきた。

「よくおやすみになれましたか」

「ああ、久しぶりに酔ったし、静かだし、ぐっすりだ」

「では、出かけますか」

まず、住居なるものを見に寄る。城あとのそばの、小さな古いつくり。よく手入れがなされていて、住み心地は悪くなさそうだ。庭もついていて、大きな木が葉を繁らせていた。

「なかなか、いいな」

少しはなれて、ホテルが建っている。秘書が言った。

「一日おきに、あのホテルの従業員が、掃除にまいります。洗濯物もお渡し下さい。食事でしたら、ホテルへお電話なされば、洋食、和食、なんでもとどきます。また、中華料理店の電話番号も、お教えいたします。もちろん、ご自分でお作りになられても、かまいません。それと、この証明書をお渡ししておきます。これをお示しになれば、この市内の店は、すべてサインだけで品物が手に入ります。すぐに顔をおぼえられますから、いちいち証明書を出すこともなくなりますが」

「代金は、どうなるのだ」

「それは市が払います。それから、これが一カ月分の、お小遣いです。となりの市では、サインではすみませんからね」

「すまんなあ」

「お礼は、市のほうで言うことですよ」

図書館、寺院、少しはなれた牧場、ちょっとした工場地区、商店街などを案内してもらった。半日ほど歩いて、ほぼ見つくす。

「いいところだな。川の水もきれいだし、山が見えるのもいい」

「お気にいっていただけて、うれしく思います。バイクか自動車がご入用でしたら、

その証明書で……」

「いずれ、そうするかもしれない」

「しかし、事故だけは、くれぐれもご注意を。死なれては困りますし、人をはねて、よその警察につかまっても……」

「そうだな」

青年は秘書と別れ、家へ戻る途中、電気製品の店へ入り、テレビを注文した。あの証明書を見せる。

「これで買えるのかい」

「あなたが、こんどのかたですか。すぐに、おとどけいたします。これからも、ご利用のほどを」

酒屋も果物屋も同様だった。食事も、電話一本でなんでもとどく。その電話代も無料なのだ。

かくして、青年のここでの生活がはじまった。夢のようだった。なんの不自由もない。好きな時に寝て、好きな時に起きる。ホテルからここまで配管工事が伸びていて、風呂もシャワーも使える。運動不足が気になり、日に一回は散歩に出た。

みな、いい人たちばかり。ただ、惜しいことに、これはという美人がいなかった。

仕方ないので、電車でとなりの大きな市に出かけることもあった。

そこには、活気があった。にぎやかであり、美人にめぐりあうこともある。毎日でも来たいところだが、ここは有料であり、使える金にも限界がある。

知りあった美人を、くどいたこともあった。

「結婚して、いっしょに暮さないか。決して生活の心配はかけない」

「だけど、あそこじゃあね。平穏すぎて、退屈しちゃうわ。ここに住むのならいいけど」

うまくいかないのだ。月々の金をためてみようかと思ったが、そうもいかない。やはり、さわいで飲みたくなる。

なにか仕事をしようかとも思った。市長秘書にたのめば、さがしてくれるだろう。しかし、とてもその気になれない。

ホテルに通勤し、ルームサービス係でもやるか。ばかばかしい。ただで飲み食いしているホテルなのだ。

牧場の仕事を、手伝うか。あんがい大変かもしれないな。やめておこう。ここに住んでいるだけで、任務ははたしているのだ。

昔の友人が、遊びに来た。

「優雅な生活だな。うらやましいよ」

そう言われ、青年は首を振る。

「そりゃあ、しばらくはいいよ。しかし、ずっととなるとね。つまり、ぼくは、ここから出られないんだ。くさりにつながれた、犬のようなものだ。このままだと、人間、だめになってしまいそうだ」

「そうかもしれんな。だけど、二十年もがまんすれば、なれてもくるし、ありがたみもわかるんじゃないのかな」

「冗談じゃない。二十年なんて。人生の貴重な時期の空費だ。大都会の生活が、なつかしくてならない。やはり、自分の力で生活すべきだ。ここへ来て、そのことがよくわかったよ。すべて、やりなおしたい」

「なにをやる」

「問題は、そこなんだな。喫茶店でもやりたいのだが、資金がね」

友人は、しばらく考えてから言った。

「名案があるぞ。ここへ来た事情が本当ならだが。どうだ……」

その説明を聞き、青年はひざをたたく。

「そういう手があったか。やってみよう」

二人は山のむこうの町へ行き、そこから市役所へ電話をした。友人が市長秘書を呼び出して言った。

「こっちの名前など、どうでもいい。さっそく用件だ。おたくの市のマスコットの青年を、連れ去った。返してほしかったら、金を用意しろ」

「よくわかりませんな、なんのことか」

青年がかわって言った。

「ぼくですよ。むりやり、さらわれてしまったのです」

「さっきのやつ、金を用意しろとか言ってたが、なんのことだ」

「身代金ですよ。ぼくがいなくなると、市は困るんでしょ」

「そりゃあ、いてくれたほうがいいがね」

「だったら、なんとか取り戻す金を作って……」

「そいつに言ってやれ、いい気になるなって。あの一族は、たくさんいるんだ。楽な生活をしたくて、自薦他薦、こっちが困るほどだ。あなたを呼んだのは、たまには変ったのをと思ってだ。それなのに、ありがたがらぬし、金もかかりすぎる。なんとか交代をと思っていたのだが、切り出しにくくて困っていた。ちょうどいい、さらわれてくれ。しかし、ふしぎだ。おまえをさらったやつ、あとがまをねらう一族のだれかの作戦のようだが、それなら、さらうだけでいい。つぎをだれにするかは極秘だから、うまくありつけるとは限らないし……」

才　能

その男がいまの会社に移ってから、そろそろ十年ちかくになる。

以前につとめていた会社が倒産した時のことは、きのうのことのように、はっきりと思い出せる。突然のことであり、たくわえもなく、まさにとほうにくれた。

内心のあせりを持てあまして、あてもなく街を歩いていると、不意に声をかけられた。

「おい、どうかしたのか。元気がないじゃないか」

「あ、どうも……」

学校時代の先輩だった。運動部が同じだったので、なにかと親しくつきあったものだし、卒業後もそれはつづいた。男は頭を下げる。

「……考えごとをしていたもので、失礼しました」

「なにか悩んでいるようだな。うしろ姿のかげが薄い。ほっとくと、顔に死相があらわれるようなことになる。不吉なムードがただよっている。といって、きみの手におえる問題じゃないようだし」

「そうなんです……」

男は、職を失い、妻子をかかえ、どうしようもない立場にあることを話した。

「そうか。死のことが頭をかすめたりするだろうな」

「ええ。このままでは住居を立ちのかねばならず、金を借りるあてもない。返済のめどが、つかないのですからね」

先輩は、しばらく考えてから言った。

「ひとつ、ある会社を紹介してあげようか。気の毒だからじゃないぜ。同情心で役にも立たん人間を押しつけていたら、結局はこっちの信用までなくしてしまうからな。きみのまじめさを知っていればこそ、力を貸そうという気になったのだ」

「本当ですか。なんだか夢のようだ。信じていいのかどうか。それにしても、先輩はなぜ、わたしのためにこうまで……」

「わたしは、コンサルタントのような仕事をしている。さまざまの会社の、経営から新製品の宣伝まで、なにかと相談に乗っている。多くの企業を知っているが、そのひとつから、適当な人材がいたらと、たのまれているのだ」

「しかし、わたしは人材というほどのものでは、ありません。とくにずば抜けた才能

を持ってもいないし……」

「世の中、天才や秀才が集団を作ったからといって、成果があがるとは限らんよ。まず第一に、まじめに仕事をするかどうかだ。その点、きみは信用できる。その会社をしくじったら、もう、どこにも行き場はないのだ。わたしだって、二度とは助けない」

「わかっています。命がけでやります」

「まあ、そう、むきになることはない。人生とは、地味な毎日のつみ重ねなんだ。企業もまた同じ。堅実な人間を求めている。スタンドプレーは困るんだよ。入社したからには、紹介したわたしの顔をつぶさないよう、それだけは忘れないでくれ」

「そういたします」

というわけで、いまの会社に移れたのだ。

ひとことで片づければ、しにせということになる。創業以来、何百年かになるそうだ。漢方薬の製造販売の会社だった。

もっとも、昔のままというわけではない。原料は変らないが、飲みやすい形に改良されており、容器のデザインもいくらか近代的になっている。そういう製品を何種類

かあつかっているのだ。また、形態もいちおう株式組織になっている。

派手な宣伝はやらないが、業績は悪くなかった。手がたくやっていれば、着実に利益があがる。流行おくれになりそうにも見えるが、この種の薬には、たえず一定の愛好者がいるものなのだ。

男は社風がわかってくると、

「なるほど、まじめ人間むきの職場だな」

とつぶやくようになった。先輩も、この会社からふさわしい人物をと、たのまれていたらしい。

男は営業部に配属された。全国をいくつかの地区に分け、そのひとつを担当させられた。問屋だの大きな小売店だのを定期的にまわり、注文を取ってくるのが仕事だ。彼はそれを、大過なくこなした。なれてくると、そうむずかしいものではなかった。

やがて、雑談をかわしあうような同僚もできてきた。ひと区切りついた日の帰りがけなど、いっしょに酒を飲んだりする。

そんな時、男はなにげなく口にした。

「ぼくは途中からの入社だが、そのような人が多いみたいだね」

同僚はうなずいて言う。

「ぼくもそうなんだ。つとめ先でつまらぬ失敗をした時、ある人の紹介でここに入った。はえぬきの社員って、いないんじゃないかな。同族会社だから、社長、専務、それと名前だけの取締役はべつだが、部長、課長、そのほかの社員、みんな途中からの入社のようだよ」

「どうしてだろう」

「そういう、しきたりなんだろうな。長いあいだ商売をつづけていて、そのほうがいいとの結論を得たんだろうな。海のものとも山のものともわからない、若いのを採用する。考えてみれば、それは冒険だよね。それより、性格ができあがった年齢の人のなかから、これはというのをみつけてくる。活気に欠けるということはあるが、安全は安全だ。この会社にとっては、そのほうがいいんだろうよ」

「そうかもしれないな。こういう着実な会社だって、あっていいよね。つまらん心配は、しなくていいしね」

男は、そんな状態に満足だった。そして、いつのまにか十年ちかくの年月がたったのだ。会社は依然として順調で、こんな調子は創業以来のもので、今後もずっとそうなのではないかと思えた。

しかし、ここでは、昇進はどういうしくみになっているのかな。男の頭にはそのことが浮かび、考えはじめると気になることでもあった。

現実に課長という地位があり、それをつとめている人物がいる。経営者の一族と、つながりのある人というわけではない。ということは、その気になればなれないことはないはずだ。そして、課長になれば、収入もかなりよくなるらしい。

どうやれば、課長になれるのだろう。男はそれを知りたいと思った。研究してみる価値はある。ほかの部のこととなると調べにくい。この営業部で、課長がどんな仕事をしているのかに注意した。

そのうち、男は驚くべきことを知った。

受け持ちの地区内で、新しい取引先を作りたいがと課長に相談する。課長は目をつぶって考えてから「いいだろう」とか「やめておいたほうがいい」とか指示をする。

また、これまでの取引先に対して「あの店への出荷は控えるように」と、とくに理由もあげずに命令することもある。男は不満に思いながらも、それに従う。

ところが、調べてみてわかったことだが、その指示のすべてが的中しているのだ。危いと指摘された店は、まもなく行きづまっている。取引きをつづけていたら、売掛金がこげついていただろう。

そのことを知り、男は同僚に話した。

「ここの課長は、すごいな。商品の代金は、百パーセント回収されている」
「いまになって気がついたのかい。営業部には四人の課長がいるが、みなそうだよ。どの地区もそうなのだ。だからこそ、商売はずっと安泰。いいことじゃないか」
「どうやって、そういう判断力を身につけたのだろう」
「研究熱心とか、努力とか、そんなことの結果じゃないかな。ぼくは課長になどなるつもりはないから、考えたことはないけど」
「ほかの部の部長や課長も、そういう人なのだろうか」
「たぶんね。ただの社員とちがって、一芸にひいでているのだろうな。それでいいんじゃないかな。ある年月をつとめれば、才能がなくても課長というのは、考えものだよ。そのあげく、会社が倒産じゃあね」
「それもそうだな」
男はなかばなっとくし、なかば物たりなかった。課長という地位があって、自分がなれないなんて。ちょっと面白くない。
男は久しぶりに、入社の時に世話になった先輩をたずねた。
「おかげさまで、なんとか暮しております。子供もまもなく高校です。ご恩は忘れません」

「まあ、がんばることだな」
「じつは、そのことで、ご相談に来たのです。ずっとこのままでもいいのですが、できるものなら課長に昇進して、腕をふるってみたいのです。身のほどしらずの考えでしょうか」
「そういう心境になったか。むりもないことだな。しかし、あの会社には独自の方針がある」
「だめなんですか」
「そんなことはない。自分で申し出てみるんだな。総務部長に、じかに交渉してみるといい。チャンスを与えてくれるはずだ」
「チャンスですって。才能や手腕とはちがうんですか」
「わたしから説明することはあるまい。熱意を持って、ぶつかるんだ。あの会社は、それでずっとつづいているんだから」
「よくわかりませんが、とにかく、やってみます」
つぎの日、男は総務部長室へ行った。さっそく切り出す。
「会社のため、もっと働きがいのある権限を与えていただけませんか」
「早くいえば、課長になりたいということだろう」

総務部長は、表情を変えずに言った。

「ええ、まあ……」

「会社は、そう申し出る社員を待っているのだ。ところで、課長となるからには、ある種の、人にすぐれた才能を持たねばならない」

「そこなんですが、ちょっと自信が……」

「そんなことは、気にしなくていい。重要なのは、熱意と決心なのだ。なにもかも、これがもとなんだ。それがなかったら、才能だってなんの役にも立たない。ちがうかね」

「おっしゃる通りです」

「やる気は充分にあるというわけか」

「はい。どんなことでも、やります」

「たのもしいね。しかし、確答は、まずわたしの話を聞いてからにしてくれ。まあ、そこの椅子にかけて……」

「はあ……」

少し首をかしげる男に、総務部長は言った。

「わが社がかくも長く商売をつづけてこられたのには、それなりのわけがある」

「なにかあるだろうとは、想像していました」

「そもそも薬というものには、長い歴史がある。とくに薬草となると、その組み合せによって、思いがけぬ効果をあげる。わが社の製品の愛用者がたえない理由も、そこにある」

「そうですね」

「しかし、なかには一般の人には売らない、秘法による薬もあるのだ。その処方は、代々の当主しか知らない。総務部長のわたしでさえ、作り方は知らない。まかせられているのは、その使用に関してだけだ」

「いったい、どんな作用の薬なのです」

「人間の才能を、大はばに高める働きだ。営業部にいたのなら、気づいただろう。経営的におかしくなった取引先は、事前にわかるのだ。仕入れの部門を例にとれば、そこの課長は、原料の相場の変動を察知している。だから、安い値の時に買い付けている。すべてがそんなぐあいだから、わが社は決してつぶれない」

「そうでしたか、知りませんでした。しかし、そんな便利な薬があるのなら、社員全部に飲ませたらいいと思いますが」

「ところが、そうもいかんのだ。効果はたしかにある。しかし、副作用もだ。そこが

欠点でもあるし、乱用へのブレーキにもなっている」

「どんなことです」

「死亡率が、五十パーセント。つまり、半分は死ぬことになる。飲んでから半年以内にね。なんとか防ごうと研究もしたが、いまの医学では、ぜんぜん原因がつかめない。どうしようもない。会社としてできることは、生命保険の掛金を出してあげることぐらいだ。だから、遺族が金銭的に困ったりはしない。解剖しても死因がわからないのだから、心不全あつかいで、保険金が出る。そのかわり、生き残れば才能は倍以上に高まる。給料も同様。運命としか、いいようがないね。二つにひとつ。やってみるかどうかは、まさに本人の決意にかかっている」

「総務部長は体験なさったのでしょう」

「そりゃあね。この社へ移る前に、いろいろとあったからな。わが社が社員について途中入社の方針をとっているわけは、そこにある。人生とはなにかを知った上で、自己の道を選んでもらいたいからな」

「そんな事情が、あったとは……」

「そうなのだ。だから、よく考えた上で、きめてもらいたい。いまのままでいたって、それもひとつの生き方だからな」

「はい。考えさせていただきます」

一週間ほどし、男は総務部長室にあらわれた。

「決心しました。薬を飲ませて下さい」

「くわしくは聞かんが、よく考えた結果だろうな」

「そうです。平凡か、挑戦か。それは、あれこれ悩みましたよ」

「じゃあ、これを……」

せんじ薬が作られ、男はそれを飲んだ。そして、思いついて聞いた。

「総務部長という地位にいるからには、やはり人なみ以上の能力をお持ちなんでしょう」

「まあね。薬を飲んで生き残ったのだからな」

「その才能のなかには、薬を飲んで半年後に生き残るやつかどうか、あらかじめわかるというのも含まれているのではありませんか」

「ご想像の通りだ」

「なんということ。で、ぼくはどうなんです」

「総務部長として、そなえていなければならない才能だよ。それに関して、なにひとつさとられてはならないということもね」

話し声

その男はなんとか、手ごろなマンションに住居をかまえることができた。

「交通は便利だし、家賃もまあまあ……」

そう広くはないが、ひとり暮しだから、それで充分だった。しかし、生活になれてくるにつれ、ちょっとした不満がでてきた。

となりの部屋の住人のことだ。会えば軽く頭を下げる程度で、口をきいたことはないが、会社づとめをしているらしい二十七、八歳の女性。不美人でもないが、といって、とくに美人というわけでもない。気にならない存在のはずなのだ。

ところが、そうでなくなってきた。

夜になると、壁ごしになにやら話し声が聞こえてくる。たぶんボーイフレンドなのだろう、かなりおそくまで会話をしつづけているのだ。彼はつぶやく。

「安ぶしんというわけか」

外観も内装も悪くないマンション。家賃の額を考えると、壁の薄いのは仕方のないことかもしれない。いっそのこと、もっと薄ければ話の内容が聞きとれるのだろうが、それもできない。どうにも耳ざわり。なかなか眠りにつけないのだ。

「どんなやつなのだろうか」

しかし、彼の出勤や帰宅のころに、となりの部屋に出入りする男を見かけなかった。人に知られたくない仲なのかもしれない。

どうぞご勝手にだが、寝ようとする時の話し声だけは、神経にひっかかる。音楽ならまだしも、こういう音声はいらいらさせられる。睡眠時間がへり、会社での仕事にさしつかえる。

このままだと、不眠症になってしまう。疲労だってたまる。ひとつ、交渉をしてみるか。壁の両側から、防音用の建材をはりつければ、いいのではなかろうか。こっちも安眠でき、むこうも気がねなく話しあえるというものだ。

帰宅した男は、となりの部屋の前へ行き、ベルを押す。ドアをあけた女が迎える。

「あら、おとなりのかたですのね。どうぞ、おはいりになって下さい」

「じゃあ、失礼して……」

男はすすめられるまま、椅子にかける。女は言った。

「こちらから、おうかがいしようと思っていたところですの」

「そうでしたか。ちょうどよかったわけですね」
彼はうなずく。この調子だと、話はうまく片づくだろう。
「お話って、あの、夜おそくの、あのことについてでしょう」
「そうなんですよ。そのことで……」
「ほんとに、壁ごしに耳に入る会話って、なんとなくやっかいなものだそうですね」
「まったくです」
うん、この女、理性的なところもあるんだな。普通だと、自分本位の考え方しかしないものなのに。
「睡眠を、さまたげられますものね」
「そうなんです」
「あたし、こういう考え方なの。男と女とが、ある年齢になって自分で責任をもってなにかやるのなら、それは自由で、文句を言うべきじゃないと思うの。ただし、他人に迷惑を及ぼさないという条件づきでね」
「そうですよ、その通りです。そこで提案なのです。この壁の両側から、防音材をはりつけることにしませんか。事態は、いちおう改善されるんじゃないでしょうか」
「あたしも、そう思いついたとこなのよ。おっしゃっていただいて、ほっとしたわ」

「意見は一致。めでたしですな」
笑い顔の男に、女が言った。
「それで、安眠できるってわけね。だけど、ひとつだけお聞きしたいことが……」
「どうぞ、どうぞ」
「あの、毎晩おそくまで、あなたとお話ししている相手の女の人って、どんなかたなの」

あるシステム

港の近くの三階建てのビル。とくに大きいとはいえないが、落ちついたつくりだ。ある貿易会社が、そこを本社としていた。社員は六十人ほど。景気は悪くないらしく、待遇についての不満といった表情は、だれの顔にもなかった。

正面の玄関を入ると受付けがあって、若い女性が勤務している。来訪者には「いらっしゃいませ」と、あいさつをする。もっとも、たいていは顔みしりの人で、笑顔をかわしあうだけだが。

しかし、時にははじめての来客もあり、そういう人には用件を聞いて、営業関係なら一階のどの部屋、経理関係なら二階のどこと、ていねいに教えてあげる。

六十歳を越した紳士が入ってきた。鞄のたぐいは持っていない。目つきに鋭さがある。

「いらっしゃいませ」

その声にちょっとうなずいただけで、紳士は二階への階段をあがりかけた。受付けの女性が呼びとめる。

「もしもし、勝手にお入りになっては困ります。はじめてのかたのようですね。どなたで、どんなご用です」

「わたしは、社長に会いたいのだ」

「ご用件の内容を、おっしゃって下さい。まず、その担当者から、順序をふんでということになっています。それに、はじめてでは、社長室の場所もおわかりにならないでしょう」

「もっともだ。なかなか、しっかりしている。じつは個人的なことで会いに来たのだ」

「では、社長のつごうを聞いてみますから、どんなことかおっしゃって下さい」

「では、話そう。まちがえるといけないから、メモを取ってくれ。いいか。わたしはな、社長の大学時代の親友の妹の初恋の相手のおやじなんだ。そう言えば、わかるはずだ」

受付けの女性は妙な顔をしながら、いちおう社長室に電話連絡をした。そして、あらためて言った。

「お会いするそうです。三階でございます。階段をあがってつき当りの部屋です」

ここの社長は四十五歳ぐらい。おっとりとした感じ。すご腕といった印象でなく、人徳のようなものがある。部屋に入ってきた紳士に、あいさつした。

「はじめまして。わたしが社長でございます。どんなご用件でしょうか。まあ、そこへおかけになって……」

紳士は、すすめられた椅子にかけようともせず、窓のそとの港を眺めながら言った。

「さっそくだが、星占いによると、まもなくアトランティスのなぞがとけるらしい」

それを聞き、社長は緊張した。

「あ、その件ですか。わたしの一存では、とてもきめられません。その分野にかけては、専務がくわしく、対処のしかたもよく心得ております。ご相談なさって下さい。ご案内いたします」

となりの専務室へ行く。外国への出張から帰った社員がなにか報告をしていたが、社長はあとにしてくれと席をはずしてもらう。そして、五十歳ぐらいの専務に、紳士を紹介した。

「専務、このかたがアトランティスのなぞの件で……」

「それはそれは。では、その椅子へ……」

ここでは、腰をかけた。社長は戻ってゆく。二人きりになり、専務は言った。

「アトランティスですな。となると、タイタニック号の引きあげも、からんでくるわけでございますね」

「もちろんです。あれには、ロマノフ王朝の秘宝がつんであった」

「そうでしたね。すると、具体的には営業部長の仕事です。しかし、いずれにせよ、金銭も関係してきます。二階の経理部長にも、あいさつをしておいて下さい。すぐ電話をしておきますから」

経理部長は、部下たちと同じ部屋で執務していた。紳士を迎え、応接室に案内しながら話した。

「たいていは銀行決済ですが、現金もいくらか扱います。万一、強盗に襲われる場合、二階のほうが対策上いいわけです。そのため、一階が営業部になっているのです」

応接室で、紳士が言った。

「専務から連絡があったはずだが」

「ロマノフ王朝の件ですね。この件が、現実に持ち込まれるとはね……」

部長はひと息ついた。その時、お茶が運ばれてきて、話が中断した。紳士はうながす。

「そうなのです」

「しかし、どうなのでしょう。正しくは、幻の海賊、キャプテン・レッドの秘宝じゃないのでしょうか」
「ちょっと考えさせて下さい。そう、いや、キャプテン・シルバーだ。この名が正しい。女性だったという説もある」
「そうでしたね。では、一階の営業部長とお会い下さい。専務からも連絡がついているはずです。うまく、まとまるでしょう」
紳士は一階へおりてゆく。営業部長はいやに忙しそうで、電話をかけながら、書類のチェックをやっていた。紳士とは机のそばでの声をひそめての会話となった。部長は言う。
「キャプテン・シルバーについての、ご用件だそうで」
「ええ、とりあえず五百ダースほど」
と言われ、部長は手帳をのぞきこんでから答えた。
「とんでもない。プラチナならまだしも、シルバーとなると」
「そうかもしれないな。それより、問題はデザインだよ。五つ葉のクローバーなんて、どうだろう」
「けっこうですね。あそこに年配の社員がおります。倉庫を担当する課長です。案内

させますから、サンプルをごらんになって下さい」
地下への階段をおりながら、課長が話しかける。
「五つ葉のクローバーだそうですね」
「流行歌に、なかったかな」
「ブルガリアの民謡にあるとか……」
地下は静かだった。紳士が言う。
「さあ、その倉庫をあけてくれ」
「いいのかなあ、どうもおかしい」
「さあ、文句を言わずに、あけるんだ。脱税の容疑での調査なのだ。くだらん合言葉をおぼえこみ、やっとここまでたどりついた。じたばたするな。早くあけろ」
「そう大声を出さないで下さいよ。令状は、お持ちなのでしょうね」
「これだ」
と、さし出す。課長は入念に調べた。
「たしかです。本物の指令書だ」
そばのベルを押す。ドアは内側から開いた。なかは豪華だった。照明はあかるく、厚いじゅうたん、応接セット、壁にはテレビスクリーン。大きな事務机のむこうにい

た五十なかばの男が、紳士を迎える。
「会長が、じきじきにおいでとは。ご用があれば、こちらからうかがいましたのに」
「いや、たまには自分で点検しておこうと思ってね。いやあ、感心した。ここは、じつにゆきとどいている。すべてうまくいっているようだな。だれが見ても、ちゃんとした会社だ。それは看板で、じつは麻薬や兵器の密輸もやり、不法出入国を手伝ったりしているとは、気づかれていない」
紳士は満足そうに言い、男はうなずく。
「非合法な仕事には、それだけ万全の注意が必要なのです。知られて困る資料は、みなここのコンピューターにおさまっている。それに到達するには、何重もの合言葉でチェックされる。回線だと、内容を盗まれる可能性がゼロではない」
「ひと苦労だったよ」
「ごらんなさい、チャンネルを切り換えれば、社内の各所が画面にうつります。社長室からのベルで、会長がおみえになったことは、わかっていました」
男は、スクリーンのスイッチを入れた。社長室は全景、専務や部長は机を上からうつす形になる。紳士はうなずく。
「ゆきとどいているな」

「書類を机の上にひろげさせ、どこをどう細工しろと、ここから電話で指示しているわけです。わたしの意のままです」
「問題の取引き相手たちとは、どこで会うのだ」
「そこのもうひとつのドアから、となりのビルの一階の一室に行けるのです。秘書がひとりいて、連絡があるとそこへ行って商談です。相手も、まさかわたしがこの会社の事実上の指揮者とは気づかない」
「あとは、ずっとここか。孤独感はないかな」
「仕事で頭がいっぱいですからね。まあ、責任ある立場の人は、みな孤独でしょう」
「だろうな。よくわかる。だから、高給を払っているのだ」
「で、ご用件はなんです。会長じきじきのお出かけとは、よほどの大仕事なんでしょう」
「いや、ただの点検だけだ。いやあ、面白かったよ」
「せめて、それぐらい楽しめなくてはね。会長のためにも、社員のためにも」

新しい車

その男はセールスマンにすすめられて、自動車を新しいのに買い替えた。四日ほどたって、休日を利用し、ひとりドライブを試みた。

「うん、なかなか調子がいい。性能向上の競争も、きびしいのだろうな」

スピードを上げたり落したり、時のたつのを忘れる。やがて暗くなりかけ、戻ることにした。

なにげなく、バックミラーをのぞく。思わず声をあげた。

「な、なんだ……」

うしろの席に、青年がいる。元気がなく、悲しげな表情をしている。こんなやつを乗せたおぼえなど、ない。なんとなく、いやな気分。だが、うろたえてはいかんのだ。

男は車を道ばたに寄せ、ブレーキをかけ、ふりむいた。さあ、存分に驚いても大丈夫だ。そして、あらためて叫びをもらした。

「いったい、どうして……」

そこにいるはずの青年の姿が、見えないのだ。首をふり、幻覚だったのかなと思い、さっきはたしかにとバックミラーをのぞく。そこには、依然としてうつっているではないか。しかし、ふりむくといないのだ。

「なにがどうなっているのだ。吸血鬼は、姿が鏡にうつらないという。それなら、鏡にはうつっているのに実体がないというのは、なんなのだ」

さっぱりわからん。すると、それに答えるように声がした。

「亡霊の一種です」

「な、なにか言ったな」

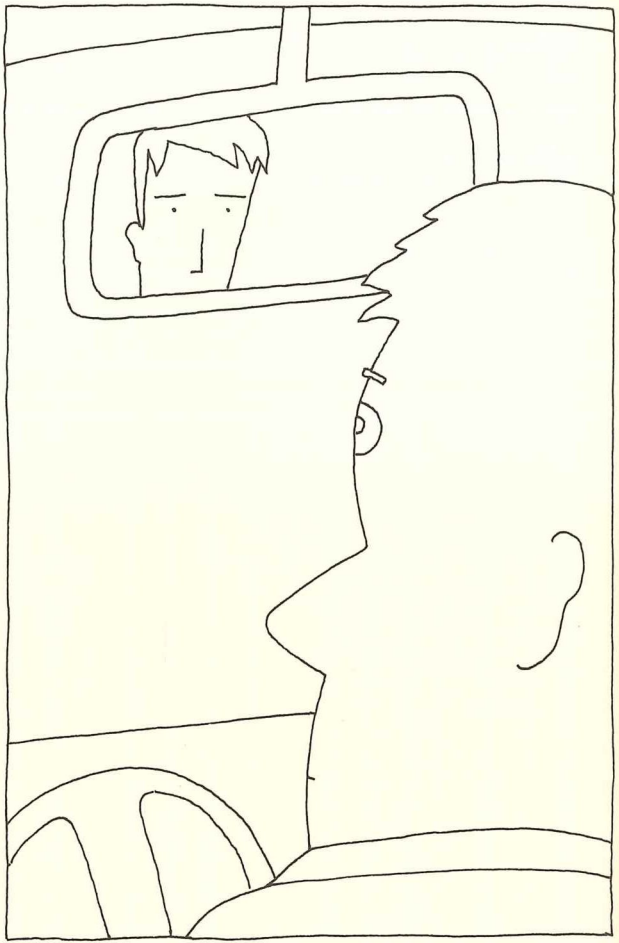
「ええ、亡霊だと言いました」

その青年の応答とする以外に、考えようがない。

「そうか。そんなところだろうな。まともな現象じゃない。それにしても、かなわんなあ。亡霊にうしろの席にいられちゃあ、気が散って運転がしにくい。といって、車をここに置いて帰るわけにもいかない。そもそも、亡霊にとりつかれるようなことは、してないはずなのにな。しかも、よりによって、こんな時に」

「ごもっともです」

「身におぼえがないとなると、この車のせいとしか考えられない。のろわれた車を買



わされてしまったわけか。運が悪いな」

つぶやく男に、声が言った。

「まあ、いちおう、ぼくの話も聞いて下さい」

「なんとでも言ってくれ」

「少し前のことです。やっと新しい車を買うことができ、はじめての運転の時でした。浮かれすぎたのでしょうね、ハンドルを切りそこね、事故死したのです」

「そうだったのか。しかし、それがわたしと、どんなつながりがある」

「さっき、川にそった道をお通りになったでしょう」

「ああ」

「あそこで、車もろとも川のなかに転落したのです。死んでも死にきれず、この世への執着が残り、亡霊となって……」

「しかし、なにも、わたしにとりつかなくたっていいのに」

「新車の魅力にひかれてですよ。ぼくの気持ちも、わかって下さい」

青年の声に言われ、男はうなずく。

「わかったよ。そういう事情だったのか。同情してあげたくなってきたよ。しかし、このままずっとこれでは、やはりかなわないな」

「ぼくだって、そうご迷惑をおかけするつもりはありません。しばらくのあいだでも、この新車にのせていただき、満足しました。そこで、お手数ですが、お願いが……」
「できるだけのことはするよ。話してごらん」
「ぼくは亡霊でして、いるといっても、その鏡にうつった車内にいるわけです。その鏡をはずせば、消えてしまいます。なにかで、ちょっと傷をつけて下さい。そして、この車を買わされたセールスマンに電話して、最初からこれではと、文句を言ってみて下さい。買ったばかりですから、べつなのにつけかえてくれるでしょう」
「だろうな」
「古いのは捨てて下さってもいいのですが、できましたら、ぼくの先祖代々の墓のあるお寺へ納め、供養をして下さい。成仏できるというわけです。そのお礼として、あなたの交通安全を、かげながらお助けいたします。事故からお守りしてさしあげます」
「そうか。それは、わたしにとってもありがたい。やってあげるよ。話はきまった。もっと新車を楽しみたいだろう。遠まわりして帰ることにしよう」
そのあと、男は青年の亡霊との約束どおりにやった。セールスマンに電話をすると、さっそくやってきて、バックミラーをつけかえてくれた。

その古いのを持ち、青年に告げられたお寺へ行き、供養をたのみ、まとまった金をさし出した。これで安全が保証されるのなら、安いものだ。
「ご奇特なかたで……」
とお坊さんが言う。男はさっぱりした表情で帰る。もはや、バックミラーに青年の姿はうつらない。
男の帰ったあと、坊さんはそのバックミラーを持って、車のセールスマンを訪れる。
「はい、規定のリベート。今回は、いやに気前のいい人でしたよ。もっとお払いしないといけませんかな」
「いえいえ、規定の額だけでいいのです」
「それにしても、妙なしかけを発明しましたね。幻影をうつし出す鏡とは」
「小型音声機とセットになっているのが、みそでしてね。それはミラー交換の時、そっとはずします。このおかげで、お客さまはなにかいいことをしたような気分になり、わたしにはリベートが入り、つぎのお客には値引きしてさしあげることができ、それだけ売行きもよくなり……」
セールスマンは笑い、坊さんもうなずく。
「わたしも生活が安定し、死者をとむらうことに専念できるわけですし……」

こころよい相手

その一画は、わりと高級な住宅地だった。庭のある家々が並んでいる。

朝の八時。四十歳の山下は、会社へ出かけるために家を出た。公園を抜ける。駅へ行くにはこれが便利なのだ。彼は歩きながら、公園のベンチに目をやった。

「おや、あの男……」

とつぶやいてしまう。以前にも見たような気がする。きのうだか、おとといだか、そのへんははっきりしない。いちいち気にしていたら、通勤なんかできなくなる。

ちょっとふりむいてみた。しかし、それは記憶をよびさます、なんの助けにもならなかった。それに、あれこれ考え込むほどの大問題でもない。

その日、山下は会社が終ると、バーに寄ることもなく、まっすぐ帰宅しようとした。公園を通る。そして、思わず足をとめた。朝の男が、ベンチに腰かけているではないか。ああやって一日をすごしたのだろうか。

ふしぎがっていると、視線が合った。相手は、なんともいえない人なつっこい微笑を浮かべた。それは魅力的ともいえるほどで、警戒心めいたものは、いっぺんに消えた。山下は声をかけた。

「そばへすわって、かまいませんか」

「どうぞ、どうぞ」

「こんなことをお聞きするのはどうかと思うのですが、あなたはたしか、朝もここに……」

「ええ」

相手の男は、うなずいた。四十五歳ぐらいか。きちんとした服装なのだが、それはかなり流行おくれのもの。ネクタイも地味。景気のよさといった印象は、ぜんぜん受けない。

「一日中ずっとですか。なんでまた……」

「ほかにすることがないというべきか、ほうぼう歩きまわって、以前の知りあいに会ったりしたくないというべきか……」

「なにか、事情がありそうですね。さしつかえなかったら、お話しになってみませんか。わたしは気になってならないし、あなたも気が晴れるかもしれない。お役に立てるかどうかは、わかりませんが」

山下にうながされ、男は言った。

「いまは落ちぶれてしまいましたが、わたし、少し前までは、ある地方都市でなんとか仕事をやっていました。中小企業というたぐいのものをね。一時は、かなりうまくいっていたんですけど」

「それが行きづまった」

「あくどくやればよかったんでしょうが、そうできない性格なんです。ひとがいいんですね。また、よせばいいのに、他人の世話を焼きすぎましたよ。おかげで、借金の山。利息すら払えなくなってしまった」

「それは、お気の毒に」

「妻子を親類にあずけ、金策のためにと家を出たのです。いちおうの金策はしたのですが、そんな状態のところへ金を出す人はいない。わたし、いまでは、時がたてば債権者の考え方も軟化するだろうという心境です。忘れてはくれないまでも、手かげんして扱ってくれるようになるだろうと期待しているのです」

「それも一案でしょうね」

「しかし、時たま、むやみと妻子に会いたくなりますね」

「でしょうね。それなら、そっと呼び寄せたらどうなんです」

「それをやったら、夜逃げになってしまいますよ。借金をふみ倒した形になる。いいことではありません。わたしは、ひとに迷惑をかけているのです。せめて、それぐらいのがまんはすべきでしょう」

たんたんとした話し方だった。内容はかなり深刻なのだが、その感情を押さえているのだろう。涙声でないだけ、かえって胸に迫るものがある。

山下は財布から金を出し、男に渡した。

「こういうことは、まことに失礼なんでしょうが、なにかのたしにして下さい。話を聞かせていただいたお礼として払うのです。いい社会勉強になりました。酒でも飲んで、気ばらしをなさって下さい」

まさに、バーで軽く飲む程度の金額だったのだ。男は言った。

「ご好意、まことにありがとうございます。いわれのない金は受け取れないとの押し問答をやるのも、どうかと思いますし、あなたをいやな気分にさせるだけでしょう。いただいておきます。このことは決して忘れません」

「まあ、がんばって下さい。いずれは、幸運にめぐりあえるでしょう」

山下はそこを離れ、自宅へ戻った。夕食の時、それを話題にすると、妻は言った。

「あなた、ちょっと気前がよすぎたんじゃないの」

「かもしれない。しかし、惜しいとは思わない。あいつの態度、さわやかなものだった。金には困ってるのだろうが、卑屈さがない。いい気分を味わった。たいして好きでもない同僚と飲むより、はるかに楽しい。金銭的に損したと言えないと思うよ」

彼の会社での地位は悪くなく、収入にも余裕はあったのだ。

つぎの朝、山下が家を出たとたん、声をかけられた。

「おはようございます。昨夜はよくおやすみになられたようで、けっこうなことでございますね」

見ると、あの男だった。ホウキを手にしている。道はきれいになっている。どうやら、山下の家の前の道の掃除をしてくれたらしい。しかも、ていねいに。

「そんなこと、してくれなくていいのに」

「わたしの気のすむように、したまでです。どうせ、ほかにすることもない。運動がわりというものです。山下さんも、あまりお気にしないで下さい。なにも、ずっとつづけるわけではないのですから」

「とにかく、ありがとう……」

歩きかける山下に、男はついてきた。

「……これから、どこへ」

「公園ですよ。あそこのトイレの建物の裏に、ホウキをしまうのに適当な場所がありましてね……」

そして、別れぎわに言った。

「……では、お元気でお仕事を。一日も早く昇進なさるように」

山下はもう少し金を渡したものかと思ったが、そこまでることはあるまいと、それはやめた。あの男の、ささやかな感謝のあらわれなのだ。

それが、ことの起りだった。男はいつもベンチにいるとは限らなかった。しかし、山下と会うと、必ずていねいなあいさつをした。

「けっこうなお天気でございますね。お元気そうで、お仕事も順調なのでございましょうね」

何日かし、山下が帰宅すると、妻が言った。

「きょう、あなたが金をめぐんであげた人っていうのに会ったわ」

「よくわかったな」

「家の前を掃除している人がいたの。午前の十時ごろだったかしら」

「あいつ、わたしに知られぬように、つづけてくれていたのか」

「その人、軽く頭を下げて、声をかけてきたわ。山下さんの奥さまでございますね。

ご主人には、とてもお世話になりましたって」

「たしかに、そいつだ」

「午後、近所へ買い物に出かけた時にも、途中で会ったわ。お荷物をお持ちいたしましょうって言われたわ。ご主人からお聞きでしょうが、わたしは時間つぶしで毎日をすごしているのですって。あたし、まかせたわ。お供を連れて歩くのって、ちょっといい気分ね。お礼にって少しお金をあげたら、すなおに受け取ってくれたわ」

「どういうつもりなんだろう。オーバーすぎないかな。なにかを、たくらんでいるのだろうか」

「そんな感じは受けなかったわ。いい人よ」

そばで、小学生のむすこが口を出した。

「あ、その人なら、ぼくにもあいさつをしたよ。お利口そうな、ぼっちゃんですねって」

「ああいう人もいるんだなあ」

山下が言うと、妻がうなずいた。

「困っている人を助けるって、本当は楽しいことなのね。中近東の人たち、金をめぐんだりめぐまれたりの文化を持ってるそうね。行ったことないからわからないけど、

そのしくみがうまくできてるのかもしれないわね。いつか、なにかの募金に応じてお金を送ったことがあったけど、そっけない印刷物が来ただけ。せめて、電話のひとつぐらい、かけてくれてもいいのにね」

「いずれ改善されるだろうよ」

それからしばらく、山下はその男をみかけなかった。しかし、いなくなったのではないらしい。妻は時どき出会い、荷物を持ってもらっているという。べつに気にもならない。人妻に手を出して、どうこうするような人物ではないのだ。

ある日、帰りがけに公園のベンチで、男を目にした。山下はそばに腰をおろし、声をかける。

「久しく会わなかったな。病気でもしていたのかい」

「いえ、健康そのものです」

「しかし、忙しいこともないんだろう」

「ええ。じつは、このあいだ、ここで、ある人に話しかけられましてね。この近所にお住まいのかたです。聞かれるまま、わたしのことをお話ししました。べつに、かくすようなことでもありませんものね。すると、お金を下さったのです。わたしにでき

ることといえば、そうじとあいさつぐらい。それで、おむくいしているしだいでして」

「そうだったのか……」

山下は、ちょっと面白くなかった。この楽しみは、なかなかのものなのだ。専属にとはいわないが、他人より優先した立場にいたいのだ。横取りされてたまるものか。さりげなく聞いてみる。

「……お子さんは、最近どうなんだい」

「中学に入ったばかりなんです。音楽の才能があるらしく、フルートを欲しがっているようですが、そんなぜいたくの言える身分じゃないと、言ってやりました。月に一回、電話をかけることにしているんです」

「そうか。お子さんの気持ちを考えると、ほっとけないな。どうだろう、その金を出させてくれないかな。すぐれた音楽の芽が、伸びるかどうかの分れ目じゃないか。手伝わさせてくれよ」

「しかし、わたしの債権者の手前……」

「きみの良心的な性格は、よくわかる。しかし、子供のいじる楽器じゃないか。そこまでひどいことは言わないと思うよ」

「だといいのですが……」

ためらう男を説得し、山下は金を押しつけた。理屈よりも、そのほうが問題なのだ。その効果は、たちまちあらわれた。朝の出勤の時に家の前で掃除をしており、公園までついてきて見送ってくれ、はげましの言葉をかけてくれる。

また、帰りには公園で待っていてくれ、話し相手にもなってくれる。会社のなかでの、さまざまな苦労。バーの酒で解消という方法もないではないが、ここぞという時にあいづちを打ってくれる相手は、めったにいない。その点、この男は、まさにうってつけだったのだ。

妻に話す。

「まったく、あいつはいいやつだな」

「公園で知りあった人のことでしょ」

「ああ。礼儀、心のふれあい、感謝の表現。なんでも話せる親しさ。ほどよい、すなおさ。やつは、そのすべてを持っている。いまの世の中で、このたぐいほど貴重なものはないよ。あいつは仕事で失敗した。つまり、社会のほうがまちがっているのだ」

「そうね」

「会社でも、部下のなかには、おせじのうまいやつがいるよ。取引先のなかにも、調

子のいいことを並べるやつがいる。しかし、それは見返りを期待してのものだ。そこへいくと、あいつはちがう。こっちの好意に対する、自分なりのお礼の心が、あんな形になる。自然にだよ」

「あれ以来、あなたはバーへ寄ることもあまりなくなったし、勝負事のつきあいもしなくなったわね」

「そんなたぐいより、はるかにいい気分だものな。しかし、しばらく前、やつをだれかに横取りされかけたことがある」

「きっと、渡辺さんよ」

「あの、少し先に住んでいる、ぼくと大差ない年配の……」

「そう。いつだったか、あそこの奥さん、あの男に荷物を持たせて歩いているのを見たわ。あたし、なんとか取り戻したけど」

「それだけの価値は、あるものな」

「ああいう人がもっとふえれば、世の中、一段とよくなるでしょうにね。すなおな感謝。やさしそうで、むずかしいことなんでしょうね」

そのうち、山下はまた男をみかけなくなった。その不満を妻に話す。

「どういうわけか、朝も帰りも、あいつに会えなくなった。いないと困るってわけじゃないけど、心のどこかに穴があいたような気分だ。会社でも、仕事のミスが少しふえた。やつの存在を再認識したよ。なにしているんだろう。郷里へ帰ったのかな」

「そんなこと、ないわよ。あたし、時どき、あいさつされるもの。頭のいい人なのね。あいさつの言葉が、少しずつちがうの。口先だけじゃないのね」

「となると、どうしたんだろう」

「あたしの想像だけど、木村さんのせいじゃないかしら。いっしょに散歩してるのを見たわ」

「あの、一流会社の部長とかいう人の……」

「そうよ。きっと、なにかのきっかけで話しかけて、同情してお金を出したんじゃないかしら。木村さん、いい気持ちそうな顔つきだったわ」

「そんなことが、あったのか」

「むかし、たいこもちとかいう職業があったらしいけど、あの人は、それとはちがうわね。もの欲しげなところがないし、卑屈さもない。お礼のために、誠心誠意つくすところがいいのよ」

「そんなことを論じている場合じゃないよ。なにしろ、あいつを取り戻さなければならないんだ。わかるだろう」

「ええ」

そんなわけで、最初のうちは徐々にであった進行が、しだいに加速されてきた。一種の中毒と、いえないこともなかった。たいしたことじゃないんだ、いつだってやめられる。そう思いながら、いつのまにか深みにおちいってゆく。典型的な中毒症状だった。

妻は妻で、これぐらいなら亭主があとしまつをしてくれるだろうと、金を借りて男にやる。亭主は会社から給料の前借りを重ねて、男に……。

そんなことが、いつまでもつづくものじゃない。やがて、ふくれあがった借金の合計にきもをつぶす。退職金によって整理しようとするが、それでもたらず、家を手放し……。

その住宅地から、いくつもの家族が、どこかへと越していった。しかし、そう気の毒がることはない。そのうち、公園のベンチで今後どうしようかと思い悩んでいる時、だれかが話しかけてくるだろう。それによって、すべては自動的に進みはじめる。やり方のこつは、あいつとのつきあいによって、完全といっていいほど身についている。年月がたてば、人情あふれる社会になるかもしれないのだ。

むこうの世界

有名で大きなホテルのなかのパーティー会場は、多くの人でにぎわっていた。芸能関係者の集りなのだ。テレビの画面でおなじみの顔を、あちこちに見かける。

そんななかで、その青年は、ほどよい位置に立っていた。主賓ではないから、正面の中央とはちがう。人びとを見わたしやすい場所。ということは、他人の目にもふれやすい。

着かざった女性が、青年のそばへ来て、ていねいにあいさつをした。

「しばらくお会いしませんでしたけど、お変りございませんか……」

「はあ、おかげさまで」

「なにかと、お忙しいのでしょうね」

「ええ、まあ」

「そのうち、ゆっくりお話ししたいと思いますわ」

「そうですね」

「どうぞ、よろしくお願いしますわ」
「いずれ、お電話しますよ」
「なるべく早くね」
同様のあいさつを、ほかにも何人かされた。青年は芸能界の、フリーのライターだった。育ちがよく、外見もスマート。そんなところから、タレントたちと親しいつきあいをするようになっている。
そして、彼の特長のひとつなのだが、話を聞き出すのがうまかった。いつのまにか相手は、つい、つりこまれてしゃべってしまう。はっと気がついて、
「これだけは書かないでくれよ」
と泣きついたりする。そんな時、青年は、
「当分はね」
と意味ありげに答えておく。なんとなく不安になったその人は、自分のより強烈と思われる、ほかの人のスキャンダルを知らせてくれる。
それを、その本人の前でちらつかせ……。
といったぐあいで、いつのまにかこの分野でかなりの情報通になっていた。それに、いやがられるような、すっぱ抜きの記事は書かないのだ。あらかじめ、了承を求める。

「どこかの週刊誌がとりあげるらしいよ。もう押さえきれないみたいだ。仕方ないよ。同じことだから、ぼくが先に書かせてもらうよ」
そう電話してから、文章にする。少し早目に、同情的にというのが方針だった。だから、タレント、雑誌社の両方から信用されていた。同業者のなかには、それをねたんで「あいつは、そんなおぜん立てをしておいて、いい子になっている」と言うのもいた。しかし、そんな印象を与えない人柄だったのだ。
青年は酒のグラスを手に、あたりに目をやる。さまざまなタレント、ディレクター、広告代理店の人たちがいる。
「ブラウン管の内側が、ずらりだな」
そうつぶやいているうちに、青年はあることを思いついた。なんで、いままで気づかずにいたのだろう。
ぼくは、この世界では名の知られた人間だ。書かれて困ることをたくさん知っているせいだが、それも実力のひとつ。さっきから何人もの男女が、にこやかに笑いかけてくる。大いに自信を持って、いいのではなかろうか。その活用について。
金を、とは考えなかった。たえずどこからか贈り物がとどいているが、なんとなく受け取っている。持ちかけようによっては、金も集められるだろう。しかし、彼は育

ちがよかったのだ。まだ独身だし、親の援助で買ったマンション暮し。さしあたって大金を必要としなかった。

しかし、美女となるとね。これは、金でも自由にならない。だからこそ、やってみる価値はあるのではなかろうか。

それとなくほめる記事は書けるし、それは掲載されるのだ。ディレクターや代理店にも顔がきく。つまり、あるところまでは、売り出してやれるのだ。

といったことをちらつかせれば、女性をものにできるのじゃないだろうか。だますわけではない。チャンスを与えてあげるのだ。才能がありながら、うずもれたままになっている人のなんと多いこと。

青年は、あらためて会場を見わたした。けっこう、いるじゃないか。見わけるのは簡単。いい子なのに名を知っていないというのは、すなわちタレント予備軍ということだ。彼は、少しはなれたところにいた、スタイルのいい若い子に近づいた。ものはためし、声をかけてみるか。

「あの……」

「なんでしょうか」

「ぼく、こういう者です。ご存知じゃないかもしれませんが」

渡された名刺を見て、女は目を丸くする。

「あ、お書きになったもの、読んだこと、ありますわ。芸能界に、とてもおくわしいんですね」

「フリーで仕事してますからね。月給の保証のある記者以上に動きまわっているのですよ。なにか、お困りのことがあったら……」

その意味を知り、女は催眠術にかかったような表情になった。一日も早く、有名になること。それで頭のなかが一杯なのだ。その助けになりそうな人が、いま目の前にいる。

「ありますわ。あるんです」

「ゆっくり、お聞きしましょう。それには、ここじゃ落ち着きません。出ましょうか」

「ええ」

「どこへ行きましょう」

「さあ……」

「よかったら、ぼくのマンションへ来ませんか。気がねしなくていいし、もらった高級なお酒が、いくつもあります」

「すてきね」

タクシーへ乗り、行先を告げる。かくも簡単にことが運ぶとは、知らなかった。青年は内心で驚く。だったら、もっと早くやってみればよかった。いや、あまり早かったら、ぼくの名もそれほどの力を持っていなかったろう。まあまあの時期というところか。

車をおり、エレベーターへ。十五階建てのビルの最上階。廊下を二十メートルほど歩いたところが、青年の部屋だった。

「さあさあ、どうぞ。ご遠慮なく。窓からの夜景も、悪くありませんよ。そのソファーにおかけ下さい。ぼくは酒の用意でもしましょう……」

青年は上着をぬいで、カーディガンをはおった。このほうが、リラックスムードになる。さて、グラスと氷だ。酒はなににするかな。それより、音楽だ。どんなのが好みだろう。ステレオで聞くには。

青年は、ソファーのところへ戻り、声をあげた。

「あれれ、どこへ行ってしまったのだ」

あわてて廊下へ出て、エレベーターの前まで行ってみた。人影はなく、エレベーターの数字は、一階でとまったままを示していた。

「どういうことだ、これは」

彼女にとって、こんなうまい話はないはずだ。青年は少し不安になった。夜景がいいなんて言ってしまった。ベランダへ出て、下へ落ちたのでは……。

下を見おろしたが、なんの異変もない。その気にならなければ、落ちようがないように作られている。そのへんをさがす。マンションの部屋だから、かくれる場所なんか、あまりない。つまり、彼女はどこにもいなかったのだ。

「おかしなやつだな。気が変って、階段をおりて帰っていったというところかな」

青年は酒を一杯だけ飲み、あとの時間を原稿を書くことでつぶした。そうくやしがることは、ないのだ。タレント志願の若い女の子は、いくらでもいる。話しかける要領については、だいたいわかった。問題は、ぼくが自分の力の大きさを知り、その気になったという点だ。近いうちに、同じようなパーティーがある。

まさに、似たようなパーティーだった。顔ぶれがいくらかちがっているだけのこと。テレビをはじめとする芸能に関係している人が、いかに多いかだ。

青年はまた、何人かからあいさつをされた。それを適当にあしらい、めぼしいのはいないかと、注意して歩きまわる。

小柄だが目が大きく、かわいらしい子がいた。
「あの……」
声をかけ、名刺を渡す。前回と同じく、うまいぐあいに進展した。
「ぼくのマンションで……」
「わあ、すてき。夢みたいだわ。親切なかたなのね」
有名になった気分でか、腕を組んでくる。むじゃきというか、単純というか、天真らんまんというか、そんな性格らしい。
マンションの部屋につくと、女は言った。
「手を洗わせていただけないかしら」
「そこですよ」
化粧をなおしたいのか、トイレを使いたいのかだろう。まあ、時間はいくらでもあるのだ。青年は酒を用意し、音楽を流し、女の出てくるのを待った。
十分たち、二十分たった。いくらなんでも、長いんじゃないかな。青年は声をかけた。
「ねえ、どうかしたのかい」
声を高めてくりかえしたし、ドアをたたいてもみた。しかし、返事はない。めまいでも起して、倒れたのだろうか。
「いま、ドアをあけますよ」
キッチンの引出しから、それのカギを持ってきて、ドアをあけた。
「あれ……」
青年はつぶやき、そこに立ったまま。女の姿はどこにもなく、洗面台に蛇口から水が流れつづけている。ちょっと異様だった。
出ていったけはいは、なかったがなあ。しかし、起りえないことじゃあない。水道の栓をしめないまま、家を出る時のくせなのか、にぎりのボタンを押してドアから出てしまう。
よほどの急用を思い出したのだろう。青年は首をかしげながらソファーにかけ、酒を飲みながら、しばらく待った。いたずらっぽく笑いながら戻ってくるか、あるいは事情を伝える電話がかかってくるような気もしたのだ。
しかし、そうはならなかった。青年は酒を飲みつづけ、ビデオに収録しておいた番組を見た。
数日たって、またもパーティー。こういうのにつとめて出ておかないと、重要なことを知りそこなったりする。

ひとつ、顔みしりの女性をくどいてみるか。これなら、いなくなることも……。

しかし、それはよくないのだ。他人のスキャンダルをたくさん知っているというのが、利点。スキャンダルをみずから作り出し、それをにぎる女が出現するというのは好ましくない。あくまで、これからのタレントでなくてはならない。

しとやかな感じの女の子がいた。これからは、こういうタイプのがいいのかもしれない。応援のしがいもあるというものだ。さそってみる。

「あの……」

話はうまく進む。ほかの方法を試みるべきなのかもしれないが、このままだって、さしつかえないだろう。それに、変った文句も思い浮かばない。

とにかく、その女はついてきた。マンションの部屋に案内する。

「くつろいで下さい」

「すてきなお部屋ですこと。くわしく見せていただいて、いいかしら」

「かまいませんとも」

見られて困るようなものも、とくにない。乱雑ということもないのだ。

「キッチンはどこですの」

「そっちですよ」

青年は指さす。女はそこへと歩いていった。なかなか戻ってこない。冷蔵庫でもあけ、なにかを作ろうとしているのだろうか。青年はのぞいてみた。

「なんと……」

女の姿はなかった。たしかに、ここへ入ったはずなのに。あれは、目の錯覚だったのだろうか。なにがなにやら、わけがわからない。

こうなると、青年はいささかやけぎみになった。みなでしめしあわせ、ぼくをからかっているのか。それをたしかめるため、パーティーに出かけるたびに、女の子を連れ帰った。あれこれ聞いてみたい。

しかし、いつも目をはなしたすきに、消えてしまう。解答は出ないのだ。それでも青年は、女の子に声をかけるのをやめなかった。

「ぼくのマンションへ来ないかい」

「きっと、すてきなとこでしょうね」

「しかし、なにが起ったって、知らないぜ」

「あなたが色魔に一変するとか……」

「そうなれば、いいんだけどね」

いっしょに帰ってきて、飲みはじめる。女もグラスを重ねた。たあいない会話がか

わされる。女が言った。
「もったいぶってるけど、おばけでも出るの……」
「さあね。きみを送らなくてすむというのは、気が楽だよ」
「なんのことなの」
「いまにわかるさ」
そのうち、青年は酔いつぶれてしまった。
目がさめると、明るい。女はソファーの上に横たわって、眠っている。ゆり起す。
「おいおい」
「あら、もう朝なのね」
「ちゃんと、いたんだな」
「いちゃあ、いけなかったの」
「そんなこと、ないけど……」
「ふしぎそうな目つきで見ないでよ。どうしたの」
「いや、とにかく、ふしぎだよ」
そんなことがきっかけで、その女は青年の部屋に、いついてしまった。そして、なんとはなしに結婚してしまったのだ。彼女は芸能界で仕事をしているが、外人との通

訳をやらされることが多く、パーティーにもそれで来ていたとのこと。
「そのせいだろうか……」
青年は口のなかでつぶやく。話したって、まともに受け取ってはくれまい。
そのうち、青年は知人の紹介で、ある企業の広報部につとめるようになった。芸能界もいいが、長くいると、頭がおかしくなりかねない。そんな心境にもなっていたのだ。
会社づとめになれてきたころ、青年は上役にさそわれ、会社の帰りにバーへ寄った。
「働きごこちは、どうだね」
「やったことが業績として残るのが、いいですね」
「そういう見方もあるか。ところで、きみの奥さん、どんな人だい」
「そうですね。早くいえば、ふしぎな女というのが第一印象でした。美人なら、けっこう多いんですが、ふしぎな女って、わりといないようですね」
「妙な形容だな」
「ああいう世界にいたせいかもしれませんね」
「そうだったな。きみは芸能界でなにかしていたんだったな。ブラウン管のむこうって、どんなふうなんだい。わたしなんか、想像もつかない。はなやかな連中ばかりな

のだろうな」

「それはそうなんですけど、大部分は、まあ、影みたいなものですよ」

運

町はずれの、小さな住宅。

その家族たちは、夕食をはじめていた。夫妻、高校一年の男の子、小学五年の女の子の四人。見たところ、なごやかな光景だ。

「おいしそうなものばかり。あたし、たくさん食べるわよ」

女の子が言い、父親がうなずく。

「ああ、好きなだけ、お食べ」

しかし、彼の内心は、どうしようもないものだった。さっき医者から、娘がなおるみこみのない病気にかかっていると知らされたばかり。あと半年か一年と。

誤診じゃないかと、何度も念を押した。血液の精密検査の結果を、医者は解説した。話すことで、早く肩の荷をおろしてしまいたいといった感じで。

どうしたらいいのだ。金でなんとかなるといったものではない。なにかで読んだな。映画にもあったようだ。会社を休み、いっしょに行きたいところへ行き、やりたいこ

とをやらせてやるか。残された短い日々を、充実したものにしてやる。せめて、それぐらい……。

とてもじゃないが、出来るものじゃない。そんな金など、ありはしない。なんとなしにギャンブルに手を出し、深みにはまり、その穴埋めに、会社の金を流用した。課長という地位にいるため、発覚しないでいるが、それも時間の問題。休んだりしたら、たちまちばれる。この家を売ったぐらいで、返せるような額じゃないのだ。

「あなた、ビールでも飲む」

妻が言い、夫は答えた。

「珍しいな、すすめるなんて。飲むか」

彼女も身動きのとれない立場におちいっていた。三年ほど前、かつて同級だった男性と再会し、ことのはずみで、浮気(うわき)までいってしまった。そして、それはそれだけではすまなくなった。

その男は、たちの悪い金融業者から金を借りていて、返済に困っていた。いくらか助けてくれ、さもなければしゃべって回ると、一種のおどし。彼女はやむなく、金策をして渡しつづけてきた。

こんなことが表ざたになったら、夫は怒るにきまっているし、会社での地位にも影

響するだろう。そう考えてだったが、いまとなっては反省しても手おくれ。渡した金は戻ってこないだろうし、さらにねだられつづけることだろう。

時どき、死を考える。しかし、そのあと、夫の前にどっと出現する債権者のことを考えると、ためらわれる。なんという女と思われ、とても成仏できそうにない。

父親は、むすこに言った。

「おまえも、少し飲むか。や、だめだな。きょうは食後、塾へ行く日だったな」

「ええ」

うつろな返事だった。塾、塾、塾か。ぼくは、学校の勉強が、なんにもわからないんだ。中学の時に、すでに苦痛だった。算数は、加減乗除がわかるだけ。それだって、計算となると、正解が半分あるかどうか。

英語も同様。単語を五十ぐらい知っているだけ。それも、スペルとなると自信はない。動詞の変化となると、もうお手あげ。絵や音楽に才能を示せるというのならまだしも、それすらない。体力も、運動神経もない。けんかさえできないのだ。

そんな状態で塾へ通ったって、なにかの助けになるわけがない。学校での苦痛を、そこでさらに味わわされるのだ。その連続で高校時代をすごし、何年かの浪人のあと、大学へ入って……。

その年月の長さと、苦痛と、無意味さを考えると、呼吸をする気力も出なかった。ぼくは、いったい、なんのために生きているのだろう。人生とは、こういうものなのか。いつまで、正気でいられるだろう。

「もう一本、飲むとするかな」

父親はビールの栓を抜き、ついだ。娘を連れて高層ビルへのぼり、そこから身を投げるか。おれもいっしょなのだから、あきらめてくれるのではないだろうか。

しかし、考えただけで、身ぶるいがする。高所恐怖ぎみなのだ。

この勇気のなさには、なさけなくなる。人間、いずれは死ぬのだとわかっていても、なにもできない。

少し酔いがまわってきた。なにはともあれ、もう一杯。ぐっと……。

その時、突然の衝撃。

警官が、目撃者に聞いている。

「よくあることですか、このへんで」

「とんでもない。まっすぐな道ですからね、考えられませんよ。あのダンプカー、どういうつもりか急カーブを切って、あの家に飛び込んだのです。わけがわからない。ひどすぎますよ」

「気の毒にな。あの家の四人、みな即死だ。なにが起ったのか、知るひまもなかったろう。痛いなんて感じるひまも」

ほかの警官が、やってきて話した。

「死んだ運転手について、少し事情がわかりましたよ。つきあっている女性にふられ、かなりがっかりしていたとか。そのため、運転していて、精神が一時的に空白状態になり……」

「しかし、なんであの家に。不運と呼ぶしかないのだろうな」

組み合せ

その夫妻は、ベランダのついたわりと高級なマンションに住んでいた。七階であり、そばに公園があるので、眺めはいい。せまくるしさを感じさせず、部屋かずも多かった。換気や冷暖房は完備。近くの店と契約し、定期的に花がとどけられることになっており、いいかおりがただよっている。

夫の昌二は三十三歳。小さな会社を作って、美術品の貿易をやっていた。これはどの国にむきそう、これは国内で売れそうと、その見当をつけるのがうまかった。都心のビルに、展示場をかねた事務所を持っている。

五つ年下の妻の由美子は、コピーライターであり、グラフィック・デザイナーとしての才能もあった。彼女にまかせれば、いい商品広告ができあがる。その才能を聞き伝え、広告代理店を通じて、ほどよい程度の仕事の依頼が入る。

だから経済的に余裕があった。それに、似合いの夫婦だった。昌二はなかなかのハンサムで、スタイルもよかった。しかし、育ちのよさのためか、反感を持たれるようなたぐいではない。由美子も十人なみ以上の美人。大きな目と肌の白さが目立つ。うまくできすぎているような組み合せだが、それには理由があった。二人とも再婚だったのだ。

きょうは休日。近所の散歩から戻った昌二は、窓のそばの椅子にくつろぎ、雲を眺めていた。夕日で赤くなりかけている。彼はそばの、なかば開いているドア越しに声をかける。

「コーヒーでも飲むか」

そこは由美子の仕事場なのだ。

「いまはいいわ。もう少しで仕上りそうだわ」

「夕食、どこかへ行って食べるか」

「いいわね」

仕事を中断させてはいけない。会話はそれぐらいにし、回想にふけった。そうだなあ、ずいぶん多くの女性と交際したものだ。それにともなって、いろいろなもめごともあった。そして、これはという女性と結婚した。

大ぜいのなかから選んだのだから、その結婚はまあうまくいった。感情の対立することもなかった。昌二が、ある会合で由美子と知り合うまでは。

話をし、はじめは好意を抱きあっただけだが、別れぎわに由美子が言った。
「そのうち、またお会いしたいわね」
「ぼくもそう言おうとしたとこ。来週、いや、三日後はどうでしょう」
そして、さらに意気投合。由美子も結婚していたが、それはブレーキの役に立たなかった。何回目かに会った時、彼女は言った。
「あたしたち、前世で結婚していたのじゃないかしら。そんな気がしてならないわ」
「あるいは、愛し合いながらなにかの事情で結婚することができず、それを悲しんで心中したのかもしれない」
感情は高まる一方だった。
「一度しかない人生なのよ。それを大事にし、自己に忠実に生きるべきだわ。いままでの生活は、かりの姿だったのよ。結婚しないなんて、不自然だわ」
「そうだな。いまの世の中、古い時代とちがって、結婚のやりなおしが許されるのだ。心中することもない。その気になれば、可能なんだ」
二人とも、それを誓いあった。
それを進行させねばならない。昌二は妻に打ちあけた。遠まわしに切り出したが、伝えようとする内容に変りはない。ある女と知り合った。結婚しなければならなくな

った。そのため、別れてくれ。

妻は最初、信じられないといった表情だった。わけがわからない。すべてうまくいっていたのだ。その女というのも、長くつきあった上でというのでもないらしい。しかし、そのうち、冗談でないことがわかってきた。目つきも変っている。思いとどまらせることは、無理のようだ。

一週間の話し合いのあげく、妻は離婚を承知した。なにかにとりつかれたのかもしれない。無理に生活をともにしていたとしても、楽しくないどころか、とんでもないことになりかねない。

「いいわ。あなたがどうしてもというのなら。いやいやながらじゃ、つまらないものね。だけど、その女の人に負かされたのかと思うと、いやなものよ」

「すまん。きみがすてきな女性であることは、変りないんだが……」

「気分をまぎらすために、あたし、しばらく外国で暮してみるわ。あなたの来そうもない町で。過去を忘れたいの」

「その生活費は、毎月、送るよ。そこの銀行の口座を知らせてくれ」

まあ、なんとか話しあいがついたといえた。

一方、由美子のほうは難航していた。亭主がなかなか、うんと言わない。彼女は勝

手に家を出て、よそで下宿生活をはじめた。身につけた才能で、それのできる収入はある。

亭主は手をつくしてさがし回り、連れ戻す。しかし、監視しつづけるわけにはいかない。すきを見て、またも家を出る。

さがすほうが手間がかかる。亭主は精神的に疲れはて、赤信号に気づかずに道を横断しようとし、トラックにはねられて死んでしまった。あるいは、絶望のあげく死を選んだのかもしれない。

生命保険金が入ったが、さすがに気がとがめ、銀行にあずけたまま、手をつけないことにした。

かくして、昌二と由美子とは結婚することができたのだ。そして、幸福のなかに、二年がたった。これこそ、愛……。

由美子の声がした。

「やっと一段落したわ。さっき、食べに出るとかおっしゃってたわね。どこのレストランへ行くつもりなの。考えてたわけでしょ」

「い、いや、赤のワインの酔い心地を想像していたら、なにかいい気分になってね」

「ほんとに面白い人」

「きみといっしょなら、なにを食べてもうまいよ」
「じゃあ、うちで食べたって……」
「時には、食べに出るのもいいのじゃないかな。知り合ったころのように」
「そうね」
仲はむつまじかった。充実していて、なごやかで、つねに新鮮だった。
その一カ月後に発生する事態など、夢にも考えられなかった。

昌二はある日、取引き相手とホテルのロビーで待ち合わせることにした。電話でのやりとりだと、かなり買ってくれそうだ。しかし、はじめての人なので、美術品の写真アルバムを手にしているからと教えておいた。
約束の時間に行き、あたりを見まわすと、声をかけられた。
「あの……」
昌二は顔をあげ、しばらくそのままだった。呼吸をするのも忘れて。そこにはひとりの女性が立っていて、彼女もだまったままだった。二人の目と目のあいだに放電が起った。
「どうも……」

と昌二がぎこちなく言い、ほとんど同時に女も言った。
「どうも……」
そして、それに気づき、笑いあった。若く品のある美人で、その笑顔はすばらしかった。心に響いてくるものがある。昌二は言った。
「あなたがお買いになるのですか。電話の相手は秘書のかたかと思っていて……」
「あたしなの。主人はひとがよすぎて、つとめ先でいっこうに昇進しませんの。あたしの株の売買のほうが、ずっと利益をあげていますわ。こんどは、投資の意味で、美術品を少し買っておこうと思って……」
「そんな手腕を、お持ちとは……」
「面白いわよ。いくらかスリルはあるけど。もっとも、あたし、慎重派だから、大もうけしないかわり、損もあまりしてないわ」
「ひとつ、食事をしながらでも。このホテルのレストラン、悪くありませんよ」
第一印象で、おたがい、相手のなかのなにかを感じた。話ははずみ、時のたつのを忘れた。彼女はけっこう美術にくわしかった。
「あら、もう、こんな時間。あたし、帰らなくちゃあ」
「どんな品がいいか、きまりませんでしたね」

「このつぎまで、考えておくわ」
「その時には、ほかのカタログも持ってきましょう」
会うことが重なり、取引きのことはそっちのけで、たあいのない話に熱中する。好みもユーモアも一致していた。そのほか、なにもかも。
「ぼくたち、いつかは会うように、運命的にきめられていたみたいだな」
「あたしは、神さまの意志で、こういうことになったのだと思うわ」
「同じことじゃないかな」
「そうね」
魅力的な笑顔。それは麻薬のような作用を持っていた。相手の女も、昌二のどこかにそのようなものを感じたのだろう。会う間隔がせばまり、回数がふえてゆく。親密さは一段と深まってゆく。そして、最後の言葉に落ち着く。
「ぼくたち、結婚すべきだろうな」
「ええ、あたしもそう思うの」
「ご亭主とうまく別れられるかい」
「たぶんね」
うまくゆくかどうか、昌二はようすを見ることにした。由美子と別れたはいいが、

となっては、目もあてられない。
しかし、彼女と次に会った時には、それが実現していた。そうと告げられて、昌二は聞いた。
「いやに手ぎわがいいんだね。どんなふうに、やったんだい」
「ただ、そのまま言っただけよ。なかなか本気にしなかったけど、やっと、あたしの心境を理解してくれたわ」
「それで、どうなった」
「頭がおかしくなったみたい。うずくまって、なにかつぶやきつづけ。お医者さんを呼んだら、異常をきたしてるって。そのまま、入院させたわ。当分なおらないようよ。診断書つき。これで離婚もやむなしってわけ」
「ううん」
「で、あなたのほうは、どうなの」
「なんとかするよ。ちょっと日数はかかるだろうけど」
昌二は帰宅し、由美子に話す。
「どうにも言いにくいことなんだけど、だまっているわけにはいかないし、こういうのはきちんとしておきたいし……」

事情を説明。由美子はうなずく。

「わかったわ。となると、じたばたしちゃあ、みっともないわね。この二年ちょっとの生活、いい思い出になるわ。これからは、あたしなりにがんばってみるわ」

「わかってくれて、ありがとう。このマンションは、きみに進呈するよ。そのほか、なにか」

「それで充分よ。あたし、自分の生活ぐらい、なんとかなるわ。それに、お金もあるの。手をつけまいと思ってたけど」

「じゃあ、元気でな」

「あなたも」

由美子と別れることができ、昌二は新しい生活に入る。

時がたち、昌二と新しい妻のあいだに生れた息子が、もう三歳になった。両親の長所を受けついでいる。

かわいらしいのだ。それは親の欲目だけではなかった。連れてそとを歩くと、声をかけてくる女の人もある。

「ほんとに、男のお子さんなのに、おきれいな……」

そんな時、昌二は満足感にひたる。そうだろうとも、トーナメント戦を勝ち抜いたあげくの産物なのだ。

そうそう、三日ほど前、社に由美子から手紙がとどいた。女の子がうまれたとあった。彼女も母親になったわけか。けっこうなことだ。相手はどんな男だろう。おそらく、よその亭主を横取りしたのだろう。彼女が目をつけたからには、ひとかどの男にちがいない。となると、その女の子も、やがては美しく成長することだろう。

そして、このわが子と、いつの日かカップルを組むことになるのじゃなかろうか。どちらも、かなりのところまで勝ち抜く力をそなえているにちがいないのだ。

都市化現象

「あんた、つまり、うちのおやじの死について、調査をしているんだね」
「そうなんです。ぼくは新聞記者。わかっていただけるでしょう、あっといわせるような記事を書きたい気持ちを」
「やめたほうが、いいと思うがね」
「いちいちそんなご注意に従っていたら、記者はつとまりませんよ」
「熱心なものだね。そこまで乗り気になったということは、事情を少しはご存知だからでしょうな」
「そうですよ」
「あの、第一の犠牲者について……」
「ええ、知っています。だからこそ、好奇心が高まり、関心が深まったのです」
「じゃあ。復習のつもりで、話すかな。うちのおやじの死に興味を抱いた、私立探偵があった。だれにたのまれてかは、いまとなってはわからないけどね。あれこれ、調

べてまわっていたらしいが……」
「結論を手にしないうちに、死んでしまった」
「まったく、おかしな死にかただよね。三重か四重の衝突なんだからな。UFOだなんて叫んで道に飛び出してきた、バイクに乗った若者があった。本当に見たのか、だれかの声につられてか、そのへんははっきりしない。走り去ってしまったんだからね。いずれにせよ、上を見あげながらの運転だから、かなわんよ」
「道路上は、大混乱」
「それをよけようと、一台の車がハンドルを回した。さらに、それを避けようとした車が、探偵の車に追突した。それだけならまだしも、車が炎上したのだから不運だよ。なんとかはい出しはしたが、全身、火だるま。どうしようもない。まもなく絶命だ。その時に抱きついていたのが、道ばたの消火栓だったというんだからな……」
「そこなんですよ、面白いのは」
「気の毒ぐらい、言いなさいよ。水とわずか数センチのところで、焼け死んだのだから」
「それもそうですね」
「で、あなた。第二の犠牲者については、どうなんです。ご存知なんでしょう」

「かなりね。今度は、ぼくが話しましょう。聞いていて、まちがっていたら、なおして下さい。とにかく、どことなく異様ですよね。ある刑事が、そこを気にした。関係者たちをたずねて、聞いてまわった」

「ああ。しかし、その刑事もまもなく死んでしまった」

「それがまた、奇妙なんですね。刑事という身分をかくして、盛り場を歩いていた。すると、二人の若い男が、けんかをはじめかけていた。やくざの下っぱだったようですね。刑事の本能なんでしょう、あいだに入ってなんとかなだめ、険悪さは一応おさまった。それぞれ別れて歩き出そうとした。その時ですよ。ゴルフのボールが、男のひとりの頭にぶつかった。少しはなれたところで、だれかが投げたんですね。しかし、そうとは、すぐわかるわけがない。野郎、よくもなぐりやがったな。なにを言いやがる。たちまち殺気だったものになり、短刀が抜かれ、割って入ろうとした刑事にぐさりと……」

「だいたい、そんなところですな。まったく、ひどいとばっちりだよ」

「とばっちりといえば、最初の探偵だって、そうなんです」

「都市化にともなう、ありふれたことともいえるよ」

「そこなんですよ、問題は。そう簡単に片づけてしまっていいのか。ぼくは、ただの偶然以上のものを感じるんです。なにかありそうだと」

「なにがだね」

「そこなんですよ、調べたいのは」

「やめたほうが、いいんじゃないかな。悪いことは言わないから。普通の人だったら、これ以上は深入りしないほうがいいとの、警告みたいなものをも感じるはずだ。そうじゃないかな」

「現代、普通のことをやっていたのじゃ、みとめられないのです。ご協力を、お願いいたします。ぜひ、ぜひ」

「どんな協力を……」

「この二つのことのほかにも、なにか、ご存知なのでしょう」

「そりゃあね、おやじのことだものな。しかしねえ、好奇心は身をほろぼすとも、昔からいわれているよ。ほどほどにしておくべきじゃないかな。気が進まないな」

「ここであきらめろなんて、むりですよ」

「しかし、きみのことを思うとね」

「ぼくのことは、ぼくのことです。そこまで心配なさらなくていいでしょう。それとも、もっと調べられると、あなたに不利な事実でも出てくるので、それを防ぐため

……」

「変な言いがかりは、よしてくれよ。ひねくれた考えかただぜ。あんな殺人ができるほどの才能があれば、とは思うけれどね」

「じゃあ、話して下さっても、いいじゃありませんか」

「あなた、どうやら、食いついたら離れない性格のようだな」

「そうかもしれませんね」

「もはや、仕方なしか。そもそも、おやじがどんなふうに死んだのかは、知らないだろうな。知っているわけもないし」

「あ、そこは知らなかった。ぜひ」

「話すとするか。うちのおやじは、あるビルの一室を借りて事務所とし、商売をやっていた。金融だの、不動産の仲介だの、いろいろとね。だから、お客もさまざまだ。ある日、暗くなってからだが、そこへ拳銃を持ったやつがやってきた。取引きのもつれというわけだね。そいつも、殺すつもりはなかったらしい。もう少し金がもらえれば、そのまま帰ったことだろう」

「しかし、そうならなかった。なにが起ったんです」

「ドアが、少しだけ開いていたんだな。そこから入ってきたのさ」

「だれがです」

「当ててみるかと言いたいとこだが、時間のむだだ。大きなヘビだよ。どこかの家でペットとして飼っていたのが、逃げ出したんだな。無毒無害のやつなんだが、とにかく大きい。音もなく入ってきて、男の足にからみついた。つまり、なにかを感じて下に目をやると、大きなヘビ……」

「驚いたでしょうね」

「だろうな。思わず手に力が入った。引金がひかれ、弾丸が命中。うちのおやじは、そのままあの世へ……」

「とばっちりも、いいとこですね。お気の毒です。しかし、これは面白い記事になりますよ。なぜ、もったいをつけて、だまっておいでだったのです」

「もったいをつけてたわけじゃない。悲劇のもとは、そこにあるんだ。わたしの口からそれを聞いた人は、だれかに話したくなる。そう思うのが、いかんらしいのだ。波長のようなものが合わさるのかな。とたんに、不運にみまわれる」

「探偵と刑事がそうだと……」

「ああ。じつは、そのほか、三人いるんだ。どんなふうだったかは、いずれわかるよ」

「いったい、それはどういう意味……」
「こんな妙なことがつづくのは、うちのおやじの霊魂のせいらしい。まったく、あんな死にかたじゃ、浮かばれないよね。それに、生前おやじは孤独だった。商売の相手とは、友人になれないものね。だから、趣味の会とか同好会を作るのが好きだった。これについては、いやに熱心だった。わかるだろう」
「わかりますけど、だから、どうなんです」
「とんでもないとばっちりで死んだ者の会、そういったものを作りたいんだろうな。いいアイデアだぜ、うん。何回くりかえして話しあっても、けっこうあきないだろうと思うよ。きみも、まもなく入会できる」
「ぼくを死なせるために、話したのですか」
「ああまで、せがまれてはね。それに、結局はしゃべっちゃうんだよ。おやじの霊魂が、ぼくを通じて仲間をふやそうとしているんだから」
「なんとか助けて下さい」
「お気の毒だが、こればかりは手のつけようがないね。とばっちりなんだから。家にとじこもっていても、病院に入っても、警察に泣きついても。いや、そんなふうにしたほうが、とばっちりは受けやすい。けろりと忘れられれば、いいんだろうがね。あいにくと、だれかに話したくなる作用は消えない。しょうがないね。しかし、ものは考えようだよ。前例がないというか、こと死に関しては、まさに平凡な人には想像もつかないような体験ができるんだから。胸がわくわくするんじゃないかな。それに、死んでからも、あとあとまで楽しめる」

金銭と悩み

夕方。自宅への道を、その男は歩いていた。会社づとめというものは、平凡なことのくりかえしばかりで、面白いものじゃない。帰路さえも、変りばえしないとくる。

しかし、その時。前を歩いている人が、なにかを落した。当人はそれに気づかぬらしい。男が拾いあげてみると、名刺ぐらいの大きさの、黒っぽい色をした金属の板。それに金色で文字が書いてある。どこの国のものか不明だが、文字にちがいない。なにか大切なもののようだ。

彼は足を早め、追いついて声をかけた。

「もしもし、これを落したでしょう」

「や、これはどうも。ご親切に。助かりました。なんとお礼を申したものか」

かなりの年配の紳士だった。しかし、身のこなしには、若さも感じられる。いったい、いくつぐらいなのだろう。見当もつかない。

「ただ拾っただけですよ。そう恐縮なさるほどのことでは、ありません」

「いやいや、これはわたしにとって、じつに貴重なものなのです。身分証明書のカードのようなものでして、なくしたとなると、一大事。解決には、大変な手間がかかるのです。普通の人でしたら、珍しさで欲しくなったところでしょう。拾って下さったのが、あなたのようなかたでよかった。お礼をしないと、気がすみません」

「けっこうですよ」

「そうは、いきません。拾った人には一割をさしあげるのが、慣習だそうですね。その程度で、よろしいでしょうか」

「あなたのお気がすむのでしたら」

「では、のちほど、おとどけします。これから一生、働かないで、遊んで暮せるだけのお金ということで……」

「なんですって」

「あなたは、会社づとめがおいやなのでしょう。それに、このカードには、それだけの価値があるのです」

相手は、男の内心を見すかすように言った。

「信じていいのかどうか」

「いずれ、わかりますよ。では……」

相手の紳士は歩き去り、道のかどを曲った。われにかえった男は、あとを追ったが、その姿は消えていた。

「あいつは、なんだ。悪ふざけかな」

つぎの日、男が目ざめると、枕もとにボール箱が置かれてあった。眠る前にはなかったのにと、ふしぎがりながらあけてみる。

札束が、いくつも入っていた。心当りは、ひとつしかない。

「うん。きのうの男の言ったことは、本当だったのだな。あいつは、だれなんだろう。どうして、ここがわかったのだろう……」

男は札束を数えかけ、途中でやめた。下のほうに、大形の宝石がいくつか入っていたのだ。しかも、本物。

「インフレになった時は、宝石を売れというわけだな。こうなると、使いでがあるぞ。もう、あくせく働くことはない」

彼は外国旅行に出かけた。各地でうまい酒を飲み、高級な料理を食べ、ギャンブルを楽しんだ。なにしろ、金はあるのだ。

そして、帰国。しかし、なにかがひっかかる。あいつが正体不明のせいかもしれない。

毎晩のように、盛り場へ出かけ……。

しばらくの月日がたった。ある朝、二日酔いの頭で、彼はあることに気づく。

「あ、あ、あ。とんでもない状態におちいっているというわけか。たしかに、金はある。なくなれば、宝石を売ればいい。当分は困らない。しかしだよ。それは有限なんだ。一生、遊んで暮せると約束してくれた。ということはだ、それを使いはたした時が、死ということなんだ……」

男は青ざめる。自分の寿命のへりぐあいを、この目でつねに見ていることになる。

「……金の残りがわずかになった時は、とても正気ではいられまい。それを考えると、いまだっていい気分ではない。あいつ、悪魔だったのだな。これじゃ、遊んでも少しも楽しくない。ギャンブルをやるのは、自分の寿命を賭けることだ。将来のことなど、知らないほうがよかったのだ。しかし、こうなってしまったからには、どうしようもない」

この金をもとに、商売をはじめようかとも思った。しかし、たぶん、うまくいかないだろう。遊んで暮す金として、もらったのだ。こうなったら、できるだけ長くもたせてやる以外には……。

男は毎日、近所の川で釣をする。通りがかりの人が声をかける。

「釣れますか」
「都会のなかの川ですよ。たいしたものが釣れるわけ、ないでしょ」
「なにか浮かない顔をしておいでですね。そんなことをなさってて、面白いのですか」
「短期的にみれば苦痛ですよ。しかし、長期的にみれば、ざまあみろになるかも……」
「なんのことやら」
「でしょうね」

出張

その青年は、まことにきまじめな性格だった。酒も飲まないし、かけごとにも関心がない。独身であるのに、女遊びをしようともしない。冗談を口にすることも、まったくといっていいほどなかった。

職業は会社員。かなり大きな企業の、大都市の本社につとめている。配属は営業部だったが、お客相手の仕事には、あまりむいていなかった。

そのため、地方都市にある工場との、連絡係を担当させられていた。商品についての改良すべき点、利用者からの苦情の処理、生産量の調節。また、工場側からの営業部への意見、こういった点を強調して売ってほしいとの要望。そういった、さまざまな問題をあつかうのだった。

そして、その役をなんとかやってのけていた。働きがいがあるともいえた。

「あいつにまかせておけば、まちがいはない。なにしろ、いいかげんなところがないからな」

そんな信用が、周囲にできていった。事実、青年はそれだけの実績をあげていたのだ。

月に二回ほど、本社から工場へ出張する。三日ほど滞在し、いろいろな件を解決する。そのくりかえしで、年月がすぎている。

地方都市に滞在中は、工場に付属する宿舎を利用することにしていた。予備の宿直室といったようなもので、ベッドがひとつとシャワー・ルーム。豪華な部屋とはいえないが、それで充分だった。夕食などは、近所の店から取りよせればいい。

その晩。青年は夕食をすませたあと、のびをしながらつぶやいた。

「やれやれ、なんとか今回は一段落だ。あしたの朝の列車で、社へ帰るとしよう。なんだか眠くなってきたなあ。昼間、工場の各部門を、歩きまわったせいだろうな。なにしろ、この工場はいやに広い……」

そばのベッドの上に横になる。ねむけが押し寄せてきた。その眠りがなにをもたらすか、少しも気づくことなく……。

その少し前から、青年の同僚たちのあいだで、ひとつの計画が進行していた。ちょっとした陰謀といってもよかった。

社の帰りに酒好きの連中がバーで飲んでいるうち、だれということもなく言い出したのが、ことの起りだった。

「なにか、変ったことはないかなあ。会社の収益もまあまあだし、堅実そのものの社風とくる。あっという事件は、期待できないしな。平凡すぎるよ」

「それはたしかだな。赤字つづきで悩んでいる会社にくらべたら、ぜいたくな話ということになるんだろうが」

「しかしねえ、そういうことって、待っていたって起るものじゃないだろう」

「そうかもしれないな。しかし、どんなことを、やったものだろう」

それから、なんだかんだとたあいのない案がいくつか出たあと、だれかがこんなことを言った。

「どうだ。あの、まじめ人間を、からかってみるか。いっぱいひっかけて、その驚くようすを見物するのさ」

「なにか、面白い方法でもあるのか」

「こういうのはどうだろう。あいつ、定期的に地方の工場へ出張するだろう。宿舎にとまることになっているんだ。そこで眠りにつく。そしてだよ、目がさめてみると、こっちの社員寮の自分の部屋にいたとなったら、きっとびっくりするんじゃないか

な」

「そりゃあ、だれだって驚くよ」

話は、少しずつ具体化していった。

「うまくゆくかなあ」

「そこまでは考えてないが、不可能ということは、ないんじゃないかな」

「スポーツカーを使ったら、どれくらいの時間で、こっちへ運べるだろう」

「夜で道がすいていれば、六時間ぐらいかな」

「途中で目をさまされたら、おしまいだぜ」

「工場の守衛のひとりに話をつけ、睡眠薬をお茶にまぜて飲ませればいい。苦味のない薬があるんだ。よくきくし、あとに不快感が残らない」

「社員寮の部屋は、マスター・キーを借りることができれば、あけられる。うん、やれないことはなさそうだな」

「意外に簡単そうじゃないか。車の運転をする人は大変だが」

「その時の、あいつの顔が見たいな」

「少し気の毒なようだがなあ」

「かまうことないさ。かたぶつも、こういうことで、ユーモアがわかるようになるというものだ」

かくして、青年はその目標にされてしまったのだ。

朝になって、青年は目ざめた。

「あーあ、よく眠ったなあ。夢も見ないで、ぐっすりだ。さて、駅から列車に乗って、本社へと……」

そこで、あたりを見まわし、声をあげた。

「……あれれ、ここは自分の部屋じゃないか。目がさめたら帰っていたなんて……」

たしかめてみたが、そこが社員寮の自分の部屋であることにまちがいない。なぜ、こうなったのか。いくら考えても、わけがわからない。コーヒーを何杯か飲んだが、なんの役にも立たなかった。

昼ちかくに会社へ出勤。出張から戻った日は、そんな時間に社へ出ることにしていた。

事情を知っている同僚たちは、期待にみちて青年を迎えた。

「ごくろうさま。ところで、どうだった、仕事のほうは」

「うまく片づいたよ。しかし、それとは別に、とても信じられないことが起ってね」

「いったい、どういうことが……」
「言えないね。こんなことを話したら、頭がどうかしたかと思われてしまう。それでなかったら、でまかせを言う人間にされてしまう。どっちにしろ、困ったことになる」
「そんなことはないよ。きみがまともな社員であることは、みながみとめているじゃないか。うそつきとも思っていない。自分ひとりで考え込んだままというのは、よくないよ。あ、もうお昼休みだ。いっしょに食事でもしながら……」
同僚たちは、青年を行きつけのレストランへ連れ出した。そして、決して立場が悪くなるようなことにはしない、みんな味方だとか言いながら、青年の口を開かせた。彼にしても、内心はだれかに話したい気持ちだったのだ。
「そもそも、なにが起ったんだ」
うながされて、青年は話した。
「きのうの夜のことだよ。仕事をおえて、工場のそばの宿舎で横になったんだ」
「それから、幽霊でも出たのか」
「そんなのじゃないよ。幽霊なら、まだなっとくできるんだが」
「すると、夢のなかで、お告げでも……」

「そんなことでもない。そして、目がさめてみるとだね……」
と青年は口ごもる。
「そばに、すごい美人でもいたのか」
「ちがうんだ。なんと、こっちの社員寮の、自分の部屋に戻ってたんだよ」
「まさか」
「そう言われるだろうと思って、話したくなかったんだ。しかし、本当のことなんだよ。信じてくれないだろうが。なにがなんだか、まるでわからない」
青年のふしぎがるようすを見て、同僚たちは内心、だれもかなり満足した。しかし、みんなのいたずらと気づかれぬように、さりげなく聞く。
「きみが言うんだから、うそじゃないだろう。そんなこと、前にもあったのかい」
「とんでもない。あったら、いまさら驚いたりしないよ」
「それにしても、奇妙な話だなあ」
青年は、つぶやくように言う。
「夢遊病にでもなったのだろうか」
「おいおい、歩いて帰れる距離と思うかい。それに、夜だから、最終列車のあとだろう。きみ、運転は……」

「いや、ぜんぜんだ。免許証さえ持っていない」
「となると、宙を飛んでとなるな」
そう言われ、青年は声を高めた。
「いくらなんでも、ありえないことだよ」
「いやいや、そういう現象の実例は、世界にいくつもあるんだ。あっというまに、遠いところへ移動してしまったという話がね」
「どうやってだろう」
「その説明はつけられないが、空間のひずみのためとか、異次元を抜けてとか、テレポーテーションによってとか」
「その、テレなんとかって、なんのことだい」
「念力によって、そういうのをやってのける能力のことだよ」
「ありえるとは思えないがな」
首をかしげる青年に、同僚のひとりが言う。
「しかし、現実に体験したんだろう」
「それは、たしかなんだ。すると、眠ることによって、空間のひずみを通るか、テレポーテーションによってか、自分の部屋に戻ったということになるなあ」

「だろうな。しかし、会社のおえらがたには、話さないほうがいいぜ。返答に困るからな」
「出張の帰りの交通費の件は、どうしたものだろう」
「そんなこと、使ったことにして、もらっておけよ。その精算が抜けていたら、かえって変に思われる。それにしても、うらやましいなあ。そういう体験ができて」
「そう思われるかな。まったく、きつねにつままれたような気分だよ」
その日の午後、青年の会社での仕事ぶりは、ほとんど能率があがらなかった。
会社がひけてから、同僚たちはバーで話しあった。
「あいつ、すなおに驚いてくれたな」
「あんなことが起って平然としていたら、どうかしているよ。とにかく面白かった」
「やってみたかいもあった、というわけだな。なにしろ、手わけして、いろいろやったものな」
「もう一回、やってみるか。やり方のこつもつかめたし、それなりの楽しみもあるし」
「まったく、あいつはそういうのにふさわしい人間だ。期待どおりに驚いてくれる。深刻にもならず、大変だとわめきもしない。警察か新聞社あたりにかけこまれて調べ

られたら、われわれのいたずらだと、すぐにばれてしまうだろうな」

青年の次の出張の時に、それは、ふたたびおこなわれた。そして、最初ほどではないが、またも驚き、ふしぎがり、同僚たちはその話を聞き、反応をそれぞれ楽しんだ。

ところが、それでことは終らなかった。

半月ほどして、青年は同僚たちを昼食にさそった。

「聞いてくれよ。ますますふしぎなんだ」

「あの、いつかのことか」

「それもあるけど、今回のはもっと変なんだ。昼食をおごるからさ」

ついてきた同僚たちに、青年は話した。

「さっき出張から帰ったのだけど、ぐあいがおかしいんだ。眠って目ざめると、自分の部屋に帰っていた。これは、いままでの二回の帰り方だよ」

「うん、それは聞いた」

「今回もそうなるんだろうなと思いながら、ベッドに入ったんだ。ねまきに着かえてね。それが失敗だったようなんだ」

「なんでだい」

「目がさめたら、自分の部屋さ。しかし、ねまきのままなんだ。服はどうしたんだろうと、あたりを見まわしたが、なにもない。どうにも困って、工場へ電話をかけたら、服は宿舎のなかに残っていますとの返事。空間のひずみを抜ける時、服は着たままで眠らなくてはだめなんだろうか」

「理屈じゃ、そういうことになるな。しかし、ねまきのままとはねえ……」

聞かされた連中は、首をかしげた。

「工場の人たち、変に思ってるだろうな。どう説明したらいいだろう」

「帰りに親類の法事に出るので、礼服に着かえたとでも言っておいたら……」

「それは、いい弁解になるな」

その日の夕方、同僚たちはしぜんにバーに集った。

「あいつの話は、どういうことなんだ。だれかが、またやったのか」

「やらないよ。あんなことは、二回もやればたくさんだ。手数をかけて、いつも帰る手伝いなんか、ばかばかしい。新しい驚き方をしてくれるというなら、べつだがね。しかし、ねまきのままとはなあ。どうせなら、最初の時にそれでやればよかった」

だれからも、やったという話は出なかった。みなは顔を見あわせる。

「これは、どういうことなんだ」

「あいつの作り話かな。われわれにだまされたと知り、それならこっちもと、あんな話を作りあげたのじゃないか」
「そんなことは、あいつの性格から考えられない。それだけの茶目っ気があるのなら、販売の仕事で腕をふるっているよ」
「話し方が、真に迫っていた。服を残してきたことの、言いわけにも困ってたんだからな」
「じゃあ、われわれ以外のだれかが、あのいたずらをやったのだろうか」
「だれがだい。考えられないよ。それに、なんのためにだ」
「うん……」
しばらく、沈黙がつづいた。そのうち、だれかが言った。
「もしかしたら。しかし、まさか……」
「おい、なにか思いついたのか。話してくれよ。このままじゃ、落ち着かない」
「あいつ、本当にテレポートをやってのけたのかもしれない」
「ありうることかな」
「人間はだれでもそうなのか、あいつが特別にそうだったのかはわからないが、潜在的にテレポートの能力を持っていたとする。普通だと、それはあらわれない。しかし、

われわれはふざけ半分で、ああいうことをこころみた。三回目の出張の時の彼の心境は、どうだったかだ」
「今夜もまた、眠れば戻れると信じこんでいただろうな」
「そこなんだよ。たいていの人は、なにかたねがあったんじゃないかとか、いくらなんでも三回はつづくまいと考える。しかし、あいつは、あまり疑うということを知らない。空間のゆがみによって、必ず戻れるはずだ。心からそう思いこんで、眠ったにちがいない」
「それで、テレポートをやってのけたというわけか」
「ああ」
「どこを、どうやって通ってだ」
「それは、わからない。異次元を通ってかもしれないし、未知の力によってかもしれない。とにかく、あいつはテレポートをやったのだ」
「われわれが、その能力の開発を手伝ってしまったというわけか。そうとしたら、うらやましい限りだな。だれか、ぼくにもやってくれないかなあ」
「そう考えてしまっては、もうテレポートの能力は発揮できないだろうよ。信じこまなければだめなんだ。それにしても、あいつでよかったよ。たちの悪いやつの変な能

力をめざめさせていたら、ろくなことにはならなかった」

青年のその能力は、ずっとつづきそうなようすだった。

バーに集った同僚たちは話しあった。

「あいつ、まだやっているらしい。きのう、服を着たまま眠るようにしたら、うまくいったよと言っていた。便利なものだねとも」

「なんとなく、いごこちが悪いな。そばにテレポートの能力の持ち主がいるのは。こっちは、まるでできないのだ」

「自分が一段、低くなってしまったみたいだ。もとはといえば、われわれのせいなんだが」

「社員寮の彼の部屋を窓からのぞいていてわかったんだが、眠ったとたんに戻ってしまうらしい。夜も早い時刻だったよ。なんにもなかったベッドの上に、一瞬のうちに眠ったままのあいつが出現するんだ。ドアも窓もしまったままなのに。あれを見た時には、ぞっとしたね」

「だろうな。あいつは超能力者になってしまったんだ。それと今後ずっと同じ社でつきあってゆくのかと思うと……」

「どうだろう。もとに戻すか」

「あれはいたずらだったと、話すのかい。やつは受けつけないよ。それに、なんにも証拠は残っていない。ほかに、なにか方法があるかい」

「つまり、あの逆をやってみるのさ。テレポートであいつが自分の部屋に戻る。そこへしのびこみ、麻酔薬でもかがせて、正体不明にさせる。それから、車で工場の宿舎に運ぶのさ。やつはそこで目ざめる。そして、自分のその能力はなくなった。あるいは、空間のひずみが消えてしまった。そう思いこむんじゃないかな」

「それで異変も終るってわけだな。面倒だが、それをやらざるをえないようだな。われわれが火をつけたことだ。消す責任もあるといえるだろう」

みなの手により、それがなされた。

「やれやれだったな」

同僚たちがそんな気分になっていると、その次の日の午後、会社に青年から電話がかかってきた。

「どうも困ったことになってしまってね。会社へ帰れなくなってしまったんだ」

「どうしてだい」

「宿舎で眠って目がさめると、やはりここなんだ」

「そうだったのか。しかし、それでいいんじゃないかい。いままでが異常だったわけだろう。眠った場所で目がさめる。それが当然と思えばいいんだ」
「ぼくもそう思うよ」
「じゃあ、なぜ帰らないんだ」
「帰ろうとはしたよ。駅へ行って、列車に乗ってね。しかし、ワイシャツも着かえたいし、社へ出る前に社員寮の自分の部屋へ寄ったんだ。以前もそうしていた」
「そこから会社までなら、すぐ来られるだろう」
「それはそうなんだけどね。これからは、また列車で帰らなければならないのかと、がっかりしながらベッドの上に横になったんだ。しばらく、うとうとしたらしい。ほんのちょっとのあいだだったと思うんだが、目がさめると、工場の宿舎のベッドの上じゃないか。空間のひずみだかテレポートだか知らないが、これだと、どうやっても帰れそうにないよ……」

退院

「これで退院。長いあいだ、お世話になりました」
男は医師にお礼を言う。
階段で足をすべらせて頭を打ち、ここに運ばれたのだった。しばらく意識不明の期間がつづいたが、手当てのかいがあって、それもなおった。
それからは、あまり日数がかからない。内科的にはなんともないのだ。脳波の測定だの、後遺症が残るかどうかの精密検査だけ。その結果、退院が許された。
「まっすぐ帰宅かね」
「ここと自宅との中間に、つとめ先の会社があります。そこへ寄って、あいさつをしたり、休んでいたあいだのようすなどを聞き、それから帰ります」
「じゃあ、奥さんには、わたしからそう電話しておいてあげよう。そうだ、この薬を渡しておく。気分の悪い時に飲むといい」
「いろいろと、ありがとうございます」

男は病院を出た。電車へ乗る。

「久しぶりだなあ」

思わずつぶやく。午前十時、車内はこんでいなかった。しかし、なにか違和感がある。

「なぜかな……」

男は自問自答した。

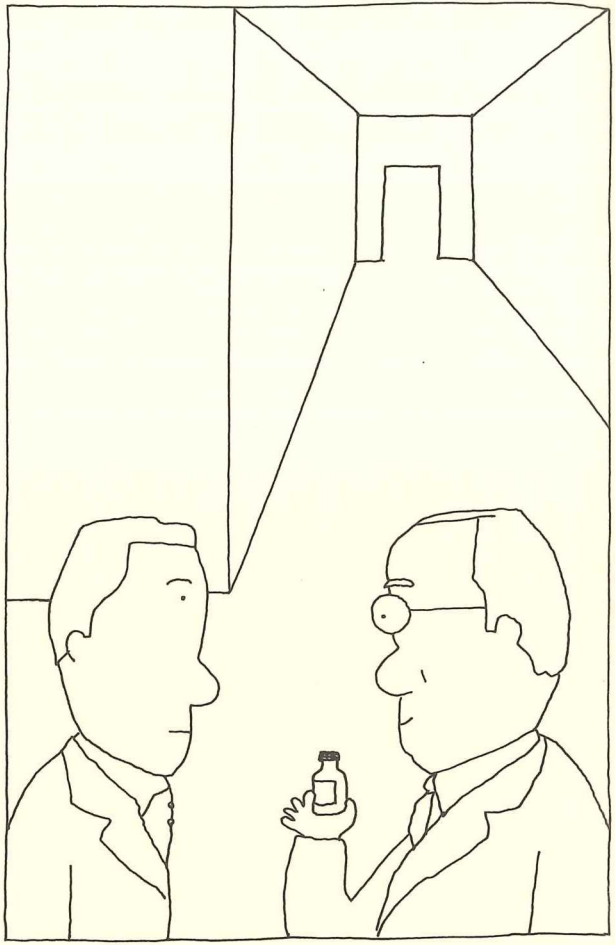
「……なにしろ、ずっと入院していた。もとの調子を取り戻すには、何日かかるというものだ」

自分をなっとくさせる。やがて、会社のビルにつく。男は事務室へ入った。まず、上司の課長の席へ行く。

「つまらないことで、長いこと休んでしまいました。いっそう能率をあげてがんばります」

「ああ、たのむ」

課長は、うなずいた。男は気が抜けたような感じを受けた。課長はもともと感情の起伏の激しい人で、こんな場合、はげますか、不注意をとがめるか、とにかく大声をあげるはずなのだが。



男は、自分の席についた。予想していたほど、書類はたまっていなかった。だれかが処理してくれたのだろう。

となりの席の、おたがい入社して三年目という同僚に言う。

「いろいろと迷惑をかけたな」

「そんなことないよ」

いやに、おとなしい。もう少し陽気なやつだったのに。まあ、仕方ない。しばらく休んでいたのだ。空白は、徐々に埋めてゆくことにしよう。

男は立って、廊下へ出た。十歩ぐらい先に、コーヒーの自動販売機がある。コインを入れると、ホットのが出てくるのだ。

「なんだ、これは」

ホットでもなく、コーヒーらしくない味だった。三分の一ほど口にし、あとは捨てた。味覚が変ったのか。なにしろ、打ったのが頭だからなあ。

考えながら立っていると、ほかの課の女の子が通りかかった。ちょっとした美人。

「やっと退院できたよ。おめでとうぐらい言ってくれないかな」

男は手を出し、握手を求めた。こんな機会に、手をにぎっておこうと思ってだ。

「おめでとう」

彼女は言い、手を出した。男は握り、そのとたん、ぞくっとしたものが、からだを走り抜けていった。なんという、つめたい手。

男はしばらく、ぼんやりと立ちつづける。彼女は、どこかへ行ってしまった。

なんだ、いまのは。氷でもいじってきたのだろうか。いや、このへんに氷などないはずだ。また、それだったら、ひとこと言いそうなものだ。こっちがどれくらい驚いたか、わかったはずだ。

席へ戻り、しばらく考えたが、さっぱりわからない。あたりを見まわす。だれもメガネをつけていないのに気づく。コンタクト使用の規則でもできたのかな。ちょうどいい。老眼の人は、どうするのだろう。

どうも気になる。となりの同僚に声をかけた。

「ちょっと話があるんだ。廊下へ出てくれないか」

「ああ」

立ち話となる。男は言った。

「ほら、そこの課に、ちょっとした美人がいるだろう」

「ああ」

「いま、手をにぎったんだ。ただの、退院祝いの握手だよ。どうだと思う。いやにつ

めたいんだ」
「それで……」
「わからないかな。飛びあがる思いだったぜ。いいかい、なにげなく、こうにぎった時にだね……」
男は同僚の手をにぎり、またも、びくっとした。つめたいのだ。
気がついてみると、男はタクシーに乗り、自宅の所在地を告げていた。病院へ行くべきなのかもしれない。これは後遺症にちがいない。味覚も、手の感覚もおかしい。しかし、その前に妻と会っておこう。
自宅の前に着く。男はタクシー代を払い、おつりをもらう。運転手の手もつめたかった。
ベルを押すと、ドアが開けられ、妻が迎えた。
「よかったわね。やっと退院できて」
のどがかわいていた。緊張の連続だった。テーブルの上にあったコップの水を飲む。変な味だった。どろっとしていて、にがみがあった。顔をしかめる。
「どうしたの」
「まあ、聞いてくれ……」

男は妻の手をにぎり、同時に、首すじにキスをした。手のつめたいのはまたかだが、首すじのつめたいのは、まさかという感じだった。唇の感覚まで、おかしくなったのか。男は言った。
「……おれは、なにもかも、おかしくなってしまった」
「いいえ、あなたが、まともなのよ」
「しかし、だれもかれも、つめたくなってしまった。文字どおりだよ。おまえまでもだ」
「それが現実なの」
「どうしたんだ。みな、宇宙人にとりつかれでもしたのか」
「そうじゃないの。あたし、あなたにその説明をするよう、たのまれていたの。よく聞いてね。じつはね、みんな、アンドロイドなの」
「なんだって……」
「原因不明の病気、たぶん新種のビールスなんでしょうけど、それで人類はほとんど全滅。そこで、アンドロイドがあとを引き受けたの。いずれ、あなたのようになぜか免疫を持っていて生き残った人たちが、ふえてくるんでしょうね。それまでの臨時の役よ。何百年かかるか、わからないけど……」

「なんということだ」

男はつぶやき、頭をかかえ、自分の部屋に入った。だれもかれも、人工細胞で作られた精巧な人形というわけか。まともに話し合える相手は、いないのだ。広い海を、ただひとり小舟で漂流しているような、さびしい気分。このままだと、頭がおかしくなりそうだ。

男は、病院でもらった薬を思い出した。少しは助けになるのだろう。コップに水をくんできて、プラスチックの包装を破り、錠剤を出し、そのなかへ落した。白い煙が……。

「なんだ、これは」

ふと鏡をのぞくと、そこにはすっかり白髪になった自分の顔が……。

男は悲鳴をあげた。

「おめざめですな。かなり、うなされておいでになりましたね」

そばに医師がいる。男は病院のベッドの上にいた。

「鏡を貸して下さい」

そこには、まだ若い自分がうつっていた。男はほっとして言った。

「いやな夢を見た」

「そのようですね。しかし、夜は、あける前が最も暗いとかいいます。からだの回復も、そういうものです。すっかりよくなられました。まもなく全快です」

「それにしても、いやな夢だった。リアルな上に、つめたい感覚まであった。まさに、思い出しても、ぞっとするよ。のっぺらぼうの怪談、昔話、そんな筋立てで、ばかにされたような気分も残っている。不愉快だ」

つぶやく男に、医師が言う。

「ご立腹できるのは、元気になった証拠です。じつは、いままでだまっていたことがあるのです。ショックになってはいけませんのでね。しかし、もう大丈夫のようです」

「いったい、なんです。早く言って下さい」

「あなたの会社が、倒産したのです」

「いいよ、あんな会社。べつな仕事をさがすよ」

「それから、奥さんがいなくなったのです。かけ落ちとのうわさですが」

「いいさ、子供はないし。あんな、つめたい女。思い出すだけで、身ぶるいがする」

「では、あすにでも退院しますか」

マドラー

その男は四十五歳。いちおう名の知られた会社につとめ、腕のふるいがいのある地位を与えられ、給料も悪くなく、充実した毎日だった。

妻と、十歳になる娘があった。男の父親は早く死に、母親は病気がち、入院だのなんだので手がかかった。やがて息をひきとり、一段落してからの結婚だったので、一般の人にくらべておそいほうといえた。

まあ、そんなことは、どうでもいい。

このところ、男はあることについて考えつづけだった。

きっかけは、四日ほど前、会社の帰りに同僚とバーで飲んでいた時だ。カウンターの席に並んで話しているうち、話題がとぎれた。男は、ふと思いついて言った。

「そうそう、前から言おうと思ってたんだけど、きみは時どき、左手の人さし指と右手の小指とをこすりあわせるね」

「あ、まじないのことか」

いともあっさりと答えられ、男はとまどう。にが笑いか、弁解めいたものがかえってくるかと思っていたのだ。

「あれは、まじないなのか。で、それだけのききめは、あるのかい」

「だろうな。いままで大きな失敗をすることなく、やってきたのだから」

「ふうん……」

男は前にあるグラスをあけ、ひと息つく。こいつが、そんな妙なことを信じている性格とは、知らなかった。さらに聞いてみる。

「……いつごろから、やってるんだい」

「ずっと昔からさ。そうだ。きみに指摘されて気がついたぞ。はじめての海外出張の時だ。やはり緊張していたんだろうな。まじないをやるのを忘れた。あの取引きがうまくいかなかったのは、そのせいだったようだ。二回目からは、順調になったんだから」

「そんなに、きくものなのか。やってみるかな、ぼくも……」

男は、そのまねをやりかけた。すると、同僚があわててとめた。

「冗談は、よせよ」

「なぜ……」

「なぜって、わかりきったことじゃないか。人それぞれの、やり方があるだろう。ほかの人のと同じのをやると、逆にわざわいを招く。きょうのきみは、少しおかしいぜ。酔いが早い。いいかげんで帰ったほうが、いいんじゃないかな」

「そうするか……」

おかしいのはどっちかわからないまま、男は先にそこを出た。飲みすぎとは思えないが、まあ家に帰る。

それ以来、気になってならないのだ。

あいつの話しぶりだと、確信にみちてやっているようだ。そして、現実に効果もあるらしい。こんなことは、現実なのか。あいつか、ぼくか、どっちかがまちがっているのだ。といって、へたに問題にできない。

男は話し相手を慎重に選んだ。同期に入社した同僚で、べつな部に所属しているやつだ。ライバル意識も持たず、困った時には助言しあい、こういう相談には最適と思えた。

夕食をおごるからとさそうと、その同僚はついてきた。

「なにか悩みごとのようだな」

ようすから、すぐわかる仲なのだ。

「じつは、だれかに聞いてみたくてね。笑われるかもしれないが」

「なんのことだい」

これまでと同じく、信用していいようだ。男は口にした。

「まじないのようなことなんだが」

「ようなっていっても、もう少し具体的に話してくれないと、答えようがない」

「ある社員なんだよ。ちょっとした動作について質問したら……」

男は実例を示した。

「そうか。なんだ、ようなじゃなくて、まじない、そのものじゃないか。それについて、なにか……」

「もっと、くわしく知りたい」

「弱ったな。こう聞かれるとは。呼吸のやり方、数のかぞえ方、説明のしようがないよ。科学的な説明っていっても、ちょっとちがうものだからな。神を信仰しているから、悪事をしないようにしたからって、死なない人はいないんだ。しかし、悪事はしないほうがいい。つまり、なるべくならってところじゃないかな。適当な運動のようなものだろうな。やったからって、長寿が保証されるわけじゃないけど……」

どうやら、この同僚も当然と受けとめているらしい。これ以上ねばると、こっちが

おかしく思われそうだ。

「そういうものかな。で、きみのやり方は……」

「左の中指で、ももの横をたたくんだ」

「どうして、人によってちがうんだろう」

「人間って、そういうものなんだ。体格、住所、名前、みなちがっている。まあ、この問題については、あまり深く考えないほうがいいんじゃないかな。ガラスはなぜ透明なのか、二かける二が、なぜ四かというようなものさ。働き過ぎて、疲れてるんじゃないのか。よくいるだろう、自分はなにか病気になっていると思い込むのが。現実には、なんでもないのに。気のせいだよ」

「そうかもしれないな」

「休暇でもとって、山の温泉にでも行ってこいよ。緊張の連続は、よくない」

「そうしよう」

別れたあと、男の内心の混乱は、一段と大きくなった。あの同僚も同じらしい。まじない。それが日常的に存在しているとは、知らなかった。信じられない。

共謀という言葉が、浮かんでくる。もしかしたら、何人かが組んで、からかっているのじゃないだろうか。なんとかグループというのを作り、だれかをからかって、ひそかに面白がる。新しい娯楽だ。ほどほどに笑いものにされたあげく、やっと仲間に入れてもらえる。ありうることだ。

となると、少しはうろたえてみせないと、いけないのだろうか。いつまでだろう。何年がかりとなると、たまったものじゃないぞ。

そんなことを考えはじめると、会社で仕事をしていても、気が散っていけない。男は、まさにどうしようもない気分になった。

ついに、休暇をとって旅行に出た。温泉での休養ではない。大学時代の親しい友人が、ある地方都市で酒造業をやっている。あいつなら、なにもかも打ちあけられる。変なグループに入っているはずはない。入っていたら、入っていると答えてくれるだろう。それだけ信頼できる人物なのだ。

たずねてゆくと、友人は歓迎してくれた。

「久しぶりだな。ぼくが仕事で出かけたついでに会ってからだから、一年ぶりぐらいかな」

「そうなるね」

「わざわざ、やってきたのかい」

「ああ、こんな年になって、妙なことに悩みはじめちゃってね」

「女性関係か」
「そんな、ありふれたことじゃない」
「かなり深刻そうだな。お役に立つかどうかわからないが、話してみてくれ」
「じつは、まじないについてなんだが……」
男は先日からの疑問を、くわしく話した。
「そうだったのか」
「笑ったりしないだろうな」
「そんな失礼、するわけないじゃないか。人間、なにもかも知っているわけがない。なにか知らないものがあっても、仕方ない。ぼくだって、エクアドルの首都の名を知らないでいるもの」
「じゃあ、まじないは本当なのか」
男が念を押すと、相手はうなずく。
「そういうことだよ。そうか、きみは、ご両親がもういないんだ。兄弟もなしか。親類となると、ちょっとちがってくるしね」
「ぼくむきのやり方を、知る方法はないものだろうか」
「難問だな。へたやって、だれかのまねとなることもあるし。効果のないものでは意

味ないし。どうだい、いっそ、いまのままで……」
「なんにもやらずに、いるってことか」
「ああ。いままで、べつに問題もなかった。きみは、やらなくったっていいように、なってるのだろう。きみには、それに代る強い運がそなわっている。そう考えれば、いいんだ」
「ほかの、みんながやっているのにか」
「気にしないことだよ」
男は例の疑問を持ち出した。
「グループのようなものがあって、みながぼくをからかってるのじゃないかな。どうだろう」
「被害妄想だよ。ぼくまでが、そんなのに加担するわけがないだろう。あまり気をまわしたりせず、いままでのままが一番だと思うよ」
「そうかなあ」
「お役に立てなくて、すまない。いずれにせよ、じたばたしたり、気にしすぎたりじゃ、いいことはないよ。がんばってくれ」
「ああ」

そこへとめてもらい、つぎの日、男は帰宅した。

たいした収穫はなかった。今後、どうしたものだろう。知らないうちならまだしも、知ってしまったのだ。ほかの連中は、まじないをやり、その効果を信じている。信じてやるということは、有益でもある。そんななかで、平静でいられるか。なにか、いい解決法はないものか。

夜、シャワーをあびたあと、グラスについだウイスキーの水割りを前に、男は考えつづけた。

妻が声をかけてきた。

「あなた、また、なにか大問題をかかえこんでるのね」

「ああ、そうなんだ。よくわかるな。しかし、今回のはやっかいだ。仕事を含めた生き方にかかわるものだからな」

「なんとかなるわよ」

妻が言い、男は聞いた。

「気やすめだろう」

「ちがうわ。本当よ。あなたって、いつも悩んだ時や決断を下す前、腕を組んで、なにか細長い物で左のひじのあたりを丸くこするでしょ。いまはウイスキーをかきまわすマドラーでだけど。会社じゃ、たぶんボールペンかなにかでしょ。そして、そのあと、たいていうまく解決……」

「なんだと……」

男は、自分のしていることに気づいた。右手に持ったマドラーを、左のひじに当てている。こころよいし、これこそ、自分にぴったりといった感じ。これだったのか、まじないは。

「知らなかったの。のんきな人ねえ」

「まあね。しかし、そういえば、きみの場合はどうなんだい。ぜんぜん気づかずにきたが」

「むりもないかもしれないわ。結婚してから、悩むことはめったになくなったもの。でも、その前には時どきやったものよ。こんなふうに……」

妻は左手の中指を親指で押さえて、つづけざまに三回、空気をはじいてみせた。

「そうだったのか」

男はうなずく。そういえば、小学生の娘がよく、人さし指で空気をはじいている。みっともないからやめさせようかと思ったこともあったが、そうしないほうがいいのだろうな。

バーであった男

その青年は会社の帰りに、ひとりでバーに寄った。軽く飲み、仕事の疲れをほぐそうとしたのだ。

しばらく前になにげなくはいり、気に入り、それから時おり寄るようになったバーだ。奥行きのある店で、カウンターが長く、もう一方のテーブルの席は一列だった。女の子は三人ほどいるが、注文を聞き酒を運ぶのが主な仕事で、話し相手になるといった、いわゆるサービスはしない。音楽もうるささを感じさせない。

「酒を楽しむには、いい店だな」

青年がつぶやくと、カウンターでとなりの椅子にかけていた、四十歳ぐらいの男が声をかけてきた。

「そうですね。いい店です。あれ以来、わたしも、ちょくちょくくるようになったのです」

顔を見ると、いやに親しげな表情があった。すでに何回か会っているような気がしたのは、この店のムードのせいか。いずれにせよ、不快な感じは受けず、青年は適当に話をしてみようかと思った。

「値段が高くないのも、ありがたいし」

「それに、あまり品のないお客もいませんね」

意味のない会話のあと、青年は言った。

「さっき、あれ以来とかおっしゃいましたね。気になります。なにかあったのですか」

「いえね、ちょっと妙な体験をしたものでね」

「よろしかったら、お聞かせ下さい」

青年はべつに知りたいとも思わなかったが、ほかに話題もなかったのだ。男はうなずき、話しはじめた。

「それまでは、郊外から自動車で事務所へかよっていました。やっかいなこともありますが、運転が好きなんですね。まあ、そんなことは、どうでもいい。半年ほど前でしたか、ある夜、帰宅する途中のことでした」

「で……」

「前方に、道を横切ろうとする人影をみかけた。あわててブレーキをふむ。運転はう

まいんです。その少し手前で停止しました」
「なにごともなかったわけですね」
「といえるかどうか。その人影が、こっちをむいた。若い女でした。にっこりと笑いかけてきた。乗せてもらいたいのかと思い、笑いかえそうとしたとたん、姿が消えたのです」
「道に倒れた……」
「かと思って、車から出てみましたよ。しかし、姿はない。あたりを見まわしたが、どこにもいない」
「変な話ですねえ」
青年も男も、そこで酒のおかわりを注文した。それを少し飲み、男はつづけた。
「それから十日ほど、たってからですよ。またも人影。女が白い服を着ているので、うまくブレーキがかけられるんですね。前と同じ顔でしたよ」
「そして、にっこり笑って消える……」
「そうなんです。ためしにと、少しずつ車を進めてみましたよ。悲鳴もなく、女の外見は薄れ、なにごともなくスピードをあげられました」
「その女性、ご存知のかたですか」

「ぜんぜん。一度でも会っていたら、忘れられないような魅力的な顔ですよ」
「夢みたいな出来事ですね」
青年は、よくある話だなと思いながらも、首をかしげてみせた。
「ええ、夢も見なれてくると、どうってこともなくなります。現れる場所もきまっているのです。見かけると反射的にブレーキをふんでしまいますが、苦笑しながら通り過ぎるというわけです」
「一種の幻影なんですね」
「さあ。そして、問題の夜になったわけです。仕事上でのごたごたがあり、少し落ち着きをなくしていました。例の場所にさしかかると、またも例の人影。ばかにするのもいいかげんにしろと、逆にスピードをあげたんです」
「わかります」
青年がうなずくと、男は言った。
「車体への衝撃。あわてて車をとめ、外へ出ましたよ。はね飛ばされた女のからだが、横たわっている。助け起したが、ぐったりとしていて、呼吸も脈もない。なんということだと、わたしは車に飛び乗り、一刻も早くその場を離れようと……」
「ひき逃げじゃありませんか」

「そんなことは、ありませんよ。あれは幽霊なんです。あなただって、さっき、幻影だって言ったじゃありませんか」
「しかし、ぐったりとした感触を受けたのでしょう。抱き起して」
「それが幻覚かもしれない」
男に言われ、青年はなにがなんだかわからなくなった。
「たしかに、妙な出来事ですね。失礼ですけど、アルコール中毒じゃないんですか」
「ちがいますよ。運転に酒がいけないのは、常識です。しかし、それ以来、運転はやめ、酒を飲むようになったのです。もう、あんな目には会いたくない。そこへゆくと、酒はいいですなあ。緊張しないで楽しめるんですから」
「そのあとも、女の幻影は出現しているんでしょうか」
「わかりませんね。あの道は、二度と通りたくありませんな」
「そうでしょうね。面白いお話を、ありがとう」
青年はバーを出た。
怪談として出来がいいのか悪いのかわからないが、当人の口から聞くと、思わず引き込まれる。
ある日、青年はそのバーに同僚をさそった。もしかしたら、あの男に会えるかもしれない。はいってみると、はたしていた。青年はあいさつ。
「先日はどうも。これはぼくの同僚です。いつかのお話を、してあげてくれませんか。ぼくが話したのじゃ、信用してくれそうにない」
「いいですとも……」
男は話した。二度目でも面白いし、はじめて聞く同僚はもちろん驚いた。
「ふしぎなことですねえ。見たいものですね」
「わたしは、ごめんです。いまは、もっぱら電車ですよ」
それからも、何回かバーで男と会った。思いついて質問をつけ加える。
「はね飛ばした女の人、それまでのとは別人だったのじゃ……」
「同一人ですよ。あの顔を、まちがえることはない……」
男は、顔の特徴などの説明をする。
「どこなんです、その場所は」
「言えませんね。そのせいで、信じてもらえないかもしれませんが」
「いえ、信じますよ」
青年と同僚は、会社でもそのことを話しあった。

「取引先の人と商談の時にあの話をしたら、興味を持ってくれてね、うまくまとまったよ」

と同僚が口にし、青年は言った。

「ああ、ぼくもだ。しかしね、場所がはっきりしないと、もうひとつ迫力がないな。あの人も、その点になると、口をつぐんでしまう。心のどこかで、本当に人をはねたのかもしれないと思っているんだろうな。どうだ、ひとつ、どこかにきめるか」

「そうだな。北西への道路とでもするか。いつか通っただろう。大きなお寺がある。あのへんが、ふさわしいんじゃないかな」

「そうだ。そこにしよう」

「はねられた女の死体は、どうするか。そんな記事は新聞に出なかったと言うやつも……」

「そこまではっきりさせないほうが、いいんじゃないかな。消えたのかもしれないし、だれかが運び去ったのかもしれない。あるいは、警察に秘密にしておきたがる理由があった。ぼやけているところが、いいんだよ。もやもやが残って」

「それもそうだな」

二人はこの話を、けっこう利用した。たいていの人は、耳を傾けてくれるのだ。もっとも、体験者じゃないから、くりかえしはきかない。やがて、つきあっている人のほとんどに話してしまった。

そんな時、会社に刑事がやってきて、青年と同僚とに面会を求めた。なにごとかと、二人は応接室に通した。刑事は言う。

「怪談めいたうわさを流したのは、きみたちか」

「夜の道路の、自動車の件ですか」

「そうだ。とんでもないことをしてくれた。ああいうデマをばらまかれると、まことに困る」

「デマなんかじゃ、ありませんよ。ある人から聞いたんです。文句があるのなら、その人に言って下さい」

「じゃあ、その人に会わせてくれ」

勤務時間も終りに近かった。二人は刑事とともに、例のバーに寄る。男はなかなか現れない。きょうは、来ないのだろうか。青年は二杯目の注文をしながら、店の女の子に聞いた。

「ねえ、よく、ぼくと話しながら飲んだ人、知っているだろう」

「さあ……」

「常連じゃないか」
バーテンも知らないと答え、マスターも言った。
「あなたさまは存じ上げておりますよ。しかし、いまごいっしょのかた以外となると……」
それは同僚のこと。青年は言う。
「そんなはず、ないよ。ほら、四十歳ぐらいかな。やせていて、細長い顔。髪はいつも、きちんと手入れしていた。そうそう、金ぶちの眼鏡、茶色の背広、靴も同じ色……」
「さあ。客商売ですから、二、三回いらっしゃったら、たいていおぼえるはずですけど、そういうかたは……」
「ここで、ぼくと何回か話しあったのに」
その時、刑事が口をはさみ、青年に言った。声が高くなっている。
「その人から聞いたって言うんだね。どういうことなんだ、これは」
「ぼくたちは、その人と会ったつもりでいるんですけどね。どうかしたんですか、変な顔して」
「きみたちのデマのおかげで、物好きなやつらが、マイカーであのへんにやってくるようになった。つまらんことをしてくれたというのは、そこなんだ」

「それで……」
「若い女の運転する車。未熟なのか、不注意なのか、人をはねて殺してしまった」
「それはそれは……」
「その被害者が、いま、きみの話した人物なのだ。酔って車道へと歩き出したらしい。酒のにおいが残っていた」
「そうとは知りませんでした。お気の毒に。あの人がそんな目に会うとは。で、いったい、どこに住んで、なにをしていたかたなのですか。そこまでは知らないのです」
「知りたいのは、こっちだよ。身もとの手がかりになるようなものは、なにもない。名刺も、手帳も、背広のネームさえない」
「車の免許証を見れば……」
「調べてみたが、だめだった。免許証もカードも名刺もなしだ。指紋も手がかりにならない。どこのだれなのか、まるでわからない。家族からの申し出もない……」
青年は加害者の女性について、服の色や美人かどうかをもっと知りたかったが、それを口にする気にはならなかった。

ひと仕事

その三十歳を少しすぎた男は、しゃれたマンションの一室で、優雅な生活を送っていた。朝はゆっくり起き、雨が降っていれば読書、晴れていれば美術館や画廊めぐり。まだ独身だから、気ままなものだった。

もっとも、三年ほど前、父母を航空機事故でいっぺんに失っている。しかし、年月はその悲しみを薄れさせてくれた。もらった補償金はかなりの額で、運用利息だけで充分に生活できた。

また、その分野の学校を出ているので、絵画の鑑定が仕事のようになっていた。画家になりたかったのだが、それには才能不足。美術評論家になろうかと勉強したが、文章がうまくない。偽造グループに加わったこともあるが、役に立たないと追い出された。そんな体験のあげく、鑑定をするようになったのだ。

あくどいもうけをしなかったので、聞き伝えて依頼に来る人が少しずつふえ、収入になる。とくにぜいたくでもなく、文句のない毎日といえた。

ある夜、胸を押さえられるように感じ、男は目をさました。苦しい。なんとか手をのばして、ベッドのそばのスイッチを押し、照明をつけた。

「や、なんだ。どこから入ってきた。泥棒じゃないようだし……」

四十歳ぐらいの女が、髪をふり乱して、毛布の上に乗っている。

「うらめしや」

と女が言ったが、男の耳に入らなかった。

「いったい、これは、なんのまねだ。欲求不満の女につきまとわれるとは……」

「そんなのではありません。う、ら、め、し、や、なのです」

男は相手を、しげしげと見た。みにくくはないが、ぞっとする印象を受ける。

「少しわかってきたぞ。幽霊だな。しかし、ぼくはあなたを知らない。女性といいかげんにつきあったおぼえは、ない。だいたい、年上の女は好きじゃないのだ」

「お会いしたことは、一回だけあります。思い出せませんか。色恋なんかじゃなく……」

しばらく考え、男は言った。

「そうそう、あの人だな。ぼくの知人の紹介で、金を借りにきた……」

「おわかりでしょう。そのあげく、あたしはどうしようもない立場になり、このよう

なことになったのです」

「どうも、わけがわからないな。変だ。ぼくは銀行預金より少しましな利息ならと思い、あなたの店を担保にお貸しした。月に一・五パーセントですよ。ひどい高利じゃないでしょう。あなたの商売のやり方が、へただったのじゃないのですか」

それを聞き、女の幽霊は声をあげた。

「あら、そうとは知らなかったわ。悪いのは、あいつだったのね。ちょっと待ってて、うらみをはらしてくるから……」

そこで消え、しばらくしてあらわれた。

「……やってきたわ」

「なにをだ」

「あなたの友だちよ。毎月、とてつもなく高い利息を取りたてに来て、払えないと借金に組み入れ、複利にする。とうとう、お店を巻き上げられるとこまできたのよ」

「あいつ、あいだに立って、そんなひどいことをしてたのか。で、やつをどうしてきたのだ」

「自動車を運転中だったので、となりの席にあらわれ、呼びかけたら、驚いて、ハンドルを切りそこね、歩道橋の柱に激突……」

「一巻の終りというわけか。あいつ、ここへ化けて出たりしないだろうな」

「大丈夫よ。幽霊になるのは、あたしのように、うらみを残して死んだ者だけ。自殺とか、殺されるとかで」

「じゃあ、これで用はすんだわけだ。もう消えてくれ。見てて、あまり楽しくない」

「それが、そういかないの。まちがいでとはいえ、うらみながら死んだでしょう。そのエネルギーが、残っているのね。あなたとの縁は、当分のあいだ切れないの」

「まいったね……」

男はウイスキーを口にした。こんなのに同居されては、たまったものじゃない。

女は言う。

「こわがらせたりは、しないわ。驚かしたおわびに、なにかお手伝いしてあげたいの」

「ご好意はありがたいが、役に立つとは思えないな。外出の時の留守番で、空巣防止ぐらいのものかな」

「ねえ、こういうの、どうかしら。あたしが、どこかのホテルに出現する。そう、客室か、宿直室かに……」

「そこにいたやつは、うなされて飛び起き、ふるえあがるぜ」

「そこへあなたが、さりげなくやってきて、退散させる役を引き受ける。あたしは消え、あなたは謝礼をもらえるし、何日かは無料で宿泊できる……」

「それを、くりかえすわけか。悪くないな。美術館を見て回りながら、各地を旅行できる。鑑定の仕事は、しばらく休みにしよう。しかし、ホテル側がどうたのんでくるかだ。売り込んだのでは、変に思われる」

「神父さんのスタイルであらわれるのは、どうかしら。秘密は守ってくれるだろうと、打ちあけてくる」

「それはいい。うまくいきそうだ」

「成功まちがいなしよ。あたしも、あてもなくうろつくより、はりあいがあるし」

「幽霊の生きがいとはね……」

といったわけで話がまとまり、ものはためしと、とりかかった。

まず、目標のホテルに女の幽霊が出現する。二日ほどつづける。そして、男が出かけてゆく。

宿泊の手続きをすませてから、ボーイに聞く。

「ロビーに飾ってあるあの絵は、なかなかすばらしい。いつごろ買われたものでしょうか」

「は、ちょっとお待ち下さい」

支配人らしいのが、やってくる。男はもともと絵にくわしいのだ。いくらぐらいで買ったものかの見当もつく。そんなことで、相手も信用してくれる。

しかも、神父の服装なのだ。しげしげ眺められながら、男は切り出す。

「なにかお悩みでも、おありのようですね」

「ええ、じつは……」

内密にとの条件で話しはじめる。事情を聞き、男はうなずく。

「そうでしたか。なんとかして、さしあげましょう」

なんとかなるよう仕組んだことなのだ。お代はいりませんからと、べつの部屋でしばらくの滞在をすすめられる。出現しなくなったのかどうか、たしかめるためだ。お礼の金ももらえた。

つぎのホテルでも、うまくいった。眠る前、幽霊の女が出現した。

「うまくいってるわね」

「ああ、予想以上だ。感謝されるところがいい。この気分は、金じゃ買えないものな。やってみて、よかった」

しかし、それはつづかなかった。四回目のホテルで、支配人が部屋にやってきて、

こう言った。
「困りますね」
「なにか、お困りのことがおありなのですか」
「そうですよ。あなたです。これは一種の脅迫ですよ。どういうしかけかは知りませんが、あやしげなものを出現させ、そのあとにやってきて、もっともらしく始末したことにし、無料滞在。そのたびに名前を変えているが、人相や手口は変えられない」
それを聞き、男は青くなる。
「いつのまに、そんな調査を……」
「どの業界だって、そうですよ。競争しあう部分と、助け合う部分がある。すぐ情報は伝わるんです」
「そういうことか」
「どうせ、本物の神父じゃあ、ないんでしょう。警察を呼んでもいいのですが、ここはひとつ、話し合いといきましょう。わたしの下で働いてくれませんか。それなりの給料を出しますよ」
「それに従う以外にないようだな。で、どんなことをすればいい」
「いろいろあるのです。こちらの指示するところへ、幽霊とやらを出してくれればいいのです。建設予定地で、どうしても土地を手ばなさないやつがいる。のろわれた土地だ、持っているとろくなことはないと思わせる」
「ははあ」
「企業の社員寮が出来て、ホテルのお客がへった。そっちへも出現してもらいたい。いろいろとあるわけです。そのうち、よそからの依頼で、出張してもらうことにもなりましょう」
「仕方ない、やるか」
男はその支配人に言われるまま、あれこれやらされるはめになった。楽しいことではなかった。
幽霊の女が言う。
「いやいやながらみたいね」
「ああ、気が進まない。もとの生活に戻りたいが……」
「そうさせてあげるわ。あなたとの縁も、そろそろ切れるころだし」
女は、それきり出現しなくなった。男は自宅へと帰った。支配人が夜の道に倒れて死んだのだ。医者は、なにかのショックでしょうと推定した。

文字が……

それが消えてしばらくして、春子は手でひたいを押さえながら、つぶやいた。

「あ、またあの発作だったのね。なぜなのか、わけがわからない。更年期の症状なのかしら」

痛みや苦しさをともなうわけではない。まったく、なんということもないのだ。しかし、いやな感じだけ残る。

それは、予告なしに起るのだ。文字があらわれる。たとえば、壁の上に。

カネガホシイノカ

知らないあいだに、落書きをされたのかとも思う。ふいてみようかと、ぬれたタオルを持って戻ってくると、あとかたもなく消えている。目を近づけて調べても、きれいなものなのだ。なれてきたとはいえ、いい気持ちのものではない。

最初の時など、心臓が止るほどの驚きだった。知人の法事のため、香典袋を買ってきた。あけてみると、そのなかに、この文字が……。

しばらくの時間、凍りついたように動けなかった。思考も停止。われにかえり、なぜこんなことがと、たしかめようとする。すると、文字などなく、まっ白なのだ。一種の幻覚だったようだ。

この点を除けば、春子の生活にこれといった不満はなかった。住居は交通に便利なところの、マンション。広く豪華で、かなり高級なものだ。つまり、物質的な不満はぜんぜんなかった。そして、精神的にも。

春子は、好きなように生きてきた。美人でもあったし、いくらかの芸術的な才能も持っていた。何回も外国へ行ったし、楽しさのなかで年月が過ぎていった。

しかし、ふと気がついてみると、いい年齢になっていたし、いくらか程度の才能では、世の中を渡っていけない。いったい、これからどうやって……。

そんな時に、いまの夫とめぐりあった。

「きみが好きなのだ。過去のことは、いっさい問わない。生活の苦労はさせない。結婚して下さい」

たよれる人が欲しかった時だ。いい話のように思え、しばらく考えさせてと返事をし、やがて承諾した。考えるどころか、彼女の心はその場できまっていたのだ。もっとも、夫はかなりの年上だった。

いくらかの不安はないでもなかったが、その気分はどこかへと行ってしまった。生活の余裕は、ありすぎるほど。夫は資産の運用の才能を持ち、その一方、春子を心から愛してくれていた。無形のものとはいえ、彼女にとって、愛はたしかなものだった。

しかし、問題は、あの発作だ。はじまったのは、結婚してからだ。年に一、二回の割で、文字の幻覚に襲われる。出現の場所は、天井、床、下着、雑誌の余白、浴槽、場所を選ばない。

夫がまとまった財産を持っている。それだけに、あの文字が気になってしまう。たしかに、収入の不安定な男だったら、結婚しなかっただろう。しかし、想像していた以上の財産とは、あとになって知ったのだ。

それにしても、なぜ、あんな幻覚が。医者に相談しようかとも考えたが、幻覚なのは自分でもわかっている。そして、その精神的な不快感を除けば、なんということはない。治療法があるとは思えなかった。幸福すぎるのが原因と言われるぐらいが、おちだろう。

夫に話すのも、ためらわれた。心の奥に、金めあてで結婚したという思いがひそんでいたことになってしまう。

これぐらいは、がまんすべきなのだろう。不快なのは発作のあと、しばらくだけだ。

あとはなにもかも、うまくいっている。

しあわせというべき状態のなかで、年月が流れていった。夫は老年になったせいか、病気がちになり、入院をくりかえすようになった。

設備のととのった病室。見舞いに寄った春子に、夫は言った。

「医者のやつ、ぼやかしているが、わたしも今回はだめらしい。もう長くない」

「そんなこと……」

「おまえには感謝している。いっしょに暮せて楽しかった。心残りといえば、おまえとの別れだけだ」

「そんなことより、元気を出して……」

「それで少しばかり時期をのばしたって、どうってこともない。ところで、わたしの財産だ。なんでもうけたのかだまっていたが、聞きたければ話すよ」

「おたがい、過去にはこだわらない約束でしたけど、お話しになりたいのなら」

「かつて、金持ちの女と結婚したことがあった。すぐにわかったことだが、いやな女でね。わたしを買ったつもりでいやがる。こっちだって、はらにすえかねた。二人で外国へ旅行した時、治安の悪い国へ寄り、そこで……」

「殺したのね」

「ああ。発覚するはずはないし、きみと結婚した時には、とっくに時効が成立していた。その遺産を運用して、金まわりがよくなったってわけさ。きみとの、愛にみちた結婚生活。人生は、こうでなくちゃいかん。わたしは、現実主義者だ。なんの後悔もしていない。金は、好きなように使ってくれ。大丈夫だ。一時は気にしたがね。死者からのうらみがましいメッセージが、なんらかの形で送られてくるのじゃないかと……」

おととい

その男は、自分の家のそばでたたずんでいた。正しくは、自宅のあるマンションの入口のそばでだ。まっすぐ早く帰ればいいのに、だが、彼にはそう簡単に出来ない事情があった。

それは二週間前。朝食の時、口をすべらせた感じで、妻が言った。

「あなたって、ちっとも昇進しないわね」

眠りたりないところへ、そんなことを聞かされ、男はむっとして言いかえした。

「文句があるのか。いちおう暮してゆけるのは、だれのおかげだ」

「でも、ほかの人は……」

「ほかのやつは、ほかのやつだ。他人と比較されるのは、不愉快だ。面白くない……」

そう言い捨てて、男は家を出た。会社へむかったのではなかった。

反対の方向へ。都会をはなれよう。ほかの人なるものが、あまりに大ぜいいすぎる。妻とはよく口論をするが、男には同性の友人が多かった。秀才的ないやらしさがなく、にくめなく、話していて楽しくなり、変なたのみごとを持ちこまない。ひとつのとりえだった。会社内で、あまり役には立たないが。

まず男は、ある高原地帯へ行った。

高校時代の友人が、そこでホテルをやっている。金持ちの父親が建て、その運営をまかされているというわけだ。男を迎え、その友人は喜んだ。

「よく来てくれたな」

「前に立ち寄ってくれと言われたのを、思い出してね。じつは、ワイフとけんかをして、家を出てきた」

「くよくよするな。しばらく、ここにいろよ。いまはシーズンオフ。ただでとめてあげるよ。サービスは不充分かもしれないがね。そのうち、奥さんが折れて、ほうぼうへ連絡し、ここへ電話がかかってくるだろうさ」

おうようなものだった。その好意に甘え、そこに滞在することにした。

近くの林のなかを散歩したり、サイクリングをこころみたり。しかし、ひととおり見物すると、あきてしまう。それに、ものには限度というものがある。

一週間ほどして、男は言った。
「これ以上、世話になるわけにはいかない」
「気にするなよ。もっといても、いいんだぜ。いったい、行くあてはあるのかい」
「あっちのほう、山を二つ越えた町で、大学の時の音楽仲間だったやつが、家業をついで病院をやっている。たずねてみようと思う」
「きみは友人が多いんだね。そうだ、そこの電話番号をメモしておくか。どこからか連絡のあった時のために……」
男はそれを告げ、あいさつした。
「どうも、いろいろと……」
「そのうち、また来てくれ。元気でな」
ホテルを出て、鉄道を乗り継ぎ、男はその病院を訪れた。そこでも歓迎される。
「や、久しぶりだな。出張のついでかい」
「いや、じつは……」
男は事情を話す。友人の医師は言う。
「そうか。昔の知人を回ってるってわけか。いいねえ、優雅で。うちにも、しばらくいろよ。あいている病室がある。ただが気になるのなら、掃除でもなんでも手伝ってくれ」

「じゃあ、そうさせてもらうよ」
男は昼のうち働き、夜はいっしょに酒を飲み学生時代の話をした。やがて、窓ガラスも金具類も、すべてぴかぴかになった。壁のしみも消えた。三日ほどして、男は言った。
「そろそろ、べつなところへ行く。このまま、ずるずるといるわけにもいかないし」
「まだ、いいじゃないか。そのへん、見ちがえるようきれいになって、感謝している」
「ここは外科が専門なんだね。血を見るのが、好きじゃないんだ」
「そういうわけか。仕方ない。どこへ行くつもりだ」
「少し北のほう。きみ、知らないかな。大学でぼくと同じ学科のやつで、お寺の住職になってるやつ」
「よくおぼえてないな。まあ、気をつけてな」
そして、お寺の住み込みとなる。何日かして、その住職は言った。
「きみのいるのが迷惑なんじゃないが、いいかげんでけりをつけたらどうだい」
「というと……」

「つまらんことが原因じゃないか。子供がないとはいえ、家を飛び出して旅まわりとは、みっともない。奥さんだって、内心ではあやまっていると思うよ」
「しかし、ぐあいが悪いな」
「大丈夫だよ。帰りさえすれば、それでかたがつく。夫婦って、そういうものだ。ぼくも、こんな仕事をしてるんで、仲裁したりして、何度も見ている」

というわけで帰ってきたものの、いざとなると、なんと言って家に入ったものか迷い、男は立ちどまったままでいたのだ。しかし、いつまでも、そこにいるわけにいかない。

もう、しようがない。とにかく家に帰ろう。そして、ワイフの出方によって応答することにしよう。男はマンションに入り、自分のところの玄関のベルを押す。

妻が内側からあけて言う。
「あら、おかえりなさい。カギは持っているんでしょ」
と、ふしぎそうな表情。そういえば、いつもは自分でカギをあけて入っていた。
「そうだったな」
男は日常の世界に戻った。服を着かえる。妻はにこにこしていた。小声で歌っている。これで、いいのだろうか。あまりに平穏すぎる。これが反省のあらわれなのか。夫婦とは、そういうものとはねえ。しかし、気まずさのないのは、いいことだ。

夕食のあと、男は話しかけた。
「なあ……」
「なんなの」
おだやかな声。男はそれ以上、なにを言ったものかわからなかった。
「いや、べつに」
こういうものなのか。
つぎの日、会社へ出勤。品質と在庫の管理が彼の仕事。同僚もいるし、そう多忙な時期でなかったので、欠勤も大さわぎにはなっていないだろう。しかし、迷惑はかけているのだ。どう弁解したものだろう。
同僚が声をかけてきた。
「やあ、おはよう」
欠勤について問いただしたり、なじったりするような感情はこもっていなかった。どうなっているのだ。なんだか、欠勤しなかったような調子じゃないか。
男はそっと、書類のファイルを調べる。ここ二週間分、彼の、いや、彼そっくりの

筆跡で記入してある。なぜだ。だれがやったのだ。妻や同僚が、申しあわせて、おれをからかっているのだろうか。

男は帰宅する。

妻から聞き出さなければならない。どう持ちかけるか。考えていると、妻がうしろから話しかけた。

「あら、首すじの右のとこ、はれているのね。左のほうには、ちょっとした傷が」

すなおな驚きの声。

「ああ」

はれているのは、お寺の庭を歩きまわっている時、ハチに刺されたのだ。左の傷はと、そうだ、高原の林のなかで木の枝にひっかかれたのだ。

「きのうも、そうだったのかしら」

「たぶんね」

「どうしたのかしら。おとといの夜、肩をもんであげた時は、なんともなかったのにね」

もらった薬

その中年の男は、家庭を持ち、自分の家を持ち、まあまあの生活だった。それだけ、会社での仕事に熱を入れていたといえる。

ある日、会社の帰りに、学生時代からの親しい友人と出会い、まあ一杯とバーに入った。

「どうだい最近……」

と友人に聞かれ、男は言う。

「なんというか、精神的にすっきりしないことが多くてね。ストレスなのか……」

「だろうな、わかるよ」

「えらく気軽に言うなあ。あまり、実感がこもっていないな。いや、きみも同じだから、その点、おたがいさまってとこか」

「まあね……」

しばらく考えてから、友人が言った。

「……きみだから、話すか。内密にたのむよ。もやもやした気分の、いい解消法があるんだ」
「スポーツのようなたぐいか」
「薬だ」
「疲労回復の作用があるのか」
「それが、ふつう考えるのとちがうんだな。簡単な効能じゃないんだ」
「飲んでみたいな」
「あげよう」
友人はポケットの封筒のなかから、プラスチックで包装された一錠を出した。男はそれを受け取る。
「もったいをつけるなあ」
「それだけの価値のある、貴重なものなんだ。ききめがあったと思ったら、電話をくれ。月に一錠の割で送るよ。たぶん、連用したくなると思うな。ということはだ、きみは秘密を守らざるをえないわけだ。だれかに話したとしたら、渡さなくてはならなくなり、自分のがなくなる。たのむと言われたって、ぼくもそう余裕があるわけじゃない。友人の友人まで喜ばせる義理はない」

「量産できないのか」
「そうなんだ。したら、問題になるかもしれない」
「よくわからないが、とにかく、ありがとう」
グラスを重ねて、しばらく雑談。別れて男は帰宅した。
夕食をおえると、あの薬のことを思い出した。ためしてみるか。水を用意し、書斎の椅子にかけて、それを飲みこんだ。周囲が少しぼやけてくる。戸外にいるような気分。幻覚作用があるな……。
とつぜん、なにものかにぶつかる。人間のような感触。男はなぜかなぐりつけたい衝動にかられ、ぼかすかやる。やがて相手が倒れたのか、消えたのか、手ごたえはなくなり、男はもとの意識に戻る。
胸がすっとしていた。精神的なかすを、すっかり排出してしまったよう。大げさに言えば、生れかわったという気分。
「こういうことだったのか」
手の甲を眺める。傷つきも充血もしていない。その夜、男は熟睡した。
つぎの日、会社での能率はあがった。夕方、思い出して、友人に電話した。
「あれ、きいたよ。すごいしろものだな」

「だろう。一カ月後に送るからね」

男は心待ちし、約束どおり、一カ月後に薬がとどく。そして、前回と同様な幻覚を体験できた。まったく、面白い薬だ。効果もてきめん。

しかし、つぎの日、なにげなく新聞を眺め、気になる記事をみつけた。不意の災難との見出し。ある人が夜道でいきなりなぐりかかられ、助けを求めて声をあげると、そいつはたちまち逃げていってしまったという事件。

なにか関係があるのだろうか。男は会社の資料室で、一カ月前の新聞を見た。しかし、そのたぐいはのっていない。ほかに大きな事件があれば、なぐられたなんて、のせるほどのものではない。

気にはなったが、一カ月もたつと忘れ、あの薬の作用を楽しむ。なんともいえない、すがすがしい気分になるのだ。仕事ははかどり、対人関係はよくなり、なにもかも調子がいい。

友人に言われたとおり、連用するようになってしまった。おかげで、いいことずくめ……。

と思いかけるようになってまもなく、それは、なんの予告もなく発生した。

ある日、午後の二時ごろ、男が街を歩いていた時だ。

むこうからやってきた紳士を見て、わけもなくなぐりかかりたくなり、それをやってしまったのだ。なにがなにやらわからないでいると、かけつけた警官に逮捕された。

警察のなかで、男はなぐった相手にひらあやまり。

「もう、弁解のしようもありません。申しわけございません。つぐないをさせていただきます。お金ですむということではございませんが……」

男は自分の半年分の給料に相当する金額を申し出た。相手はふしぎがりながらも、その額に満足してか、世の中、気疲れが多いものですよと言い、名刺の裏に銀行の口座番号を書いたのを置いて帰っていった。

しかし、警察官は、そうはいかない。

「なぜ、あんなことをした」

「自分でも、わかりません」

「あの人に、うらみでもあるのか」

「とんでもない。名前さえ知らなかったのです」

「だれかに、たのまれてか」

「ちがいます。わけがわかりません」

「ときどき、そんな発作を起すのか」
「はじめてです」
アルコールを飲んでるかどうかの検査がなされ、注射のあとも調べられた。
「これらとは無関係だな。同じような事件の報告が、いくつかある。おまえがやったのだろう」
「ちがいますよ。常習者だったら、あんなとこで、つかまったりしないでしょう」
「それもそうだな。そもそも、派手なことをやって人目をひくのが好きなのか」
「ちがいますよ」
「おわびの金を、気前よく約束したな。金がありすぎての、趣味なのか」
「ちがいますよ」
質問ぜめは徹底的だったが、男は答えようがなかった。ひと晩を留置場ですごすことになった。
両ひざをかかえる姿勢で考える。原因は、わかっているのだ。あの時間、どこかであの薬を飲み、幻覚を味わったやつがいたのだろう。そして、その代理行為が、たまたま、おれに押しつけられた。つまり、のりうつられたのだ。
あの薬には、そういう作用があるらしい。まあ、普通ならことの起るのは夜で、な

ぐった当人は自分の行為に驚き、すぐに逃げてしまう。おれの場合、昼であり、とっさに反応できなかったのだ。
男の身もと調査がなされ、会社の上役がまじめな性格と保証してくれ、つぎの日の午後やっと釈放となった。男は上役にあやまる。
「とんでもないことを、してしまいました」
「気の迷いというのか、ふと、自分を見失ってしまうことも、あるだろうさ。それに、きみは社にとって大事な人材だ」
「ありがとうございます。このご恩は忘れません。さらに仕事にはげみます」
「たのむよ」
「はい」
男は銀行へ寄り、なぐった相手の口座へ約束の金を振り込み、デパートへ入って、果物のセットをとどけるようたのんだ。これで一件落着だ。帰宅すると、友人から薬が一錠とどいていた。さっそく飲むとしよう。
えらい目にあった。気ばらしをしないことには、どうしようもない。効果てきめんなのだ。そのかわり、どこかで、だれかが、だれかをなぐるというわけだろう。がまんしてもらう以外ない。おれは大金を払ったのだ。

また、おれが二度もあれをやらされる確率は、ごく低いものだろう。存分に楽しんでいいのだ。それに、会社で、もっと張り切らなければならないし。

西風

その三十歳ちかい青年は、会社の帰りにバーへ寄って、なんということなしに、ひとり酒を飲んでいた。平凡な日々が過ぎている。彼は結婚しているが、二年目ともなると、子供のいないせいもあり、とくに早く帰ろうという気にもならない。

「こんなぐあいに、面白いこともないまま、生きてゆくのか……」

青年は軽い近視の眼鏡をはずし、こめかみや眉間（みけん）のあたりを指で押した。仕事の激しさで疲れたのではない。会社での所属は監査課で、単調だが見落しは許されないという地味な部門。

「……終ってから飲むことが、唯一の楽しみか」

そのつぶやきが耳に入ったのか、カウンターのとなりの席の男が声をかけてきた。

「現状にご不満のようですな」

五十歳ぐらいか。身なりのいい落ちついた感じの人物。マッチの棒を何本も使い、複雑な図形を作っている。

青年はうなずく。

「まあね。健全な会社、安定した地位。ぜいたくな言いぶんなのでしょうが、若さを持てあますような仕事の担当なのです」

「だったら、酒なんか飲まないで、登山とか、テニスとか、ヨットとか……」

「と思うんですが、そう収入は多くないんです。なんだか中途半端な毎日で、つい酒を飲んでしまいます」

男は青年に言った。

「ひとつ、お手伝いしましょうか」

「なんですって」

「事態の改善の、役に立てたらと」

「ご好意はありがたいが、だからといって、どうにかなるものではありません」

「いやいや、ただのはげましではありません。もっと具体的な意味で、申し上げているのですよ」

「よくわかりませんな。なんだか気になってきた。どんなことなのか、説明して下さい」

「わたしは、小さなデザイン関係の会社をやっている者です」

「それで、そんなことを……」

と、青年は男の作ったカウンターの上の、マッチの軸での図形に目をやった。

「これについては、いずれのちほど。わたしはね、若いころから占いに興味を持ちまして、かなり研究しました。手相、人相、易、占星術、そのほかさまざまを。そのあげく、独自な方法をみつけました。星まわりに、気温、天候まで要素として加えるのです。湿度と精神状態には、大きな関連がありますよ」

「新発見の、占いかたなのですね」

「この亀甲形をもとにした図形も、その時に使うものです。遊び半分じゃありません。問題は的中率です。六割や七割じゃ、だめなんです。九割五分をコンスタントに越えていてこそ、占いとして信用される」

「大変なことですね。しかし、それだったら、あなたご自身、すでに大きな財産家になっていて、豪遊なさっていていいはずだ」

「自分自身となると、うまく当らないものなのです」

「占いをやる人は、みんなそう言う」

苦笑する青年に、男は言った。

「自分に関してはだめなかわり、他人についてなら、ほとんどぴたりです。だから、

財産はないが、定期的な収入はかなりあるのです」
「というと……」
「何人かと契約し、わたしのアドバイスで利益を得たら、その一割のお礼をもらうことにしているのです。その人たちは、自分の運勢をフルに活用しているというわけです」
「つまり、ぼくにも契約をということですか」
「その気があればです。みこみがありそうな印象を受けたので、話しかけたのです。むりにとは申しません」
青年は、しばらく考えてから言った。
「ためしになにか、とはいきませんか」
「かまいませんよ。さしつかえなければ、お名前、生年月日、会社と自宅の所在地を教えて下さい」
青年はそれらを告げた。男はマッチ棒の図形を変化させながら、時計をのぞいたり、メモ用紙で計算したりし、最後に確認のそぶりをして言った。
「あした、いつもより二十分、早く家を出てごらんなさい。駅のそばで、なにかを拾うでしょう」

「なにをです」
「わかりませんが、悪い結果にはならないはずです。それによってなっとくがいったら、このバーにおいで下さい。あしたの夕方も、ここにおります」
半信半疑で、青年は帰宅した。
つぎの日、妻に妙な顔をされながらも、青年は早めに家を出てみた。なにが落ちているのだろう。それへの好奇心もあった。そして、駅のそばで、大判の封筒を拾った。薄っぺらで、注意していなかったら、ふみつけてしまったところだろう。
あけてみると、不動産の証書と委任状。重要なものであることは、すぐにわかった。会社についてから、その所有者の電話を調べ、知らせると、かけつけてきて感謝された。
落したと気づいて、まっ青になったという。悪用されたら、どうなるか。それに、急を要する支払いのめどがつかなくなる。しかし、いい人に拾われ、助かった。その人は、お礼ですと封筒をおいて帰っていった。あけてみると、紙幣が入っていた。
「ふうん。そういうことか」
青年はうなずき、考え込む。こんなことが、あるとはねえ。きのうの男の演出でもなさそうだ。ぼくがその気にならなかったら、ほかの人が拾うか、風で飛んで紙屑と

なったかだ。また、いまの人の喜びかたも、芝居とは思えない。金までくれた。

夕方、バーへ寄る。青年は占いの男に言う。

「おっしゃる通りでした。すばらしい。きょうのお勘定は、わたしに払わせて下さい。あの金は、みんな飲んでしまいましょう」

「で、なにを拾いました。いいものとまではわかるのですが、そこから先は……」

「不動産の証書でしたよ……」

青年は、いきさつを報告した。男はうなずきながら聞き、それから言った。

「興味がわきましたかな」

「ええ、悪くありませんね。しかし、いざ契約となると……」

「会費をとるわけではない。悪魔じゃないんですから、魂をよこせとも言いません。アドバイスでいいことがあった時に、十パーセントをいただくだけです。損はさせません。わたしもそれで、得になるのです」

「どんな手続きをするのですか」

「契約ということで、かたくお考えになりましたな。あなたがその気になれば、それでいいのです。アドバイスはそのたびごとに、ご自宅あるいは私書箱にお手紙でお送りします。長い出張の前には、わたしにハガキでお知らせ下さい。また、重要な問題の場合は、どこかでお会いして話すことになりましょう」

ということで、青年は男と契約した。

たちまち、いいことの連続、ということはなかった。

月に一、二回といった間隔で、男からの指示がとどく。ある株式を買い、値上りでいくらかの利益をあげたこともあった。残業の時、会社へ泥棒が侵入しようとしているのを発見、警察へ通報して逮捕、そのためボーナスがふえるということもあった。

夢のようとはいえないが、生きている楽しみのようなものを味わえた。少なくとも、他人とはちがうのだ。指示された口座へ振り込む謝礼も、惜しくなかった。普通なら手に入らない金の、一割なのだ。

そのうち、会って話したいとの手紙がとどいた。青年は指定された喫茶店へ出かけてゆく。占いの男に、まずお礼を言う。

「おかげさまで、もうけさせていただいています。すごい的中ぶりですね。どうしてわかるのです」

「そこが占いさ。説明できないこともないが、しろうとにはむずかしすぎる。また、普及したら価値がなくなるし、パラドックスも発生する」

「かもしれませんね」

ひと息ついて、男は話しはじめた。

「ところで、別な会社に移る気はないか。電気部品を作っている小さな会社だが、将来性があり、給与もいい。わたしとの契約者が、定年でそこをやめる。後任に適当な人はないかと、相談にきた。占ってみると、きみとその会社とは相性がいい」

予期しなかったことだった。青年は少し考えてから聞いた。

「もし、ぼくがいやだといったら、どうなるんですか」

「べつに、悪い事態になることはない。しかし、移ったほうが、自己の運命をよりよく活用できる。収入もふえる」

「本当ですか」

「信ずるかどうかは、きみの問題だ。これまでのわたしのアドバイスを、どう感じているかだね」

「どうやら、ご指示に従ったほうがいいみたいですね。いまの会社の仕事、どうにも退屈です」

青年は、その会社に移った。小さいが活気があり、働きがいがあった。収入もあった。アドバイスどおりにしてよかったという気分だった。

仕事で大失敗をするところを、手紙の注意によって未然に避けられたこともあった。

この謝礼は金額の見当がつかず、問い合せたら不要とのこと。契約者へのサービス。まったく、ありがたかった。失敗は、占いの男にとっても困るのだ。

定期的に、投資などの指示がくる。もうけの率に差はあるが、損はないのだった。しらずしらずのうちに、あの男のあやつり人形にされてしまうのか。そんなことが頭をかすめるが、それ以上には発展しない。契約前にくらべ、なにもかもよくなっているのだ。

一年ほどたち、会って話したいとの手紙がとどいた。出かける。重大なことらしく、料理屋の一室で男は待っていた。頭をかかえ、なにかつぶやいている。青年は声をかけた。

「どうしました」

「どうもこうもない。きみにとって、きわめてよくない占いが出た。契約者たちがわたしを重要視しているのと同じく、わたしも契約者が大事なのだ。な、わかるだろう」

「でしょうね」

「だから、状況の悪化は困るのだ。しかも、今回は指示のしようがない。こんなのは、いままでになかった。このところ、気温のカーブが好ましいものでなかった。そこへ、

西風の日がつづきすぎた。これは予想外だった。運命とは、もともとはばがあるもので、危険を避けられる。しかし、大震災、集中豪雨ということもある。強い運の人も、これには勝てない。きみの場合、西風の連続だ。手のつけようがない」

「いったい、ぼくはどうなるのです」

「死だ」

「なんですって」

「近日中に、死ぬことになっている」

それを聞いて、青年はふるえ声になった。

「まさか。なんとかなるんでしょう」

「それが、だめなのだ。わたしだって、そうなって欲しくないのだが」

「でも、あなたは占いの権威でしょう。未来の予測があれだけできるのだから、ぼくを救えていいはずだ」

「お気の毒だが、どうにもならない。四日後の五時十分に、死ぬことになっている。目に見えぬあらゆる力が、きみをそう運命づけた。占いは、それを予見するものだ。わたしのやってきたのを、考えてみてくれ。当りはずれが半分ずつだったら、きみにも助かる可能性がある。だが、あいにくと、あの的中率だ」

事態がわかってくるにつれ、青年はわめいた。

「いくらなんでも、ひどい。まだ死にたくない。損をさせないと、約束したじゃありませんか。だまされた」

「あまり文句を言わないでくれ。わたしのせいでは、ないのだ。内心では、きみを助けたいと思っている」

「もう、どうにも方法はないのですか。確実に絶望なのですか」

「かすかな望みはある。そうでなかったら、こう話したりしない。しかし、正直なところ、どの程度の割で助かるのか、見当もつかない」

「それでも、だまって死を待つよりいい。やってみましょう。なんでもします」

青年にせかされ、男は言った。

「きみの両親は、どうしている」

「母は郷里で健在。父は数年前、病死しました」

「なくなられて、それからどうした」

「どうって、火葬にして、先祖代々の墓の下に埋めましたが」

「それを掘り出して、持ってきてくれ」

「骨をですか」

「そうだ。いやなら仕方ないが」
「やりますよ。死ぬのよりいい。父だって、許してくれるでしょう」
「では、それを持って、四日後の午前、わたしの別荘に来てくれ。だれにも話さないでな。場所はここだ」
男は、海岸ぞいにある別荘の地図を書いた。
約束の日、青年は自動車を運転し、そこへやってきた。男は迎えて言う。
「持ってきたか」
「はい。しかし、これをなにに……」
「ロウ人形作戦を、やってみるのだ。中南米のブーズー教で用いられている。ききめは、いくらかあるらしい。しかし、この現代、ロウを使うことはない。プラスチックで、きみらしい形を作ってある」
男は指さす。そこには人間の形をしたものがあった。青年は首をかしげる。
「あれですか。あまり、ぼくに似てませんね」
「あとで、きみの顔の複製を作って、はりつける。手のひらもだ。きみ以上に死相の強いものに、修正してだ。あの内部は、がらんどうになっている。持ってきた骨は、そのなかに入れてくれ。きみのであることが望ましいが、そうもいかんしな。それから、ハサミで髪の毛を切って、人形の頭にはりつけてくれ。ひげもそって、なかに入れろ……」

それらの作業は進行した。青年が聞く。
「うまく、ぼくのかわりに死んでくれるでしょうか」
「わからんが、これ以外にないのだ」
「なぜ、ここでやるのです」
「なるべく、人目にふれないですませたい。それに、このあたりは天候が微妙に変りやすい。つまり、運命にかかわる要素の乱れてくれる率が、高いと思われるからだ」
やがて、いちおう完成。男は指示した。
「さあ、服をぬいで、それに着せろ。あ、下着もだ。かわりに、わたしのを貸してやる。まて、背中にホクロがあるな。同じ個所につけておこう。そうだ、眼鏡もだ。腕時計も。爪は伸びているか。切ってなかに入れろ」
五時ちかく、それを車にのせ、少し走らせて停止させた。がけに沿った道ばた。二人はおり、三十メートルぐらいはなれた林のなかへ入り、うずくまった。青年は聞いた。
「もっとはなれたほうが、いいんじゃありませんか」

「まぎれを求めるのだから、近くにいる必要もあるのだ。自分についてはくわしく占えないが、わたしは、まだ死なないはずだ。そばにいてやる。殺し屋にダイナマイトを投げられるような、死に方ではあるまい。きみが急性の病気で死ぬのなら、これはもう寿命だ。どうしようもない」

息づまるなかで、時間がたつ。青年は目をとじ、男は時計に目を走らせる。

すべては一瞬の出来事だった。なにか物音がし、たちまち大きくなり、それは林の上をかすめ、あの車に激突し、爆発した。そして、いずれも燃えながら、海へところがり落ちていった。

「うまくいったようだ」

と男が言い、青年は目をあける。

「なにがどうなったのです」

「小型機だ。ジェットの小型機だ。操縦のミスか事故で、あの車にぶつかって炎上し、海へ沈んだ。これで、きみは死ななくてすみそうだ。さあ、別荘へ戻ろう……」

二人は祝杯をあげた。青年は心からほっとして言った。

「おかげで、生きのびました」

「きみはしばらく、この別荘で、じっとしていたほうがいい。運命の流れがおさまるまで。余震や二次災害のようなものに巻き込まれては、つまらん。久しぶりの休養も、いいだろう」

「そうします」

二カ月ほどたち、髪も伸び、青年はもう大丈夫だろうと思った。都会へ出て、会社へ寄ってみる。しかし、そこでは予期しない応対をされた。

出勤しなくなったので、会社は後任を採用し、うまくいっている。事務のよどみは許されないのだ。以前のようにと言っても、相手にしてくれない。社長も、かつての部下も。二カ月前ということは、現代においてはかなりの昔なのだ。

つぎに自宅へ寄った。妻は夫の事故死を知らされ、葬式をおこない、保険金を手にし、小さな店をはじめていた。死んだのではない、このぼくだと言っても、通じない。燃え残った車も、時計や眼鏡も、爆発で散った毛髪も衣服も、すべて死を示している。思考が、そう切り換わってしまっているのだ。

二人だけしか知らないはずのなにかを話してみようとしたが、うまく思い出せない。引きあげざるをえなかった。

青年は占いの男の家へ行き、事情を話した。

「どうなっているんでしょう」

「きみはあの時、死ぬ運命にあったのだ。生命体としても、社会の構成体としても、死ぬ運命にあり、そして、死んだ」

「ぼくの身代りがね」

「身代りじゃない。あれが本人だ。だからこそ、きみはいま、ここにいられる。しかし、あの時で、きみの過去は終ったのだ」

「妻と会っても、話が通じない」

「きみは過去の記憶を持っているつもりなんだろうが、それはもう幻影なんだ。現実に通用しないもの。友人と会話をしようにも、なにひとつかみ合わないはず。あの時で、すべてが終ったのです。いまのきみは、運命というルールのそとの存在なのだ」

「これから、どうなるのでしょう」

「わからない。ああうまくゆくとは、思ってもみなかった。きみについて占ってみても、なんにも出てこない。きみはもう、契約者ではなく、研究対象だ」

「なんだか、いやな気分ですよ」

「しかし、死なないですんだのだぞ。もしかしたら、ずっと死なないでいられるかもしれない。ためしてみるか」

「とんでもない。へたして死んだりしては、つまりません。ああまでして助かった命ですからね」

「生活に不自由はさせない。どこか、アパートを借りて暮していてくれ。適当な仕事を、さがしてあげよう」

男は青年にまとまった金を渡した。

何日おきかに、青年は男をたずねる。

「テレビを見てすごすのも、あきました。働きたいのです」

「ところが、なにもないのだ。戸籍などなくても、どうってこともないが、運命に無視されているのだからな。たぶん、悪事をして警察につかまることもないだろう。そのような悪事は、できないのだ。運命がやらせてくれない。恋愛も……」

「じゃあ、どうすれば……」

「もう少し待ってくれ。調査中なんだ。まったく、前例がない。そのうち、方法がわかるかもしれない」

さらに月日がたつ。青年が男に言う。

「ずいぶん、かげが薄くなってしまいました。ね、そうでしょう」

「うむ。存在感というのが、弱くなってきたな。ふしぎな現象だ」

「ぼくは、実在しているつもりなんですよ。早く、なんとかして下さいよ」

「いろいろ考えてはいるんだ」
それは、日がたつにつれ一段と度が進む。青年の声。
「どうですか」
男が言う。
「やあ、来てたのか。もう少し横へ。そうそう、それぐらいの暗さでないと、よく見えない。よくでなく、かすかにだ。で、なにをして毎日すごしている」
「ホテルやレストランの調理室をまわって、つまみ食いですよ。だれにも気づかれない。彼らに見えないのか、盲点にいるためか。それで、どうなんです。調査のほうは」
「まだだ」
「たぶん、だめなんでしょうね」
「そう簡単に、結論は出せないが」
「いいんです。ぼくなりに考えたのです。あきらめるべきなんでしょう。しかし、夢にも考えませんでしたよ、こんな経過で幽霊になることも、あるなんて」

輝く星

その青年は大学生だった。社会や歴史の課目が好き。頭がよく、語学も得意だったし、音楽の才能もあった。また、友達づきあいもよかった。
ある日、学校からの帰り道で、声をかけられた。
「あの、失礼ですけど。よろしかったら、そのへんでコーヒーでも飲みながら、ちょっとお話を……」
ふりむくと、年配の男がいた。いまの言葉を若い女性から聞きたかったなと思いながら、相手を観察する。五十五歳ぐらいか。まじめそうな表情だが、憂いとか深刻さのような感じも秘めていた。
「おごって下さるのですか」
そばの喫茶店に入る。男は言った。
「あなたは、入学試験の時の成績が、ずば抜けてよかったそうですね」
「よく出来たつもりですが、順番は知りませんよ。合格の通知がとどいただけです。

しかし、そういうことは、学校関係者だけの秘密事項じゃないのかなあ」
「そうなのです。だが、秘密厳守の形がつづくと、不正入学の発生する可能性も考えられるでしょう」
「かもしれませんね。それにしても、いったい、あなたはなぜ、そんな話をぼくに……」
「その、各大学の入試が妥当におこなわれているかを、調査する必要があるわけです。その権限を国から与えられている部門があり、わたしはそれに属しているのです。だから、成績を見ることができたのです。しかし、大っぴらにやると、いろいろと問題がつきまといます。ついては、ご協力いただけるとありがたいのです。なるべく内密に」
相手は礼儀ただしく、青年はいやな印象を受けなかった。
「どんなことですか」
「一種のテストを、受けていただきたいのです。日曜日の半分をつぶすことになりますが、それだけの謝礼はお払いします。目標がないから張り合いがないとお思いでしょうが、そのなかである水準以上だったかどうかは、のちほどお知らせします。他人に負けるのは、しゃくでしょう。がんばって、やってみませんか」

「そうですね。べつに損になることじゃないし」
それは次の次の日曜日におこなわれた。市民会館の一部屋で、青年は数十人の学生らしい連中とともに、答案用紙ととりくんだ。出題は各分野におよんでいた。
見まわしたが、知った人はいない。こういうことは、ほかの場所でもなされているのだろうな。あの大学で、ぼくひとりということはないはずだ。しかし、そうかどうかも内密なのだろう。
青年は、なんとか書きあげた。大失敗という個所はなかった。帰りがけに、謝礼の入った封筒をもらう。一泊旅行に行ける程度の金額が入っていた。そのほかに、紙片が入っている。一週間後のマラソン大会についての、さそいだった。十キロメートル。記録より参加する楽しみをとあり、完走した人は景品を渡すとも書かれていた。
その日になると、青年はやってみる気になった。しかし、しばらくスポーツをやっていないので、かなりきつかった。それでも、なんとか完走し、超小型のラジオをもらった。
帰宅して考える。そもそも、きょうのマラソンはなんなのだ。大学の入試の公正調査の役に立つのか。ついでに、学力と体力との関係について、統計をとろうというつもりなのか。それなら、そう言ってくれればいいのに。なにか、しっくりしないもの

が残った。

数日後、青年はあの男を、またも見かける。青年が時どき利用する近所の医院から出てきたのだ。むこうは気づかなかったようだが、いやな感じだ。ぼくの健康状態について、聞き出しに寄ったのかもしれない。いったい、なんのためだ。

やがて、通知がきた。見たところ、ダイレクト・メールのような封筒に入っていた。〈あなたの才能は、かなりのものです。今回、ある有力者の資金による財団の協力で、二十日間にわたる特別研修がなされることになりました。費用はいっさい無料です。ぜひ、ご参加いただきたく……〉

そして、集合の場所と日時が書きそえてあった。都会をはなれた、高原でやるらしい。行くかな。いや、どうも気が進まない。なぞめいたところがある。裏に秘密めいたものがひそんでいるようだ……。

疑惑がふくらむ。なんのためだ。もしかしたら。悪く考えると。あるいは、あるいは、その……。

徴兵かもしれない。戦争のために、兵士を集める。高度の才能を、よりすぐりたい。むかしは公然とできたが、いまはそうもいかない。参加したら最後、いやおうなしに近代兵器を操る訓練をさせられ、特別任務で出動させられるのではなかろうか。

といったことになったら、たまったものじゃない。国が戦争に巻き込まれるのはやむをえないにしても、直接に戦うのはごめんだ。

青年は学校を休み、旅に出た。尾行されないよう、かなり神経を使った。食料を買い込み、深い林の奥にひそんで、何日かすごした。発見され、連行されたらおしまいだ。

集合に指定された日がすぎた。もう大丈夫だろうとは思ったが、なお数日をすごしてから、家に帰る。

久しぶりに、大学へ行った。とくに変化はなかった。あれへの不参加で、罰せられることもないだろう。そんな法律は、ないのだ。

十日ほどたった夜、道で声をかけられた。

「もしもし」

いつかの男だった。青年は言う。

「よく会いますね」

「このへんに住んでますし、この地区の担当でもあったのです」

「いつかの通知、行く気にならなくて、やめました。それで、あなたの立場は悪くなりましたか」

「そんなことは、ありませんよ」

「いったい、なんだったのです、あれは」

「そこの公園のベンチで、話しますか……」

小さな公園に入る。空にひときわ輝く星があった。男は指さして言う。

「……きれいなものですね」

「新星、ノバでしょう。新聞に出ていましたね。恒星の爆発と……」

「ええ。しかし、発表されない情報もあるのです。天文学の分野も進歩しましてね、あの出現は、少し前から予知されていた。そして、ノバとなってからある期間、強い宇宙線を出すらしいのです」

「有害なのですか」

「わかりません。しかし、そうである場合を想定して、対策がたてられた。各分野から、優秀な人物が選抜された。大学生、あるいはそれに相当する年齢の者です。科学、芸術、スポーツ、さまざまな才能の人をね」

「あのテストが、そうだったのですか」

「そうです」

「その連中は……」

「山腹の洞穴のなか、金属板を張った天井の下で、研修を受けていますよ。少なくとも、そのぶんだけは向上するでしょう」

「あの星の光、有害なんでしょう」

青年は心配げに聞き、男は答えた。

「知りません。政府はパニックを恐れて、内密にことを運んだのです。有害の可能性があるからでしょうね」

「宇宙線は、コンクリートのビルぐらいでは防げない。大部分の人は、それをあびているわけだ。あなた、よく平気でいられますね」

「仕方ありませんし、無害かもしれない。いままで生きてきたのです。それに、いま娘があれに参加して、洞穴のなかにいるんですから」

「特権を活用したのですか」

「ちがいますよ。事情を知ってるわたしは、内心、つらかった。テストに合格しなかったのですからね。しかし、補欠には残っていた。そして、不参加者が出たおかげで……」

やつらのボス

「どうじゃ、わしの病気は、かなり悪化しただろう」

八十歳を越す老人が、かすれた声で言う。ここは高原地帯の林のなかの別荘。とくに大きいわけではないが、高級なつくりだった。老人は和室の中央の寝床のなかにいる。いまは夜の八時。静かだった。

「いえいえ、そんなことは……」

そばで答えたのは、四十歳ぐらいの医者だった。四日おきぐらいの割で、少しはなれた都市からやってくる。夕方にやってきて、ここに一泊することになるが、それだけの報酬はもらっているのだ。

いま、この別荘には、その二人だけ。いつもは身の回りの世話をする中年の女性がいるのだが、医者のやってくる日には、交代の形で、近所の自分の家に帰って自由にすごすことになっていた。

「かくさんでもいい。確実に悪いだろう」

老人はふたたび言い、医者は答えた。
「はあ、まあ、おとしです、だいたいのところは。しかし、できるだけの手当てはいたします。ですから……」
「口先だけのなぐさめは、いらん。わしは絶対に重態なのじゃ」
「がんこなかたですねえ」
「そうとも。これまで、信念をつらぬくことで生きてきたし、成功もした」
とくいげな口調だった。医者は首をかしげ、そして言った。
「なんだか、重態であることを楽しんでいるみたいですね。正気なんですか」
「どっちでも同じだろう。重態を楽しんでいるのは、事実なのだ。だから、病状を正直に教えてもらいたい。どうなのだ」
「おっしゃる通りです」
「どの程度だ」
「じつは、かなり……」
ためらいながら医者は言う。老人は、かすかにうなずいた。
「そうか。となると、まもなく、おむかえが来る」
「えんぎでもないことを……」

「たぶん、今夜あたり来るはずなのだ。そこの窓をあけてくれ」
老人は右手の人さし指をゆっくり動かし、寝ている頭の上のほうにむけた。暑からず寒からず、べつに害はあるまいと、医者はそれに従った。林の上に、星々が見えた。
「天使でも、やってくるんですか」
「そんなのこそ、えんぎでもないことだ。そもそも、そういうのではない。わしはな、金もうけだけで生きてきたのではない。自分なりに、いいこともしてきたつもりだ。ことあるたびに、やつらに親切にしてきた。なにかと面倒をみてきた。人びとからきらわれている傾向への同情もあった。どいつも、下っぱたちだったがね。みな感激し、いざという時には、自分たちのボスが、あなたをお助けするでしょうと言っていた。その、いざという時は、もうまもなくのはずだ。死んでしまっては、いざもなにもないものな」
しばらく考え、医者は言った。
「すごい新薬でも、持ってくるのですか。外国の研究所から強引に盗み出すとかして……」
「さあ、どういう形でかはわからない。しかし、やつらの約束は本物のはずだ。そう思う。なにかしてくれるはずだ」

「どうも、わけがわかりませんね……」

その時、玄関のチャイムが鳴った。

「だれか来た。あるいは、問題のやつかもしれない。ほかに来客の予定はないし。あけてみてくれ」

「はい」

医者は立って、なにげなく玄関のドアをあけた。

そして、一瞬、自分の目を疑い、やがて大きな悲鳴をあげようとして口をあけたが、その声も出なかった。そこには、とてつもなく巨大な蛇の頭があったのだ。

医者は二、三歩あとずさりするのがやっとで、へなへなとなり、這いながら戻ってきた。そのようすを見て、老人が言う。

「あいつのじゃまを、しないでくれ。なにが起るのかわからんが、ボスにまかせてみよう。だめで、もともと、うまくいけば、もうけものだ。なあ」

「は、はあ……」

医者は部屋のすみに行って、うずくまって、身動きひとつしないようにした。巻きぞえにされるのはかなわない。本心はあけてある窓から飛び出したかったのだが、足がふるえて不可能だった。

ドアがもう少し小さかったら、蛇の頭は入れなかったかもしれない。それほど巨大だったのだ。ゆっくりと、屋内へ。そして、廊下を通り、部屋のなかへと入ってきた。そこでちょっと動きをとめ、口でくわえ、かけぶとんをカバーもろとも払いのけた。

やがて、舌が舞ったかと思うと、老人を足のほうから飲みこみはじめた。少しずつ、静かに、口のなかへ入れてゆく。それが腰のあたりまできて、蛇はひと休みした。口をさらに一段と大きくあけようとしてだろう。

部屋のすみで、医者は息をころして見ていた。いや、呼吸をするのをさえ忘れていたのだ。こんなことが起るとは。悪夢にちがいない。

老人は、さらに飲みこまれる。自分の意志でではないが、両手を頭の上にあげる形になった。蛇の口は、肩のあたりをも飲みこむ。

あとの経過は早かった。頭が消え、両方の腕、手、指と、すべては蛇のなかに入った。医者は、その最後の老人の顔に、快感のような表情を見た。

とくに目立つというほどではないが、老人を飲みこんだため、蛇のからだはいくらかふくれた。その部分は、少しずつ尾のほうへと移ってゆく。それと同時に、蛇は進み、あけておいた窓から、頭のあたりはすでに外へ出はじめている。

「いったい、これは……」

医師はさっきから、完全に思考が停止していた。どれくらいの時間がたったか、やっとわれにかえった時は、尾の先が窓の外へと消える寸前だった。

あとを追うべきか。いや、やめたほうがいい。あれは、ばけものだ。追いつき、つかまえるなど、できるものではない。林のなかの闇に、たちまち溶けこんでしまったはずだ。

ふと、さっきまで老人のいたところに目をやる。そこに、少年が横たわっていた。眠っているようだ。わけはわからないが、とにかく人間だ。蛇ではない。職業がら、脈をみようと手首にさわる。

そのとたん、その少年は目をさまし、声をあげた。

「わーっ。いい気分。すがすがしいな」

立ちあがって、浴室へ入る。しばらくシャワーの音がつづき、少年はタオルを腰に巻きつけて出てきた。すべてが若々しく、肌が照明を受けて輝いていた。顔つきも楽しげだ。医者は声をかけた。

「元気そうだね」

「うん、とてもね。運動で疲れて、ぐっすりと眠ったあとのようだ。で、あなたは、だれ」

「医者です。ところで、きみは自分がだれか知っているのかい」

少年は頭に手をやった。

「あ、ふしぎだ。度忘れしたみたいだ。わかんない。どうしてだろう。だけど、あなたはわけを知っていそうですね。ぼくを起してくれたんですから」

「まあね」

「信用できそうなかただ。それに、お医者さんというのもありがたい。お願いです。ちゃんとした説明で教えて下さい。だけど、子供と思って、おとぎ話のような変なことはつけ加えないでね」

依頼はＯＫ

公園のベンチに、三十五歳ぐらいの男が腰かけ、文庫本を読んでいた。そこへ、初老の男がやってきて、そばにすわった。そして、小さな声で話しかけた。

「もしかしたら、あなた、ＯＫというかたではありませんか」

「さあね」

ふりむいて首をかしげる。地味な服装だが、親しみのある顔つきをしている。

「人ちがいでしたら、失礼。この時間に、ここへ来れば会えると聞いてきたもので」

「どこでです」

「占い師にですよ。駅のそばのビルの、二階で開業している……」

「そうでしたか。あそこは、わたしの窓口のひとつ。ＯＫさんはわたしとして、話を進めましょう」

「やはり、そうでしたか。ことがことだけに、もっと暗い感じの人かと思っていましたが。で、ほかにも窓口はあるんですか」

「あるところの精神分析医とかね。わたしは犯罪組織とつながりやすい職業を、敬遠しているんです。意外とお思いでしょうが」

「いえいえ、そういうものかもしれません。深みにはまると、あとが大変でしょうし」

「そんなことより、ここへいらっしゃったからには、あのことを依頼なさるおつもりなんでしょう」

とＯＫなる人物はうながし、初老の男はうなずいた。

「もちろんですよ。占い師にお聞きした相場に、いくらかつけ加えて持ってきました。ぜひとも、やりとげてもらいたいからです」

「大丈夫ですとも。これまで、どれも、うまいぐあいにやってきました。だからこそ、営業なのです」

「そうでしょう。しかし、できましたら、それらについての面白いお話を、少しお聞かせいただけませんか。なにしろ、まとまった大金をお渡しするのですから」

「ごもっともです。では、ごらんに入れましょう……」

とＯＫなる人物は、ポケットからカード状のものを出した。初老の男が受け取ってみると、新聞の切り抜きをはったもの。老眼鏡を出しかけるのを制し、ＯＫは言った。

「目立ちたくありません。わたしが、お話ししますよ。そばに書いてある新聞名と月日とを、おぼえておいて下さい。図書館ででもさがしてごらんになれば、この記事がのっていますから……」

それは、あらまし、こんな内容だった。

……ひとりの紳士が道を歩いていると、見知らぬ男に、わけもなくからまれた。紳士はとまどいながらも「よくわからない、まあ、ゆっくり話し合いましょう」と言うが、男はますます興奮する。ついに「そんなことでごまかされてたまるか、殺してやる」と、ポケットからナイフを出して、迫ってきた。

紳士は逃げて、細い道に入る。だが、そこは行きどまり。もう、どうにもしようがない。そばにあった棒を手にし、ふりあげて反撃した。すると、当り所が悪かったのか、男は倒れたまま、動かない。

やっと、パトカーが到着。紳士の立場を見るに見かねて、だれかが呼んだのだ。警官がたしかめると、男は死んでいた。ナイフを手にしており、目撃者も多く、正当防衛とみとめられた。

だれかが「ほんとに運がいい。その棒があそこになかったら、あるいは」と言う。警官はそれを持って「おやおや、これは鉄の棒ですな」とつぶやく。紳士は「そうでしたか。あの時は、もう、むがむちゅうで」とほっとし……。

ＯＫなる人物は、話につけ加えた。

「記事は、ぶっそうな世の中になったとつけ加えてありますよ。変な事件ですが、紳士が殺されなくてよかったと、だれでも思うでしょう」

聞き終って、初老の男は言った。

「しかし、もし、そこに棒がなかったら、どうなっていたでしょう」

「あらかじめ、わたしが置いておいたのですよ。そのほか、その場所には、護身用の武器になりうるものを、いくつかさりげなく配置してありました。普通の人なら、そのどれかを使うはずです。死にたくないのでね。とにかく、だれかにとって生きていては困る男がひとり、たしかにこの世から消えました」

「なるほど、そういうしかけなのですか。では、つぎの実例を……」

聞きたがる初老の男に、ＯＫは言った。

「その前に、あなたの事情も話して下さい。同じことなら、わたしだって、手伝ってよかったという気分を味わいたい。よほど、にくんでおいでなのでしょう」

「ああ、そうなんですよ。ひどい目に会わされたのです。大学を出て、しばらく外国を回りました。そして、帰国し、新しい製品を作ったのです。エキゾチックな外見の、

台所用品です。小さな工場を作り、生産をはじめた。そのころですよ、やつと知り合ったのは。いかにも親切そうにふるまい、協力的だった。わたしも工場を拡張したいので、彼の手を借りることにした」

「よくある話ですね」

「やつは、その裏で陰謀を進めたのです。出資者というのを連れてくる。そいつもぐるだったのだから、たまらない。書類の作成までまかせるほど、信用していたのです。気がついた時には、すべてやつのものとなり、わたしはほうり出されていた。弁護士に相談したが、もはや手おくれ」

「ひどいものですね」

　ＯＫは同情し、初老の男はため息をついた。

「まったくです。その時に殺していれば、よかったのでしょう。しかし、わたしには出来なかった……」

「そういうものですよ」

「わたしは再起をはかろうと、ケーキ造りの修業をした。ケーキが好きで、外国でもよく食べたものです。しかし、まだ独身だったから、修業がつづけられたのでしょう。少し前までは、小さいながらも前途有望な仕事を持った青年実業家。それがケーキ造

りの基本をおぼえようとの、弟子入りです。なさけなくて、いま思い出すと……」

「わかりますよ」

「まあ、なんとか技術を身につけ、喫茶店兼ケーキの店を出した。ほかにはない味が、売り物です。しだいに評判がひろまりましたが、拡張はしませんでした。悪質なやつに入り込まれては困るので」

「そんな心境になるでしょうね」

「というわけで、家庭を持つのが、かなりおくれた。これというのも、あいつのせいなのです。青春時代の十年以上を、むだにしたわけです。生活に余裕のできた現在、そのことを痛切に感じます。やつが没落したのならまだしも、順調にやっているのですよ。わたしの失ったぶんを、やつの人生から引いてやる。それこそ公平というものじゃないでしょうか」

　と初老の男は言い、ＯＫは応じた。

「そうですね。平然としていられないのが、当然です。このままだったら、神さまは存在しないことになる」

「だから、あなたに依頼するのです。ほっておくのは、精神的にもよくない。さあ、そちらの実績について、もう少し聞かせて下さい」

「原理は、どれも同じなんですがね……」

　OKは、べつなカードをのぞきながら話す。

　……地下鉄の駅で、ある会社の部長が、改札口を抜け、階段をおりようとしていた。その時、背後になにかを感じた。ふりかえると、包丁を手にした青年が「殺してやる」と叫んで飛びかかってきた。

　思わず、身をかわす。青年は、勢いあまってころげ落ちる。地下鉄のうちでも、とくに長い階段だった。首の骨を折ってか、即死。目撃者のしらせで、警官がくる。身をかわした部長は、そんな目に会う心当りはないと言う。死んだ青年の身もとを調べると、いろいろと悪事を働いていたことが判明。麻薬による幻覚かと検死がなされたが、その反応は発見されなかった……。

　OKは言う。

「ざっと、こんなぐあいです。やりとげたあとって、すっきりしますね。芸術家がなにかを作った瞬間って、そんなものかと思ったりしますよ」

「その部長とかの人、なぜ、さっとうまく身をかわせたのですか」

「事前の調査です。柔道が趣味で、なかなか強く、道場へかよっている。健康法のつもりなんでしょうが、そのおかげで命拾いしたわけです。それ以後、さらに熱心につづけるようになったでしょうね」

　初老の男は、質問した。

「青年を、どうやってけしかけたのです。そう簡単には、いかないと思うが」

「そこですよ。いくらかの日時が必要です。知りあいに、ならなくてはならない。話をかわし、だれかにねらわれているような気分にさせる。ここですね、こつは。正式に習ったわけじゃないが、催眠術の一種なのかもしれない。ころあいを見て、あいつだとささやき、ナイフなり包丁なりをにぎらせる。号砲一発といったところですね」

「ううん」

「場所の選定も、大切なんです。階段の上だからうまくいったので、ほかの場所だったら、取り押さえられてしまうかもしれない」

「だけど、万一だよ、さっきの話もそうだが、その凶器が相手にぐさりとささる時だって、あるわけでしょう」

「そうは、ならないのです」

「なぜ……」

「少し力が加わると、すぐ折れるように細工がしてあるのです。だから、あれを代行してくれる人が傷つくことは、ありえないのです。地下鉄の場合は、ころげ落ちた勢

いで折れたことになりましょう。鉄棒でなぐられたやつのは、証拠品として警察へ持ってかれたかもしれない。ナイフの刃の鋭さには驚くでしょうが、それで木の枝を切って見ようなど、考えない。知られないままですよ」

「ううん」

「正当防衛をやってくれる人には、ちゃんとした地位の人が適当なのです。事件は正式に処理され、あとに疑問を残さない」

ＯＫの話を聞き、初老の男は感心しながらも、ふしぎがった。

「それにしても、うまくゆくものですね」

「事前の調査もありますが、そういうことに、わたしがむいているというのでしょうね。ある種のゲームも、プロに近くなると、先の先まで見えてしまうそうですよ。わたしも、そう。ここで引金をひけば、どう進行し、どうなるか、頭のなかに構図が出来てしまうんです。ある人からは、わたしがそう念じるから、そう展開するのだとも言われたりしますがね」

ＯＫなる男がつぶやくように言うと、初老の男は深くうなずいた。

「オカルト・キラー。略して、ＯＫか。たしかに、超能力の殺し屋ですね」

「殺し屋という呼ばれ方は、好きじゃないんです。万事ＯＫのＯＫで、いいじゃありませんか。自分では、社会生活向上コンサルタントと思っているんですよ」

「しかし、いままで何回なさったのか知りませんが、失敗していないとなると、ただごとじゃない。死神ですね。いやいや、悪い意味じゃありませんよ。神秘だ。目撃者たちは、なにかにとりつかれての異変に見えることでしょうね」

「どうでしょう。その道に徹したら、みな、かなりのところまで行くんじゃないでしょうか。あなたはケーキを作る。においだけで、できそこないを発見なさるんじゃありませんか。ハンマーでたたいただけで、金属成分をみわける人がいる。同時通訳なんか、人間わざと思えません。家具職人なんかで、すごい人の話を読みましたよ」

「しかし、そういうのと、ちょっとちがうように思えますよ」

「それは、わたしのほかに、この分野を手がける人がないからじゃありませんか」

しばらく考え、初老の男が聞いた。

「そもそものきっかけは……」

「ご想像できませんか」

「必要に迫られてでしょうね」

「そうなんです。どうしても許せないやつがいてね。殺してやりたいが、手をよごしたくないし、つかまりたくもない。そこで、考えたわけですよ。まず、殺すという結

末を、ほかのものに置きかえ、知人たちを使って実験した。充分にたしかめた上で、実行したら、うまくいったのです。そのうち、同じ悩みを持つ人も多いだろう。この技術を役立たせてみようと……」

「そうでしたか」

「趣味と実益なのかもしれませんね。あと味も、いいでしょう。記事になっても、運よく助かったという扱いです。殺人じゃないのですよ。仕組まれた結果だなど、だれも考えない。まして、その裏に依頼人があったなど……」

「わかりました。じゃあ、これを……」

初老の男は封筒を二つ渡した。ひとつには札束が、ひとつには目標の人物の住所、姓名、年齢を書いたメモと写真が入っている。

「たしかに。確実にやりとげるとの意味でもあるのですよ。もう、お会いすることもないでしょう。ひとり二回は引き受けない。あなたは、近くそいつの死を知る。それで、なにもかも一段落です」

「なにぶん、よろしく」

「おそくて二週間です」

二人は別れた。

十日ほどして、あいつの死亡通知がとどいた。ずっと交際はなかったが、昔の知人ということで、関係者が宛名を書いてくれたのだろう。

「ついに、やってくれたか……」

いい気分になり、ウイスキーを飲みかけた時、大学生の娘が帰宅して言った。

「ねえ、きょう、あわやという目に会ったのよ」

「どうしたんだ」

「どうしたもないの。まるで知らない中年の女の人が、ナイフを持って襲いかかってきたの。悲鳴をあげて逃げたら、そばに小石の山があったのよ。それをつぎつぎにぶつけてやったら、顔に当ったわ。手で目のへんを押さえて、うろうろ。そこへトラックでしょ。これ以上は話せないわ」

「さぞ、こわかっただろう」

「見てた人が何人もいたし、悪いのはむこうと、かけつけた警官もわかってくれたわ。だけど、うまいぐあいに、あそこに石ころの山があったものね。あれで助かったの。運がいいとしか考えられないわ」

結晶

「こんなことが、あるとはねえ。面白い体験をしたよ」
友人がやってきて話しはじめた。聞く価値はありそうだし、聞いてやらないと帰りそうにない。
「退屈していたところだ。ちょうどいい」
「ポストに封筒が入っていた。それがことの起り。表にも裏にも、なんにも書いてない。なかをあけると、白い紙が一枚」
「なんにもなしか」
「いや、よく見ると、結晶がひとかけら。〇・五カラットぐらいのダイヤモンドといったところかな。その紙に包まれていたっていうわけ」
「もうけたな」
「宝石じゃあ、ないんだよ。薬品のような気がする。水にとかしてみようかなと思った。その時、声がしたんだ。アルコールってね」

「だれの声なんだ」
「わからない。老人じみた声だったがね。薬用アルコールのあったことを思い出し、ウイスキーグラスに少し入れ、そのなかへ結晶をほうりこんでみた」
「爆発でもしてたら、大変じゃないか」
「そう思ったのは、入れてしまったあと。茶色っぽい煙がたちのぼり、それがしだいに形をとって、ひとつのものとなった」
「なんだったのだい、それは」
「わからない。動物であることは、たしかだ。陸上の哺乳類。クマのようでもあり、パンダのようでもあり、リスのようでも、コアラのようでも、タヌキのようでも、ゾウのようでも、キリンのようでも……」
「ゾウとキリンとは、似てないぜ」
「ゾウのような目で、キリンのような耳なのさ。全体的にふわふわした印象で、うまくできた、生きているヌイグルミ……」
「生きてるって、どうしてわかる」
「じゃれついてきたもの。そして、やがて、もとに戻った」
「もとって、なんなのだい」

「話を飛ばせすぎたな。アルコールが蒸発してなくなり、グラスの底に結晶が残っていたというわけさ。そういうしかけなんだ」
「妙な現象だな。また、やってみたくなっただろう」
「もちろんね。かわいらしいやつだしね。しかし、つぎはちがったんだ。なんと、すごい美女があらわれた」
「それは、うらやましい」
「ところが、そうじゃないんだ。ぼくはまんざらでもなかったが、相手の態度だよ、問題は。ぼくを見て、おびえている。話しかけると、悲鳴をあげはじめた。どうにも、手の打ちようがない。なにかいい方法はないかと考えているうちに、もとへ戻ってしまった」
「消えて、結晶になったのか」
「ああ。そのつぎにやったのは、翌日の夜だった。火の玉のようなものがあらわれ、窓から外へと飛び出していった。ぼくも身を乗り出して、空を見あげたよ」
「UFOといったとこか」
「ほかの人が見たら、そう思うだろうな。おかしな飛び方だものね。もとはといえば、ひとかけらの結晶なのに」

「そのつぎは、どうだった」
「気になるだろう。しかし、なんにも変化なし。そんなはずはないと、よく見た。机の上のグラスのまわりを、アリが三重の環状になって、ぐるぐるはい回っている。内側と外側が同じ方向で、中間のが逆。あんなの、はじめて目にした。催眠術にかけられたような気分になった。気がつくと、そばに老人が立っていた。そして、いいかげんでやめなさいと言う。最初の、アルコールとの声の主が、そいつだったのだろうな」
「なぜ忠告したんだろう」
「わからんね。それを聞く前に、もとへ戻ってしまったんだ。アリたちも消えて」
「それで、やめにしたのか」
「やめられるものじゃないよ、ここまで来ては。つぎつぎに、目を楽しませてくれるのだもの」
「で、なにが出た」
「あれには、まいった。死んだおやじが出てきた。姿勢ただしく立ち、ぼくを見つめて、だまったままだ。どなってくれたほうが、まだしもなんだがね」
「話しかけてみたかい」

「とても、そんな気には、なれなかった。会話を拒否してるって感じだったな。どうって、うまく説明できないけどね」
「そういうものかも、しれないな。で、そのへんでやめようって気に……」
「いやいや、つぎは、それをおぎなうような、面白いものかもしれないじゃないか」
「どうなった。期待どおりか」
「いま話すよ。いかにも凶悪そうな男が出現した。なぐりかかってくる。このままではやられると思ったね。にくにくしい顔つきなんだ。ぼくは抵抗した。相手の首をしめ、気がついたら、やつは死んでいた。困ったことになったなと思っていたが、やがて死体は消えた。これを面白いというかどうか」
「結局は、夢のようなものなんだな。目をあけて見る夢、そのための薬といったとこだな。殺人の夢で、気がはれれば、それでいいといえるんじゃないかな」
「ぼくも、そんなふうに思ったよ。そのつぎにやったら、また、あの老人が出現した。そして、いいかげんでやめなさいと言い、ぼくは、もっと強烈なものを見せてくれなくてはと言った」
「そうだろうな」
「それなら、飲まなくてはだめです、水を加えてと言う」

「やったわけか」
「ああ。そして、見たんだ。あんな光景があるとはね。老人の説明だと、死後の世界なんだそうだ」
「どんなふうだった」
「口どめされたわけじゃないんだが、どう形容したものか。たとえようにも、似たものがないんだからな」
「まあ、言うだけ言ってみてくれないかな」
「そうだ、老人がつけたした。この体験、つまり、これを見た人間は、それで終りなんだと」
「なんだ、全部が冗談か。きみはちゃんと、ここでこうして……」
その時、友人の姿は薄れて消えた。いままでいたのに。床を見ると、なにかが、きらりと光った。つまみあげてみると、ダイヤモンドのような美しい結晶がひとつ。

窓の奥

山のなかの道だった。起伏のある細い道を、おれは歩いている。めったに人が通らないらしい。草が茂って見わけにくくなっていたり、ころげてきたのか小さな岩塊があったりした。林を抜け、ちょっとした草地を過ぎ、また林に入る……。

「助けてくれ……」

そんな声を聞いたような気がした。思わず足をとめる。なぜか、いやに親しみのある声だったのだ。いったい、どこから。あたりを見まわす。うしろからではあるまい。注意して、少し歩く。林を抜け、視界が開けた。おれの目は、右の上のほうにいった。かなり急な斜面になっていて、岩が突き出ていたり、ところどころに草が生えていたりした。そして、その上に建物。見あげると、首が痛くなるほどだった。

西洋風の古びた家屋。古びてはいるが、けっこう大きく、がっしりしている印象を受けた。金にあかせて建てた別荘。しかし、なにかの失敗で没落し、売ろうにも交通の便がいかにも悪いため買手がつかず、そのまま年月がたった。そんな感じなのだ。

「すごいものを作ったな」

つぶやきながら、見あげつづける。その二階の窓のひとつのなかで、なにかが動いた。人かげのようだ。助け出してくれという、身ぶりをしているのではなかろうか。さっきの声と関連させてか、おれはそう考えた。

いってみるか。

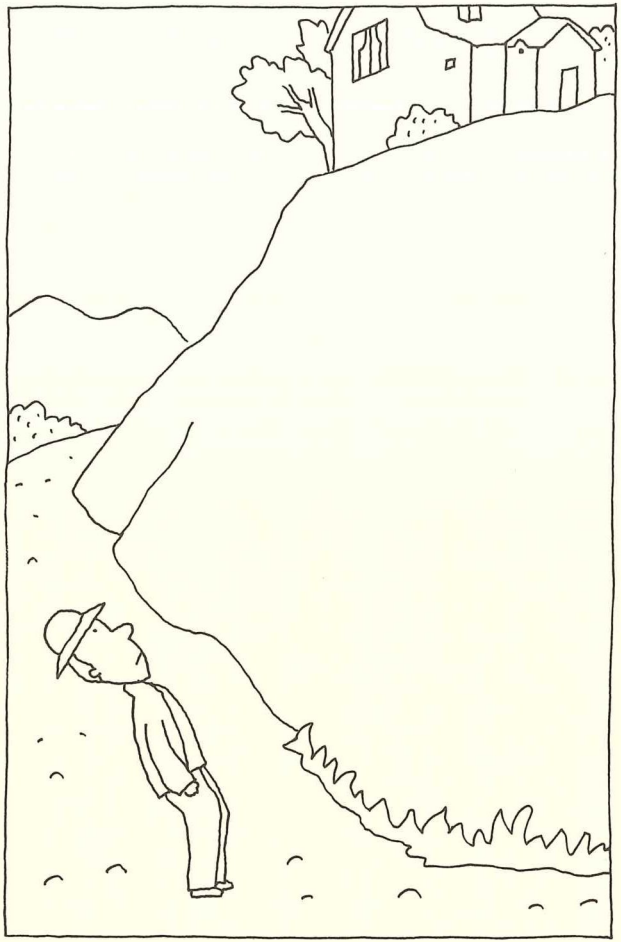
危険といったものは感じなかった。むしろ、好奇心だった。あんなところに、なぜとじこめられ、なぜ助けを求めているのだろう。それとも、だれかが入りこみ、あそこで足でもくじいたのか。

よくたしかめようと、目をこらす。空は晴れていて明るく、その明るさのため、かえって窓の内部がよくわからない。しかし、なにかが動いているのは、気のせいだけではないようだ。

助けてやらなくてはという気分は、いっそう強くなっていた。

しかし、どうすれば。そこのがけは、のぼるにはあまりに急だった。とにかく、道はあるはずだ。少し進んで林のなかに入ってみた。だが、右へまがる道はなく、このままだと遠ざかる一方のようだ。

引きかえし、さっきの地点へ戻る。がけはそこにあり、建物は依然としてその上に



存在し、二階の窓のなかでの動きはつづいている。

おれはさらに進む。つまり、さっきの道を少し逆にたどったのだ。すると、左への小道をみつけた。こっちからだと思わせる形で、ゆるくカーブしていた。

少しのぼり坂で、これならたぶん、近づいているのだろう。まさしくそうで、やがて、小さな門にたどりついた。白いペンキのほとんどはげた、木製の門だ。

「なんのための門だ……」

どこか変だった。しかし、やがてわかる。生け垣として植えた木々がすっかり伸びたため、門が周囲と調和しなくなってしまっていたのだ。

その門は建物にくらべて小さく、あるいは裏門なのかもしれなかった。表門がどうなのかは、あとでゆっくり調べよう。まずは、あの部屋へ行かなくては。

建物に近づく。右手のほうに、荒れはててはいるが、広い庭が見えた。その見物も、あとまわしだ。小さな出入り口があった。勝手口なのだろう。あいてくれればいいが。

そう期待して、ノブをまわした。簡単に開いた。なんという不用心。そう思ったが、すぐになっとくした。盗むようなものは、なんにもないのだ。

がらんとしていて、ほこりが静かにつもっていた。天井の隅に、クモが巣を張っていた。持ち出せそうなものといえば、窓の内側の薄いカーテンぐらいか。しかし、か

なりよごれており、持ち出したところで、なんの得にもならない。

カーテン。そうか、おれが見たのは、カーテンの揺れだったのかもしれない。ばかばかしい。腹が立ち、床にころがっている洋酒のびんのひとつを手にし、そばの窓にぶつけてみた。大きな音が響いた。

こなごなに割れたのは、びんのほうだった。窓には、強化ガラスが使われているらしい。これを建てた人は、よほどの金持ちだったのだろう。そう思ってあたりを見ると、不燃建築でもあるようだ。

またも好奇心が高まった。これだけ費用をかけた家だ。なかの見物ぐらいしておこう。そばのドアをあける。

そこは広間だった。家具はなにもなく、シャンデリアさえなかった。こういう場所にありがちな、湿気を含んだよどんだ空気のにおいもなかった。空虚だけがそこにあった。

階段をのぼる。問題の部屋の見当は、すぐについた。ノックをしたが、返事はない。声もかけてみる。

「だれかいますか」

答えもない。たしか、ここなのに。ドアをあける。なかへ入る。広めの部屋で、こ

れといったものはなにもない。しかし、ほんの少し前まで人のいたというけはいは、残っていた。下の広間と、どこかちがう。

そとの景色も眺めたかったが、まず、となりの部屋を調べてからだ。ドアのノブに手をかける。無意識のうちにしめたのか、しぜんにか、ドアはしまっていた。

そして、それはあかなかった。ちょうど、ホテルの部屋で、表と裏を逆にしてドアをとりつけたといったところだ。自動的にしまり、カギがない限りあかない。

部屋じゅうを見まわしたが、カギらしいものはなかった。それに、よく調べたら、ドアにはカギ穴がついていなかった。

出られない。

そのことに気づいた時、頭のなかが熱くなった。窓へ寄る。下のほうを押すと、斜めに少しだけ開いた。しかし、それだけのこと。かりになんとかして、ガラスを割るなり、窓わくをこわすなりしたとする。二階とはいえ、地面は岩の多いがけにつづいているのだ。飛びおりてぶじとは、とても思えない。綱でもあればと思うが、部屋のなかには、なんにもない。ここには、カーテンすらなかった。窓からの脱出は、できないのだ。

夕ぐれとなり、夜となった。おれは救出されることを念じ、念じ疲れてうとうとし、

また念じた。朝になるまで。

明るくなった。窓からそとを見る。がけの下は草地で、その両側は林。きのう歩いたところだ。そして、前方には、遠くまで樹海がひろがっている。

脱出の方法は、考えつくした。ドアと窓以外になく、両方ともどうしようもないのだ。壁は厚く固く、よほどの道具がなければ、こわすことはできないだろう。だれかに来てもらう以外にないのだ。ここのドア、そとからなら簡単にあくはずだ。きのうはそうだったのだ。

窓から見おろし、待った。だれかが通るのを、見のがしたらことだ。注意しながら、おれは念じた。だれか現れてくれと。

その願いが通じたのか、午後になり、左の林のなかに歩く人かげを見た。叫ぶ。

「助けてくれ……」

その人かげは移動し、窓の下の草地で立ちどまり、こっちを見あげた。そのとたん、おれは声が出なくなった。見あげているのは、なんということ、おれ自身ではないか。下のおれは、右の林へと進んでいったが、また戻ってきて、こっちを見あげる。声にならないので、身ぶりで存在を示す以外にない。やがて、左の林へと入ってゆく。それから先、どう行動するか、わかりきったことだ。

そうか。きのうこの窓のなかに見たのは、おれ自身の幻影だったのだな。となると、ここにいるおれ、いま近づきつつあるおれ、どっちが幻影なのだろう。下のほうから、びんの割れる音が聞こえてきた……。

あとがき

これからの私の文庫は、解説なしになる。考えてみれば、小説を解説つきで読むなど、やはり不自然だ。むかし、映画館のとなりの席で、いちいち説明をする友人がいて、うんざりしたことがある。

社会問題や国際関係なら、人間集団がからむので、解説も必要だろう。しかし、娯楽的なものに、よけいなことは加えないほうがいい。わからない部分があれば、どこかに欠点があるのだ。

まあ、それは理屈で、内心ではだれも知っている。その作者の好ましいエピソードを紹介し、読後感をよりよいものにできれば、それでいい。

当人を知っていれば、内容を見なくても解説は書ける。逆に、知らない人のは、熟読しても書きにくい。つまり、私について、その資格をそなえた人が、一巡してしまった。たのみようのないのが、正直な理由。

そうなると、自分で「あとがき」を書くことになる。本書は、昭和五十五年（一九八〇）の二月に刊行。読みかえしてみたが、そのころの事件は、なにも思い出せない。

調べてみて、そんなこともあったなだ。

時事風俗と離れようとの方針が、なんとか軌道に乗ったようだ。だれがなんと言おうと、私は小説の理想の形と思っている。とくに日本の場合は。

二十年前とくらべて、世の中はいかに大きく変化したか。十年後だって、予想以上に変るだろう。流行の品や言葉を使うと、たちまち古くなる。小説の書きにくい時代だ。実例をあげてもいいが、それもすぐに古びて、わけがわからなくなる。

これが、ノンフィクションの分野や、研究的な文なら、あらかじめ覚悟して書くから、それでいい。しかし、短編のフィクション作家が看板となると、それなりの努力をすべきだろう。

なんだか、こみいった文になってきた。つまりは、こうなのです。

「読んで、話がわかり、面白いと感じていただけましたか」

イエスの割合の多い気分でしたら、もうそれで私は満足です。

（平成元年二月）

この作品は昭和五十五年二月新潮社より刊行された。

星新一著

ボッコちゃん

ユニークな発想、スマートなユーモア、シャープな諷刺にあふれる小宇宙！　日本SFのパイオニアの自選ショート・ショート50編。

星新一著

ようこそ地球さん

人類の未来に待ちぶせる悲喜劇を、卓抜な着想で描いたショート・ショート42編。現代メカニズムの清涼剤ともいうべき大人の寓話。

星新一著

気まぐれ指数

ビックリ箱作りのアイディアマン、黒田一郎の企てた奇想天外な完全犯罪とは？　傑出したギャグと警句をもりこんだ長編コメディー。

星新一著

ほら男爵現代の冒険

〝ほら男爵〟の異名を祖先にもつミュンヒハウゼン男爵の冒険。懐かしい童話の世界に、現代人の夢と願望を託した楽しい現代の寓話。

星新一著

ボンボンと悪夢

ふしぎな魔力をもった椅子……。平和な地球に出現した黄金色の物体……。宇宙に、未来に、現代に描かれるショート・ショート36編。

星新一著

悪魔のいる天国

ふとした気まぐれで人間を残酷な運命に突きおとす〝悪魔〟の存在を、卓抜なアイディアと透明な文体で描き出すショート・ショート集。

星新一著

おのぞみの結末

超現代にあっても、退屈な日々にあきたりず、次々と新しい冒険を求める人間……。その滑稽で愛すべき姿をスマートに描き出す11編。

星新一著

マイ国家

マイホームを〝マイ国家〟として独立宣言。狂気か？　犯罪か？　一見平和な現代社会にひそむ恐怖を、超現実的な視線でとらえた31編。

星新一著

妖精配給会社

ほかの星から流れ着いた〈妖精〉は従順で謙虚、ペットとしてたちまち普及した。しかし、今や……サスペンスあふれる表題作など35編。

星新一著

宇宙のあいさつ

植民地獲得に地球からやって来た宇宙船が占領した惑星は気候温暖、食糧豊富、保養地として申し分なかったが……。表題作等35編。

星新一著

午後の恐竜

現代社会に突然巨大な恐竜の群れが出現した。蜃気楼か？　集団幻覚か？　それとも立体テレビの放映か？――表題作など11編を収録。

星新一著

白い服の男

横領、強盗、殺人、こんな犯罪は一般の警察に任せておけ。わが特殊警察の任務はただ、世界の平和を守ること。しかしそのためには？

星新一著

夢魔の標的

腹話術師の人形が突然、生きた人間のように喋り始めた。なぜ？　異次元の世界から不気味な指令が送られているのか？　異色長編。

星新一著

妄想銀行

人間の妄想を取り扱うエフ博士の妄想銀行は大繁盛！　しかし博士は、彼を思う女からとった妄想を、自分の愛する女性にと……32編。

星新一著

ブランコのむこうで

ある日学校の帰り道、もうひとりのぼくに会った。鏡のむこうから出てきたようなぼくとそっくりの顔！　少年の愉快で不思議な冒険。

星新一著

人民は弱し 官吏は強し

明治末、合理精神を学んでアメリカから帰った星一（はじめ）は製薬会社を興した――官僚組織と闘い敗れた父の姿を愛情こめて描く。

星新一著

明治・父・アメリカ

夢を抱き野心に燃えて、単身アメリカに渡り、貪欲に異国の新しい文明を吸収して星製薬を創業――父一の、若き日の記録。感動の評伝。

星新一著

おせっかいな神々

神さまはおせっかい！　金もうけの夢を叶えてくれた〝笑い顔の神〟の正体は？　スマートなユーモアあふれるショート・ショート集。

星新一著

にぎやかな部屋

詐欺師、強盗、人間にとりついた霊魂たち——人間界と別次元が交錯する軽妙なコメディー。現代の人間の本質をあぶりだす異色作。

星新一著

ひとにぎりの未来

脳波を調べ、食べたい料理を作る自動調理機、眠っている間に会社に着く人間用コンテナなど、未来社会をのぞくショート・ショート集。

星新一著

だれかさんの悪夢

ああもしたい、こうもしたい。はてしなく広がる人間の夢だが……。欲望多き人間たちをユーモラスに描く傑作ショート・ショート集。

星新一著

未来いそっぷ

時代が変れば、話も変る！　語りつがれてきた寓話も、星新一の手にかかるとこんなお話に……。楽しい笑いで別世界へ案内する33編。

星新一著

さまざまな迷路

迷路のように入り組んだ人間生活のさまざまな世界を32のチャンネルに写し出し、文明社会を痛撃する傑作ショート・ショート。

星新一著

かぼちゃの馬車

めまぐるしく移り変る現代社会の裏の裏のからくりを、寓話の世界に仮託して、鋭い風刺と溢れるユーモアで描くショートショート。

星新一著

できそこない博物館

未公開だった創作メモ155編を公開し発想の苦悩や小説作法を明かす。神様の頭の中が垣間見られる、とっておきのエッセイ集。

星新一著

エヌ氏の遊園地

卓抜なアイデアと奇想天外なユーモアで、夢想と現実の交錯する超現実の不思議な世界にあなたを招待する31編のショートショート。

星新一著

盗賊会社

表題作をはじめ、斬新かつ奇抜なアイデアで現代管理社会を鋭く、しかもユーモラスに風刺する36編のショートショートを収録する。

星新一著

ノックの音が

サスペンスからコメディーまで、「ノックの音」から始まる様々な事件。意外性あふれるアイデアで描くショートショート15編を収録。

星新一著

夜のかくれんぼ

信じられないほど、異常な事が次から次へと起こるこの世の中。ひと足さきに奇妙な体験をしてみませんか。ショートショート28編。

星新一著

おみそれ社会

二号は一見本妻風、模範警官がギャング……。ひと皮むくと、なにがでてくるかわからない複雑な現代社会を鋭く描く表題作など全11編。

星新一著　**たくさんのタブー**

幽霊にささやかれ自分が自分でなくなってあの世とこの世がつながった。日常生活の背後にひそむ異次元に誘うショートショート20編。

星新一著　**なりそこない王子**

おとぎ話の主人公総出演の表題作をはじめ、現実と非現実のはざまの世界でくりひろげられる不思議なショートショート12編を収録。

星新一著　**どこかの事件**

他人に信じてもらえない不思議な事件はいつもどこかで起きている——日常を超えた非現実的現実世界を描いたショートショート21編。

星新一著　**安全のカード**

青年が買ったのは、なんと絶対的な安全を保障するという不思議なカードだった……。悪夢とロマンの交錯する16のショートショート。

星新一著　**凶夢など30**

昼間出会った新婚夫婦が殺しあう夢を見た老人。そして一年後、老人はまた同じ夢を……。夢想と幻想の交錯する、夢のプリズム30編。

星新一著　**ありふれた手法**

かくされた能力を引き出すための計画。それはよくある、ありふれたものだったが……。ユニークな発想が縦横無尽にかけめぐる30編。

新潮文庫最新刊

上橋菜穂子著　**風と行く者**
—守り人外伝—

〈風の楽人〉と草市で再会したバルサ。再び護衛を頼まれ、ジグロの娘かもしれない若い女頭を守るため、ロタ王国へと旅立つ。

白石一文著　**君がいないと小説は書けない**

年下の美しい妻。二十年かたときも離れることがなかった二人の暮らしに、突然の亀裂が——。人生の意味を問う渾身の自伝的小説。

七月隆文著　**ケーキ王子の名推理（スペシャリテ）6**

颯人は世界一の夢に向かい国際コンクール代表選に出場。未羽にも思いがけない転機が訪れ……尊い二人の青春スペシャリテ第6弾。

松本清張著　**なぜ「星図」が開いていたか**
—初期ミステリ傑作集—

清張ミステリはここから始まった。メディアと犯罪を融合させた「顔」、心臓麻痺で急死した教員の謎を追う表題作など本格推理八編。

新潮文庫編　**文豪ナビ　松本清張**

40代で出発した遅咲きの作家は猛然と書き、700冊以上を著した。『砂の器』から未完の大作まで、〈昭和の巨人〉の創作と素顔に迫る。

志川節子著　**芽吹長屋仕合せ帖**
日照雨

照る日曇る日、長屋暮らしの三十路の女がご縁の糸を結びます。人の営みの陰影を浮かび上がらせ、情感が心に沁みる時代小説。

八木荘司著
ロシアよ、我が名を記憶せよ
敵国の女性と愛を誓った、帝国海軍少佐がいた！激闘の果てに残された真実のメッセージ。明治日本の戦争と平和を描く感動作！

白尾悠著
いまは、空しか見えない
R-18文学賞大賞・読者賞受賞
あなたは、私たちは、全然悪くない——。暴力に歪められた自分の心を取り戻すため闘う少女たちの、希望への疾走を描く連作短編集。

燃え殻著
すべて忘れてしまうから
良いことも悪いことも、僕たちはすべて忘れてしまう。日常を通り過ぎていった愛しい思い出たちを綴る、著者初めてのエッセイ集。

井上ひさし著
下駄の上の卵
敗戦直後の日本。軟式野球ボールを求めて、山形から闇米抱え密かに東京へと向かう少年たちのひと夏の大冒険を描いた、永遠の名作。

西條奈加著
金春屋ゴメス
芥子の花
上質の阿片が海外に出回り、その産地として日本や諸外国からやり玉に挙げられた江戸国。ゴメスは異人が住む麻衣椰（マイヤ）村に目をつける。

西條奈加著
金春屋ゴメス
日本ファンタジーノベル大賞受賞
近未来の日本に「江戸国」が出現。入国した辰次郎は「金春屋ゴメス」こと長崎奉行馬込播磨守に命じられて、謎の流行病の正体に迫る。

新潮文庫最新刊

H・P・ラヴクラフト
南條竹則編訳
アウトサイダー
—クトゥルー神話傑作選—
廃墟のような古城に、魔都アーカムに、この世ならざる者どもが蠢いていた——。作家ラヴクラフトの真髄、漆黒の十五編を収録。

D・E・ウェストレイク
木村二郎訳
ギャンブラーが多すぎる
ギャンブル好きのタクシー運転手が殺人の容疑者に。ギャングにまで追われながら美女とともに奔走する犯人探し——巨匠幻の逸品。

伊坂幸太郎著
クジラアタマの王様
どう考えても絶体絶命だ。製菓会社に勤める岸が遭遇する不祥事、猛獣、そして——。現実の正体を看破するスリリングな長編小説！

辻村深月著
ツナグ　想い人の心得
僕が使者（ツナグ）だと、告げようか——？死者との面会を叶える役目を継いで七年目、歩美に訪れる決断のとき。大ベストセラー待望の続編。

加藤シゲアキ著
チュベローズで待ってる　AGE22
就活に挫折し歌舞伎町のホストになった光太は客の女性を利用し夢に近づこうとするが。野心と誘惑に満ちた危険なエンタメ、開幕編。

加藤シゲアキ著
チュベローズで待ってる　AGE32
気鋭のゲームクリエーターとして活躍する32歳の光太は、愛する人にまつわる驚愕の真相を知る。衝撃に溺れるミステリ、完結編。

ご依頼の件

新潮文庫　ほ－4－40

平成　元　年四月二十五日　発行
平成二十七年十月二十五日　四十九刷改版
令和　四　年八月　五　日　五十五刷

著者　星新一
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二－八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六－五四四〇
読者係(〇三)三二六六－五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・株式会社大進堂
© The Hoshi Library 1980　Printed in Japan

ISBN978-4-10-109840-1 C0193